経　営　改　善　助　成
課　題　研　究　助　成

実　践　報　告　集

―― 令和３年度 ――

おかげさまで70周年

NIKKYOKO 2022

公益財団法人　日本教育公務員弘済会富山支部

は じ め に

「“書いてまとめる”ことが自分の考えをまとめることになり、それが子供たちへの指導につながっていくと感じました。」この言葉は、教育振興奨励助成贈呈式での受賞された先生方の感想でした。

課題研究奨励助成報告を提出された若手教職員たちの「…手立てを考えていきたい」「…実践を通じて学んでいきたい」「…効果を高めていきたい」等の言葉から、子供たち一人一人を見つめ育てたいという熱き想いを感じました。

経営改善奨励助成の論文や教育助成の報告では、富山県教育委員会が重点としてきている「子供の可能性を引き出し、才能や個性を伸ばす教育の推進」に沿った、手間暇をかけ、ぬくもりのある継続した取組みの実践が報告されています。

どの学校でも活用できる論文であり、教職員に参考となる報告でありますので各学校では是非生かしていただき、これまで以上に活力ある教育活動を展開していただければ幸いです。

今後もより実践的な指導力を高め、本県教育の発展と学校(園)の教育目標の実現に向けた日々の教育活動に生かしていってもらうことを心から願い、各事業に取り組んでまいりたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

令和4年2月

公益財団法人　日本教育公務員弘済会富山支部
支部長　青　木　正　邦

励ましのことば

令和2年度より教育振興事業選考委員会委員長を仰せつかりました神川と申します。本日の「教育振興奨励助成」贈呈式にあたり、ご挨拶と励ましの言葉を述べさせていただきます。

改めて、弘済会の歴史と理念を確認しましたところ、昭和27年の創立以来「明日を担う子ども達のために」という理念を掲げ、教育に携わる全ての方々を支えてこられました。弘済会事業のおかげで、本県教育の今日があることに気づくとともに、「人生100年時代において、創立当時に子どもだった私どもが、未来の子ども達のために、できる事を考え続け、バトンを渡し続けていきたい」という気持ちにさせて頂きました。

今回の「経営改善奨励助成」では学校部門に39件、個人部門に11件の合計50件の応募があり、最優秀賞1件、優秀賞2件、優良賞3件、個人奨励賞3件を選考しました。

最優秀賞の福光中部小学校では「主体的に学ぶ若手教員の育成を目指して」を研究主題に、メンター方式を導入して若手教員が無理なく主体的に自己研鑽に取り組みスキルアップを図ることができたと同時に、メンター自身の指導力や若手育成の意欲向上に繋がったとしています。

優秀賞の速星中学校では、「コロナ禍の学校休業期間における生徒の学習補償に関する実践」としてコロナ禍における生徒や保護者の不安に対峙して、教師集団が問題意識を共有し、既存の教育資源を最大限に活用し、オンライン教材の配信を計画し実践する過程で、教師自身も学習を深め、自己有用感を高めて、課題に挑戦し続ける教師集団が育ったとしています。

個人部門で優秀賞に選考された牧野中学校の古志野成先生、楠良太先生の取り組みも、コロナ禍における挑戦として「オンラインで学校を変える」として、学校休業中にホームページやネットミーティング、全教科の授業動画作成、配信により、校長、教師、生徒、保護者間の情報共有を通し、信頼関係を築き、さらに教師間の共同作業や生徒の学びの可能性を拡大することができたとしています。

また、優良賞や個人奨励賞を受賞された研究のどれもが、研究の背景に、予想外に長引いているコロナ禍の危機においても、子ども達の学びを止めないようにと、真に子どもを愛し、学校現場が中心となってこれまで以上に楽しく、生徒も教員も安心して学び合い、信頼される場所となるようにという熱い願いが感じられました。

選考委員の皆様からも、どの研究論文も学校運営や授業研究に挑戦的に取り組む姿勢が窺え、読み応えがあり、甲乙つけがたく、審査をさせて頂きながら、多くの刺激を受け、力を頂いたという共通の声を頂きました。私も同感で、コロナ禍という厳しい環境下においても、子ども達の学びを止めないように、新しい技術を活用し、できる事を考え続けて、校長先生、教職員の皆様、そして児童・生徒たちが多様な課題に、怯むことなく積極的に学校全体が協働する喜びを実感しながら、創造的な姿勢で取り組まれていることに、富山県の教育の未来に大いなる希望と明るさを確信いたしました。

今後も弘済会の教育振興助成は、変化の著しい社会環境の中で押し寄せてくる様々な教育課題に果敢に立ち向かい課題解決を目指す学校や団体、グループや個人を応援し続けて頂きたいと思います。そして本県の教育に携わる全ての皆様には今後とも教育の振興、発展、質の向上のために、お力を発揮してくださることを心より期待しております。今後は県内の教育現場のみならず日本全体や世界の子ども達が、コロナ禍に代表されるような変化が激しくリスクの予測しにくい人生100年時代を、夢を持ち続けて生き抜く力を育成するために貢献してくださることを願いまして、刊行の言葉にさせて頂きます。

令和4年2月

富山大学名誉教授
教育振興事業選考委員会委員長
神川康子

教育振興奨励助成の主旨

公益財団法人日本教育公務員弘済会富山支部

弘済会の教育振興事業は、子供たちの健やかな成長を願い、研究・研修を実践されておられる、教育関係者及び団体等を支援する事業です。

ここに、本県教育の充実発展に寄与するため、次の助成を行います。

1　経営改善奨励助成

経営改善・工夫を研究テーマに掲げて取り組む学校や学年・教科等の部会に対し助成を行い、さらに優秀な報告(論文)に対して奨励金を給付します。

・最優秀賞(1件)、優秀賞(2件)、優良賞(3件)、個人奨励賞(3件)

2　課題研究奨励助成

学校経営の一翼を担い、今日的な課題を掲げて研究実践に取り組む30歳以下(31歳以上の新規採用教職員は3年次まで)の教職員からの申請(650件)に対し助成を行い、さらに昨年度の報告(595件)のうち優秀な報告(研究)に対して、奨励金を給付します。

・優秀賞(20件)

・優良賞(30件)

3　教育団体研究助成

本県教育の一層の振興を図るため、幼・小・中・高校(園)長会をはじめ、教頭会、教育研究会などの団体に対して、助成を行います。

・教育団体研究助成(12件)

目　　次

はじめに　支部長　青　木　正　邦

励ましのことば　富山大学名誉教授 教育振興事業選考委員会委員長　神　川　康　子

教育振興奨励助成の主旨

◇　経営改善奨励助成受賞論文

・主体的に学ぶ若手教員の育成を目指して
　南砺市立福光中部小学校　校長　棚　田　賢　也 …… 1

・コロナ禍の学校休業期間における生徒の学習補償に関する実践
　富山市立速星中学校　校長　古　野　修　康 …… 5

・オンラインで学校を変える
　高岡市立牧野中学校　教諭　楠　　良　太
　教諭　古志野　　成 …… 9

・カリキュラム・マネジメントを生かした特色ある学校づくり
　高岡市立伏木中学校　校長　久保村　　裕
　教諭　山　端　洋　介 …… 13

・主体的・対話的で深い学びにおける学習者用デジタル教科書の効果的な活用
　朝日町教育センター　所長　木　村　博　明 …… 17

・児童の運動有能感を高める体育授業を求めて
　富山市立堀川小学校　教諭　森　田　みはる …… 21

・新しい生活様式に応じた、子供の自己学習力を高める授業の在り方
　富山市立船峅小学校　教頭　松　本　竜　也 …… 25

・生徒一人一人に確かな学力を身に付けさせる学年経営の工夫
　高岡市立福岡中学校　教諭　寺　田　孝　子 …… 29

・教職員の資質・能力向上につながる授業改善（校内研修）３ＵＰ
　滑川市立田中小学校　教頭　辻　　里　美 …… 33

＊令和3年度経営改善助成申請一覧 …… 37

◇　課題研究奨励助成報告「優秀賞」

・多様な考えを引き出し、主体的な言語活動を生み出す授業づくり
　朝日町立さみさと小学校　教諭　松　井　和貴子 …… 41

・児童が互いに関わり合いながら、学びを再構築するための教師の支援の在り方
　魚津市立道下小学校　教諭　松　原　はるか …… 42

・互いにつながり合い、高め合う子供の育成
　上市町立相ノ木小学校　教諭　渡　辺　大　貴 …… 43

・友達と関わりを深めながら、自分の思いを表現していく子供の育成を目指して
富山市立大広田小学校　教諭　太　田　凪　紗 …… 44

・書く楽しみを実感できる国語科「書くこと」の授業づくり
富山市立豊田小学校　教諭　奥　沢　綾　香 …… 45

・子供が思考を広げ、深めていく授業の工夫
富山市立新庄小学校　教諭　上　野　友里愛 …… 46

・自ら学ぶ子供を育てる学習指導の工夫
富山市立新庄北小学校　教諭　赤　川　　尚 …… 47

・社会の変化に対応しながら、思いや願いを実現させていく子供を目指して
富山市立堀川小学校　教諭　杉　本　茉　由 …… 48

・互いに聴き合う話合い活動の工夫
富山市立蜷川小学校　教諭　濱　田　幸　恵 …… 49

・自分の考えをもち、主体的に学び合う子供の育成
富山市立月岡小学校　教諭　岡　崎　奏　斗 …… 50

・認め合い、のびのびと自分の考えを表現しながら学び合う子供の育成
富山市立新保小学校　教諭　小　杉　有　希 …… 51

・自己を見つめ、進んで学習に取り組む子供の育成
富山市立大沢野小学校　教諭　渡　利　哲　朗 …… 52

・自分自身で感染症から身を守る児童の育成
富山市立大庄小学校　養護助教諭　植　野　未　久 …… 53

・子供の心を開く鍵となるツールの活用
富山市立柳町小学校　養護教諭　長　越　由　莉 …… 54

・「考え、議論する道徳」実現に向けての具体的手立ての発案
高岡市立能町小学校　教諭　高　野　昌　幸 …… 55

・協働的に学ぶ楽しさや達成感が味わえる授業づくり
高岡市立南条小学校　教諭　福　尾　尚　久 …… 56

・友達との関わりを通して、自分の読みを深める子供の育成
砺波市立出町小学校　教諭　清　水　雄　斗 …… 57

・子供の思考のスイッチを働かせるための教師の手立て
砺波市立庄川小学校　教諭　原　野　友香梨 …… 58

・新しい生活様式における動画教材を用いた理科の授業の進め方
富山市立山室中学校　教諭　吉　田　秀　徳 …… 59

・一枚の資料の読み取りを通して、生徒の多面的・多角的なものの見方を育てる工夫
富山市立楡原中学校　教諭　清　崎　凌　太 …… 60

◇　課題研究奨励助成報告「優良賞」…… 61

＊令和3年度課題研究助成報告一覧 …… 63

◇　経営改善奨励助成受賞論文

主体的に学ぶ若手教員の育成を目指して
― メンター方式を導入した若手教員研修を核として ―

南砺市立福光中部小学校　校長　棚　田　賢　也

1　主題設定の理由

本校は児童数約310名、15学級の中規模の学校である。教諭（再任用を含まない）、養護教諭、栄養教諭計17名のうち、20代、50代がそれぞれ6名で、20代は全て3年次以下である。また、50代のうち半数が来年度までに退職と、教育活動の円滑な運営を考えると、若手教員の育成は喫緊の課題である。ただ、学校が抱える課題はより複雑化･困難化しており、若手教員が自己研鑽に取り組み、スキルアップを図るための意欲を高めることが重要と考える。

そのためには、校内研修においても主体的に学ぶことを保障し、その学びを支援するシステムが必要でないかと考えた。具体的には、メンター方式を導入し、メンターチームを編制して若手教員研修（以下若手研という）を実施する。メンター方式とは、経験豊かな先輩（メンター）が双方向の対話を通じて、後輩（メンティ）のキャリア形成上の課題解決や悩みの解消を援助し、個人の成長をサポートする役割を果たすものである。研修内容については、無理のない時間設定の中、若手教員が協議して決定する。また、主体的な学びとなるよう、管理職やベテラン教員、中堅教員がメンターチームを支援していくことで、若手教員は研修意欲を高め、多様な専門性を身に付けていくものと考える。さらに、若手教員の学びに校内の全教員が関わることで、若手研を核として、OJTを充実させることができ、いろいろな場面で教員同士の学び合いが活性化するものと考える。

富山県教育委員会委嘱の「授業の達人」の経験者が多いなど、恵まれた環境を最大限に生かして主体的に学ぶ若手教員の育成に取り組みたい。

2　研究の視点

⑴　メンター方式を導入した若手研の実施

本研究におけるメンター方式の導入は、若手教員の指導力向上等の自己実現、及び中堅教員のミドルリーダーとしての意識の高揚をねらいとしたものである。学校運営上、このメンターチームを独立した組織とするために、メンターには8年次で学年主任も務めるJ教諭を充てた。研修の企画及び運営は全てメンターチームが行うこととし、主体性を大切にした。6名のメンティは次のとおりである。

・3年次（H教諭、O教諭、I養護教諭）
・2年次（N教諭）　　・初任（M教諭、S教諭）

⑵　授業の互見システムの確立

若手教員の授業力向上には、授業の参観や参観した授業についての対話は何よりも重要であると考える。そのため、若手教員には、ベテラン教員や中堅教員の授業の参観を奨励した。その際、参観は10分程度とし、疑問や質問は放課後に対話を通して解決することとした。また、ベテラン教員や中堅教員には、面談等で授業公開や若手教員へのアドバイスを依頼した。若手教員が時間を見付けて授業を参観し、授業を通してアドバイスを受けるシステムを確立したいと考えた。

⑶　校務支援システムの活用

校務支援システムを活用して、若手研等の充実を図る。具体的には、若手教員が若手研における学びをまとめて掲示板で発信することや、その発信内容を踏まえたベテラン教員や中堅教員等からのメール等によるアドバイス等を想定している。

3　具体的な取組

⑴　若手研のスタート

4月24日に第1回の若手研を開催した。内容は、「今年度の計画」と「学級開き」で、今年度の計画については、メンターが昨年度の取組を参考に次の計画案を作成してきており、詳細な内容についての検討がこの日の主な協議事項となった。

＜若手教員研修　計画（案）＞

1　ねらい　6年次までの若手教員の実践的指導力や問題解決力等の向上を図る。
2　日　程　令和2年4月24日～令和3年3月9日
　　毎月第2、4火曜日（全18回）
　　16:00～16:20
3　内　容　4月：今年度の計画、学級開き
　　5月：学級経営、成績処理
　　6月：生徒指導、情報交換
　　7月：実技指導
　　9～2月：授業の参観
　　3月：1年間の振り返り

協議では、ベテラン教員や中堅教員の授業を多く参観することとしたほか、子供たちの進度や理解度が違う中での対応や子供に響くほめ方、生徒指導における子供からの聞き取りや叱り方、通知表の完成までの過程やつけ方等、若手教員らしい研修内容も取り入れることとなった。

また、「学級開き」については、4月13日から臨時休業となったため、学校が再開された時のことを考えて取り入れたものである。本校カウンセラー作成の資料を基にメンターが話をした後、学級開きで意識していることについて話し合った。

⑵　不安や疑問を明らかにして

2回目は5月12日に行った。研修題は「通知表完成までしておくこと（学習評価、行動の記録）」である。この日の講師は研究主任とメンターが務め、メンティは不安や疑問を明らかにして参加した。振り返りでは、次のように記載している。

- 日頃の評価の積み重ねが大切。子供の日頃の行動のメモが必要である。（O教諭）
- 日頃の積み重ねが大切。他の先生から自分もやってみたいことが得られた。（H教諭）
- 記録を計画的にとることが重要である。（N教諭）
- 授業だけでなく、普段の生活もよく見てメモに残すことが大事。ほめほめタイムも活用可。評価規準を理解することが重要である。（S教諭）
- 付箋を活用するなどこまめにメモ、どんどん書いて残す。周りの先生からの言葉もメモ。どの授業で評価するか事前に準備する。（M教諭）

2、3年次の教員にとっては、通知表の作成は経験済みのことであるが、初任者と同じ土俵で協議したことで、自分の取組を振り返ることができ、有意義な時間となったようである。

3回目は6月16日に行った。学校再開等の関係で1か月の間隔があいた。研修題は「生徒指導について」で、講師は教頭が務めた。この日もメンティは次の通り、職、年次に応じた不安や疑問を明らかにして参加した。

- 自分の思いを上手に表現できずに困っている子供への対応（O教諭）
- 子供の心のほぐし方（H教諭）
- 問題発生時の情報の聞き取り方（I養護教諭）
- 話を聞いていない子供への対応（N教諭）
- 休み時間におけるトラブルへの対応（M教諭）

4回目は6月24日に行った。研修題は「1か月子供と過ごしてみて」である。講師はメンターが務め、不安・疑問・試してみたこと・聞きたいこと・やってよかったこと等について協議した。初任者にとっては、初めて子供と向き合った1か月であったため、高い問題意識をもって参加した。

＜不安・疑問・試してみたこと・聞きたいこと・やってよかったこと等＞（事前）

- 授業が難しい。どうすれば定着するのか。喧嘩があったり子供の思いが様々であったり子供と向き合うのは大変だと思った。（S教諭）
- ほめて動かすことが難しい。（M教諭）

↓

＜感じたこと、学んだこと＞（事後）

- ルールを前もって伝えることで「守ろう、聞こう」とする子供が増える。できていない子供にはそっと寄り添い、声を掛けていきたい。（S教諭）
- 保健室に行くときは担任に伝えさせる。また、体育の時にはルールをしっかり作りたい。「ほめる→教え合う→ミニ先生を作る」のサイクルで、子供たちで注意し合えるようにしたい。（M教諭）

初任の2名とも研修前に抱いていた不安や疑問に対して、自分なりの手立てを明確にしていることが分かる。この後、実際にやってみて思い通りにいかないこともあると思うが、若手教員にとっては、研修の中で「次はこのようにやってみよう」と思えることが大切なのだと思う。このような意味においてメンターチームが自分の困ったことも素直に出せる雰囲気であることは大切なことである。

また、I養護教諭から「保健室に毎日来る子供がいる。担任と相談し、担任に断ってから来るなどの約束事が必要ではないか」と話があった。M教諭の言葉はそれを受けたもので、I養護教諭にとっても悩みの解決につながる貴重な時間となった。

⑶　校務支援システムによるアドバイス

6月の学校再開後、私は授業や子供たちの様子を観察するために、若手教員の学級を中心に、積極的に授業観察に取り組んだ。その際、校務支援システムを活用して若手教員にアドバイスを送ることとした。次のように、授業における子供との接し方や発問、指示等で、優れている、努力していると感じたことを中心に、気を付けてほしいことがあれば1点だけ伝えることとした。

N先生、5限目の国語科の授業を見させていただきました。子供が真剣になっている姿はいいですね。子供たちの反応が全然違っていました。先生の発問と同時に「はい」、集中している証拠です。

「水中ブルドーザーみたいないせえび」という言葉について、そのイメージを予想させ、その上でいせえびのビデオを見せられたのがよかったと思います。子供が「案外大きかったね」と話すなど、ブルドーザーという言葉といせえびがうまく結び付いているようでした。国語の時間は言葉のイメージを膨らませることが大切ですから。

先生が工夫したことは、”当たれば”子供たちはしっかりと返してくれます。当たらないこともたくさんありますけどね。(私の経験上です)

子供の真剣な姿に心が洗われました。ありがとうございました。

特に、初任の2名と2年次のN教諭には、8月上旬の1学期終了までに6～7回アドバイスを送信した。N教諭については、アドバイスを送り始めてから、授業への取組方に変容が見られ、学級の子供も集中して授業に臨むようになった。

⑷　いよいよ授業研究

7月以降の研修はほとんどが授業研究となる。子供たちにとって分かる授業をしたいというメンターチームの強い思いが形になったものである。「子供が自分の考えをもち、よりよくしていくための手立て」を研修題として取り組んだ。最初は、16年次研の一環で6学年主任のA教諭が算数科の授業を提案した。放課後には、若手研として事後研を行った。次は各自の振り返りである。

若手研の様子

・学びの足跡を活用し既習事項を生かす。(O教諭)
・問題解決の際、線分図を大切にすることを一貫して指導する。(H教諭)
・授業に当たっては、一人一人の学習状況を把握する。(M教諭)
・学習問題との出会いにおいては、スモールステップの手立てを講じる。(S教諭)
・文章問題では、まず、問題場面のイメージを膨らませる。(M教諭)

それぞれが経験に応じた学びを記載している。同じ研修題で、同じ授業を参観しても、問題意識が違うため、学びも違ってくる。特に若いうちは、研修の中で自分の学びを明らかにすることが大切であり、このような機会を多くもつことで若手教員の成長につながるものと考える。なお、A教諭は、この後の若手研にはアドバイザーとして参加し、学習指導案作成のポイント等をアドバイスした。

10月からはメンティによる授業が続いた。10月には、初任の2名が初任研で算数科の授業を公開した。11月には、3年次の2名が小学校教育課程研究集会で外国語科、外国語活動の授業を、2年次N教諭が2年次研で国語科の授業を公開した。事後研には、初任者指導教員やA教諭、メンター等が講師となり、研修を深めた。

1月になると、ベテラン教員や中堅教員の授業を参観して授業研究を行った。ベテラン教員や中堅教員は、若手教員のために快く授業を公開した。

S教諭の研究授業

①　1年算数科:K教諭	②　2年道徳科:T教諭
③　5年音楽科:C教諭	④　3年理　科:H教諭
⑤　3年国語科:F教諭	

メンティにはベテラン教員や中堅教員の授業から多くのことを学びたいとの思いがあり、事後研も行うこととなっていたことから1時間参観することがほとんどであった。事後研には、授業者のベテラン教員等が参加しており、授業の意図を聞いたり質問したりして研修を深められたようである。

4　成果と課題

若手研は3月までの予定であり、現在も取組は継続している。先日は、初任の2名が初任研で道徳科の授業を公開し、成長した姿を見せてくれた。

本研究の成果と課題については、明確にするため、メンターチームの一人一人にアンケートを行った。その結果は次のとおりである。

1　若手研の満足度

①十分に満足　5名　　②ほぼ満足　2名
③やや不満足　0名　　④不満足　　0名

＜理由＞

・ベテラン教員等の授業をたくさん参観し、授業者を交えた事後研を行えた。
・学習の際のポイントや細かな仕掛け等が学べた。
・研修を20分程度としたことで効率よく行えた。
・同じ若手教員と授業について話すことは大変刺激になった。
・【メンター】若手教員と研修内容を話し合って決めたことで、必要感のある研修となった。自身も先輩教員の授業を参観して指導技術を学べた。

2　特に有意義だった研修（2つ回答）

①　ベテラン教員等の授業参観（6名が選択）
②　準備体操等の実技研（3名が選択）
③　生徒指導（2名が選択）
④　情報交換、学習評価（各1名が選択）

3　メンター方式について

①よかった　　6名
②少しよかった　　1名
③あまりよくなかった　0名
④よくなかった　　0名

＜理由＞

・自分たちに近い視点での意見を与えてもらった。
・授業のポイントや子供の様子等、若手で意見を共有した後、メンターによる総括があり、要点を確認したり新たな視点を得たりできた。
・些細なことでも気軽に質問、相談できた。
・若手教員とベテラン教員をつないでもらえた。
・研修の運営や日程の調整等、上手にリードしてもらえた。
・【メンター】研修を若手で進められるように、企画、進行等を任せたことで、事後研では授業の視点を示すなど、後輩を育てるという意識をもって参加できた。

⑴　成果

・メンター方式を導入し、若手研の企画・運営等、全てをメンターチームに任せたことで、若手教員は、自分たちの必要感に応じた研修を取り入れ、主体的に研修に取り組んだ。
・学校の中核を担う中堅教員をメンターに任命したことで、若手研の充実を図ることができただけでなく、メンター自身の指導力や若手を育成しようとする意識を高めることができた。
・授業の互見を中心に若手研を実施したことで、メンティは多くの授業を参観でき、ベテラン教員等と授業について対話できた。加えて、若手研の講師を校内教員に求めたことで、OJTの意識が全体的に高まり、教員相互の学び合いが充実した。
・若手研自体はその時間を20分間と限定したことで、無理なく継続できた。また、空き時間に進んで先輩教員の授業を参観するメンティの姿も見られるなど、時間を有効に使って研修しようとする意識が育った。20分間と時間は短くても、その中で受けた刺激が良質のものであれば、その後の研修意欲につながり、自ら求めて研修するようになると考える。
・現在の勤務状況では、授業についてアドバイスする時間の確保も容易ではなく、いつでも読めるメールでのアドバイスは若手教員の時間を奪うことなく、研修意欲に刺激を与えたと考える。

⑵　課題

・授業の参観時間については、授業の全てを参観したいというメンティの思いと、研修の効率化の両立は難しいと感じた。若手研の授業研究として参観する場合は、1時間安心して教室をあけられるシステムの構築が必要である。
・授業の互見は日常的に行われるところまで至っていない。先輩の授業の参観や、授業について対話することのよさを実感できないと他の業務に優先させようとの思いにつながらない。既に取り組んでいるメンティの思いを広めるなどの工夫が必要である。
・校務支援システムの活用は、校長から若手教員等へのアドバイスに止まった。ICT活用の点からも推進すべきと思うが、その必要感が高まらなかったことが原因と考える。学びを発信することの意味やその効果について明らかにする必要がある。

コロナ禍の学校休業期間における生徒の学習補償に関する実践

― インターネットの利用によって生徒の学習をどこまで補えるのか ―

富山市立速星中学校　校長　古　野　修　康

1　はじめに

令和2年に入り、中国で発生した新型コロナウイルスの感染拡大が続き、全国の学校は休業を強いられた。富山市立の小中学校では、3月3日からの2週間弱と4月13日から約1か月半、休業により教育活動が中断された。授業や学校行事の滞りに対する生徒や保護者の不安は計り知れず、本校教員も忸怩たる思いを募らせていた。そのような状況下、本校では「我々教師は生徒に何をすべきで、何ができるのか」という問題意識を共有し、生徒と保護者の不安に対峙してきた。そして、既存の教育資源を最大限に活用し、家庭で毎日を過ごす生徒に対し、学校として対処できる方法として、インターネットを使った動画配信を計画・実践するに至った。

今後の更なるコロナウイルス感染拡大が懸念される中、これまでの実践の成果と課題を明らかにし、新たな危機に備えることが重要と考え、本研究テーマを設定した。

2　研究の目的

本研究が目指すところ（研究の目的）は、コロナ禍の学校休業及び授業中断がもたらす不利益を軽減し、少しでも生徒・保護者の不安を和らげる手立てを模索することにある。言い換えるなら、学校教育が迎えた大きな危機的状況を、いかに最小限の被害で乗り切ることができるか、その方略を探り実践していくことをねらいとしている。

3　研究の方法

⑴　オンライン教材の作成とその変化

①　初期の段階

本実践研究のスタートは、コロナウイルス感染拡大防止対策という緊急事態への対応であった。4月13日から始まった2度目の休業期間中、具体的な実践として103本もの動画が作成された。

このように膨大な数に上った動画の1本目は、2学年の教員が協力して作った動画だった。その内容は、毎日を自宅で過ごしている生徒に向けてのビデオメッセージで、それに続きチャレンジ精神旺盛な若手教員が世界史の動画を作成、更に音楽科の教員が解説入りで校歌の動画を作成した。

この時期は、明確な見通しもなく勢いに任せて取組が進んでいたが、インターネット環境が整っていない家庭もあることに配慮し、「オンライン教材をもって授業に代えることはしない」という基本方針を立て、その後の動画作成を進めることとした。

②　動画作成が多様化していった段階

動画制作が軌道に乗ってくると、2つの面で多様化が進んだ。

1つ目は内容の多様化である。その内容を一部例に挙げると、学校再開後の授業に役立つ内容、発想力を鍛える内容、知識を広げる内容、そして部活動のトレーニング方法を伝える内容まで作られていった。

そして2つ目は、作成方法の多様化である。一般的な授業動画といえば、黒板を背に指導者が説明を進めるものだが、今回作成された動画にもそのような動画が多くあった。しかしそれらの形式は同じではあるが、作成者のICTリテラシーの差異により、個性豊かな違いをもっていた。普段の授業に近い形式で進められていくものから、説明に分かりやすい画像を加えたり、パート毎に撮影した演奏を重ねてアンサンブルを完成させたりしたものなど、加工技術の進んだものも多く含まれて

いた。また、それ以外の動画作成方法としては、生徒に馴染みの深いキャラクターに学習内容を説明させるものや、動画編集ソフトを駆使し撮影動画に加工をしていくもの、プレゼンテーションソフトのシートに音声を被せて動画としたものなどがあり、見た目の種類の豊富さから視聴する生徒を飽きさせない内容になった。

③　市内小中学校への波及の段階

オンライン教材の充実に比例して、他校からの問合せが多くなっていった。その中でも特に多く尋ねられた内容は、パスワードで閲覧制限された学校HPの生徒・保護者ページの利用方法である。本校では、著作権や肖像権への配慮からオンライン教材はこの領域で公開している。また他にも、動画の作成・編集方法についての問合せも多く、プレゼンテーションソフトを使った方法に興味を示す学校が多かった。

本校に続いてオンライン教材を作り始めた学校とは、互いに作成動画を披露し合い、よい刺激となった。

④　市教育センターとの連携の段階

本校のオンライン教材を視聴し、作成の疑問点を尋ねるため来校する学校がある中、教育センターからも問合せや依頼があった。学校休業期間が継続される状況下、教育センターでは市立小中学校でのオンライン教材作成を推進しており、本校での実践方法や明らかにされたことの中から、他校へ普及できるものを精選･一般化し、市内小中学校への支援をしている。

⑵　家庭における生徒の取組

①　生徒の取組方法

学校休業期間を家庭で過ごしている生徒は、学校HPにアクセスし閲覧制限された生徒･保護者のページへ入っていく。そして学習内容を選択し、学習を進めていくことになる。前述の通り、オンライン教材の視聴を以後の授業へ振り替えることはしていないため、生徒には「必ず見なければならない」という強い意識はなかったようである。

②　保護者への周知

オンライン教材の公開情報は、随時、学校HPのトップ画面で保護者へ周知した。加えて、各家庭で登録してもらっている「学校安全メール」へも公開情報を流したが、このメールには、学校HPの制限エリアへ入るためのパスワードを付けた。

⑶　実践研究における効果の検証

本実践は、コロナ禍の学校休業期間における危機対応からスタートしたことは前述の通りだが、以下の2点で特筆すべき効果が見られた。それらを含め、これまでの実践を検証することが、今後の実践の充実に大きく貢献すると考えている。

＜特異な点＞

①　オンライン教材が103本も作成されたこと

僅か1か月半の学校休業期間にも関わらず、大変多くの動画が作成された。しかもこれらの作成は一部の教員に限られることなく、若手からベテランまでが「私もやってみようか」という思いで作成を進めた。

新しい取組へのハードルを引き下げ、多くの教員への動機付けができた要因について、以下に、OJTの視点から「正統的周辺参加」という理論を基に考察を進めていく。

②　オンライン教材の作成方法が多様であること

作成されたオンライン教材は作成方法も多岐にわっているため、出来上がった動画も多様性に富んでいる。様式を揃えることにも長所はあるが、様式が揃っていないことのよさについて検証していく。

実際にオンライン教材を視聴し学習を進めるのは生徒自身なので、その思いについては、アンケート調査により情報を収集し検証を進めていく。また、日々家庭で生徒の様子を見ている保護者に対しても同様の調査を行うことで、より正確な実態把握ができるものと考えられる。折しも、この休業期間中にはネットワークを利用したアンケート集計ソフトが利用でき、迅速な実態把握が可能であった。

4　研究の成果と課題

⑴　成果：オンライン教材がたくさん(103本)作られた

たくさんのオンライン教材が作られた背景には、教員間で効果的にOJTが機能した経緯がある。そこで、オンライン教材の作成という教員の学習が、集団の作用によって強く動機付けされ更に進められていった過程を、ブラウンらが「正統的周辺参加」の中で言及している徒弟制における「技」の伝承過程に当てはめて検証を進める。

「正統的周辺参加」の中でブラウンらは、徒弟制のよさを取り入れることは可能であり、「認知的徒弟制」を提唱している。「認知的徒弟制」では、以下の段階を踏んで技を教えていく。

①モデリング：

師匠は、徒弟に自分の「技」を観察させる。

②コーチング：

師匠は、徒弟に学ばせた「技」を使わせてみる。そしてその様子を観察しアドバイスを与える。

③スキャフォールディング＆フェーディング：

師弟が行っている作業が実行困難な場合に師匠は一時的支援を行い、上達に伴って支援を徐々に取り除く。

本校のオンライン教材作成の過程は、無意識ではあるがこれらの段階を経ている。まず、師匠にあたる役割は、ICTリテラシーの高い教頭が担っていた。モデリングの段階に関しては、当該教頭が日常的に紹介している学校行事の動画が「技」の役割を果たした。他の教職員はそれらの動画を、学校HP、校舎玄関のモニター、教員のグループラインで見ることができ、完成作品のイメージをつかむことで、制作へのハードルが低くなった。コーチングの段階に関しては、学校休業期間が時間的な余裕を生み出し、当該教頭が大勢の教員に対し、適宜アドバイスを与える好機となった。そして、スキャフォールディング＆フェーディングの段階に関しては、教頭の役割は特に重要であった。というのも、動画作成などＰＣの利用に際して、もっとも動機（やる気）を低減させるのは作業を滞らせる「小さな壁」である。スキルの高い人にとっては何でもない「当たり前」のことが、スキルの低い人にとっては小さくても乗り越えられない小さな障害となり、以後の活動を全て止めてしまう。「今困っていること」が「今聞きたいこと」であり、そこへ素早く支援してもらえたことが完成へと結びついた。

また、ブラウンらの「正統的周辺参加」論にある通り、初期の段階ではICTスキルの高い教頭から助言を受けて動画作成に取り組んでいた教員が、徐々にスキルを向上させ、「周辺的」な位置から「中心的」な役割を果たすようになり「学習」が次々と成立した。この様な教師集団における学習の連鎖が、103本もの動画作成という大きな成果に結びついたと考えている。

⑵ 成果：多様な方法でオンライン教材が作成された

前述の通り、内容と作成方法の2面でオンライン教材の多様化が図られた。その理由については、機器やソフトの利用について一定の方向性を示す研修会等の機会を設定しなかったことが幸いしたと考えている。そのような場を設定し、使用機器及びソフトを限定して研修を進めることは、時間的にも予算的にも効率的な方法であることは明らかである。しかし一方、今回のような長期間に及ぶ休業期間中であり、稼業中に比べて教員にも時間にゆとりがあり、尚且つ自宅で日頃から使い慣れている機器を使用できたことが、自由な発想を広げていったと考えられる。ある指導主事が本校を訪れた際、オンライン教材のバリエーションの豊かさについて「中学校でもこれだけできるんですね。」と発言したが、時間的なゆとりがあれば、より豊かな発想で生徒に向かっていく教員の姿勢がよく現れた出来事である。

⑶ 課題 ： 生徒のオンライン教材利用

「研究の方法」でも触れたが、富山市立の学校では、期間限定でネットワークを利用したアンケート調査ができる状況であった。その期間中、本校では保護者対象のアンケート調査を2度実施した。調査の概要は以下の通りである。

＜第1回臨時休業中のアンケート＞

調査対象　：　保護者(1,010名) ※複数回答有
調査期間　：　R2.4.21～4.23
有効回答　：　843(83.5%)

＜第2回臨時休業中のアンケート＞

調査対象　：　保護者(1,010名)　※複数回答有

調査期間　：　R2.5.13～5.15

有効回答　：　848(84.0%)

アンケート結果で注目すべきは、第1回の調査から明らかになった家庭のICT環境である。

〔質問〕オンライン授業を閲覧できますか。

〔回答〕はい84.6%、いいえ10.7%、分からない4.7%

約15%の家庭は、オンライン授業が見られない環境であった。今後もコロナウイルス感染拡大が続き、オンラインでの授業を強いられる場合には、この15%の家庭への配慮･対応が必須である。そして、教育委員会との連携を進め、どのように対応していくかは最大の課題である。タブレット端末とWi-Fiルーターの貸し出しによる対応、家庭でオンライン環境が整っていない生徒を登校させる対応など、危機的状況になる前に考え対応しておく必要を感じる。

次に、第2回の調査で明らかになったオンライン授業の利用状況である。

〔質問〕オンライン授業を見ましたか。

〔回答〕見た77.1%　まだ見ていない22.9%

オンライン授業については、生徒への閲覧強要、授業内容の取扱はせず、学校HPと学校から各家庭へ郵送した資料で閲覧を勧めるに留めた。その結果、閲覧率は全家庭の8割に届かなかった。オンライン環境が整っている家庭に限れば閲覧率は9割を超すが、比較できるデータがないため、この割合が高いとは言い切れず、逆に1割程度の生徒が、オンライン授業を見ることができるにも関わらず、そうしない実態が明らかになった。

今回のアンケートでは実施できなかったが、郵送した学習プリントの実施状況や起床･就寝時刻、日中は家族の誰と一緒にいるのかなどの結果と、オンライン授業の視聴結果をクロス分析することで、学習意欲の高い生徒が更に学習を進めていく一方、生活習慣が乱れている生徒が学習意欲を低減させ、オンライン授業にも興味を示さない実態が明らかになると考えている。学校での授業に比較してオンライン授業は、学習に対する意欲の差が大きく、内容の定着には大きな差が現れるであろう。通常の授業に比べても、生徒に「見てみたい」と思わせることのできる動画を作成することは課題の1つである。

本校では、市内の小中学校に先んじて、ウェブ会議システムを利用しクラス別の「オンライン状況確認」を実施したが、そのアンケート調査から以下の結果が得られた。

〔質問〕今後、オンライン状況確認の利用を希望しますか。

〔回答〕希望する66.4%、希望しない33.6%

オンライン状況確認がオンライン授業と大きく異なる点は、時間が拘束される点である。自分のペースに合わせ、好きな時間に見ることができるオンライン授業に対し、決まった時間に参加しなくてはいけないオンライン状況確認のハードルは高い。更に、保護者が自分のPCを自由に利用させたくないとか設定の煩雑さなどが利用の推進を阻害している。家庭における生徒の生活リズムを整える意味からは、オンライン状況確認は有効である上に、ウェブ会議システムを利用した双方向の授業展開も可能になることを考えると、乗り越えなくてはいけない壁は高いものの、その推進に向けて少しずつでも歩みを進めていかなくてはいけない。

5　おわりに

コロナ禍の学校休業期間中、生徒にもたらされる不利益をいかに軽減できるかをテーマに、これまでの実践についてまとめ、学校全体でオンライン動画の作成が盛り上がりを見せた理由について、OJT「正統的周辺参加」の視点から考察した。そして、手立ての1つとしてオンライン教材の視聴やウェブ会議ソフトの活用は大きな可能性を秘めている一方、その実現には乗り越えなくてはいけない壁も多いことが分かった。

しかし、今年度の休業期間に本校教員が作り上げた103本ものオンライン教材は、これからの指導方法改善の第一歩であることは間違いのない事実であり、現に学校再開後の授業でも活用している姿が見られる。今後、この一歩が市内、県内へと波及し、多くの子供たちへ還元されることを期待している。

オンラインで学校を変える

― 授業動画配信とオンライン朝の会を通してICTの可能性を拡げる ―

高岡市立牧野中学校　教諭　楠　　良　太
教諭　古志野　　成

1　はじめに

近年、授業におけるICTの効果的な活用が求められている。その中で、史上初の全国一斉臨時休業が実施され、学校から生徒がいなくなった時、生徒のために何ができるのか学校としての葛藤が始まった。そこに活路を見い出したのはオンラインであった。

2　主題設定の趣旨と研究の視点

新型コロナウイルス感染拡大防止に関する緊急事態宣言が発出された。新年度になってからも臨時休業を継続することになり、生徒の家庭における自主学習にも限界があった。電話を使って生活状況を確認する中で、生活リズムを崩したりゲームに没頭したりしている生徒が少なからずいるという実態がみえてきた。臨時休業が長期化する中、生徒のために何ができるのかが切実な問題となった。

この問題意識を教職員全員で明確に共有できたのは、校長から示された「オンラインを保護者や生徒とのコミュニケーションの柱とする」という方針によるものであった。この方針の下、全教職員がホームページの充実とテレビ会議システムによる双方向のコミュニケーションに取り組み始めた。

本研究は、臨時休業を契機に取り組んだオンラインの活用を通して、保護者や地域から信頼され、生徒にこれからの時代に必要な資質・能力を育成するための学校改革を目指すものであり、次の3つの視点で取り組んできた。

ア　オンラインを活用した情報発信（校長）
イ　ICTを使って考える資質・能力の育成（生徒）
ウ　ICT活用を推進する研修の充実（教師）

3　実践の概要

⑴　学校ホームページによる情報発信（視点ア）

校長は、生徒や保護者への情報発信をきめ細かに行うことで、臨時休業措置に対する不安や閉塞感を解消しようと考えた。そこで、ホームページに「校長室のとびら」コーナーを新規に開設し、今後の見通しや学校としての対応についての情報提供を一元化することにした。「校長室のとびら」は校長が生徒や保護者への励ましの言葉を直接語りかけるメッセージであり、毎日更新した。

運用にあたっては、ホームページは学校と家庭を繋ぐ第一義的なツールと位置づけたことで、ホームページの閲覧数は日ごとに増加し、家庭と連携した教育の足掛かりとなった。

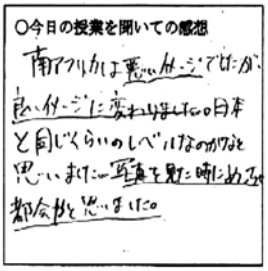
> ホームページの閲覧数は、休業期間中に1日約650件（全校生徒数、約230人）を超えたことから、生徒だけでなく保護者や地域の方々も閲覧していることが分かる。

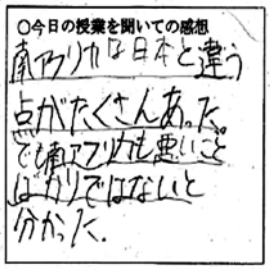
校長の方針を受け、全学年全教科の授業動画配信を行う「学びのとびら」コーナー、学年主任や担任が励ましのメッセージを伝える「学年のとびら」コーナーの開設など、教職員からも主体的な提案が上がり様々な取組が具現化された。これに伴い、授業動画の作成を主とした本研究への意欲も高まってきた。

⑵　「オンライン朝の会」を活用したN教諭の実践（視点ア、イ）

①　課題意識

3年前、世界地理の授業を行っていた際、「生徒が世界をもっと身近に感じることができる方法はないか」と考えた。そんな時、知人である南アフリカ共和国の日本人学校に赴任していたK氏（現在、岩手県内公立小学校勤務）とのつながりがきっかけで、南アフリカ現地と学校を繋いで遠隔授業を展開した。現地から生の声をリアルタイムで聞くことができた授業に、生徒は大きな驚きと同時に、世界について深く学ぶことができた。





＜遠隔授業の様子と生徒の感想＞

これをきっかけに、その後も国内外の様々な場所と繋いで実情を知る授業づくりに取り組んできた。

② 取組の概要

今年度は持ち上がりの3年生を担任している。2月末に臨時休業となり生徒と会えない日々が続いた。「進路について徐々に考えていかなければならない重要な時期に不安な日々を過ごしている生徒のために何か手を打つことができないか」との思いがあった。遠隔授業で使用したネットミーティングを生徒と繋ぐことで、生徒が安心して進路に向き合うことができると考えた。校長、教頭、学年主任の了承を得て実験的に実施した。

＜開設への手順と留意点＞

・4月当初、学活等で「オンライン朝の会の接続方法」について説明する。その際、大型テレビに接続法を提示し具体的に説明した。

・オンライン朝の会に接続できない家庭への配慮として、市教育委員会、公民館の協力を得て、学年生徒全員が参加できる環境を整えた。

＜ネットミーティングを使った授業風景＞

③ 取組の成果

97.1％の生徒が「やってみてとてもよかった」「やってみてまぁよかった」と回答した。

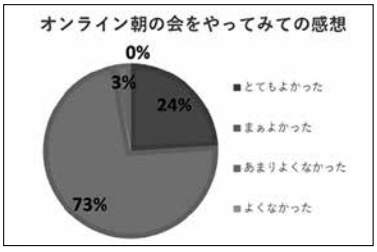


図1 オンライン朝の会の感想

＜生徒の感想＞

・友達の顔を見ることができて教室にいるような感覚になれた。

・リアルタイムで連絡事項を聞くことができ、情報をつかみやすかった。

・定期的に行うことで、生活リズムを崩しにくかった。

・今後再度臨時休業に入った際も、オンライン朝の会に参加したい。（全生徒）

＜保護者の感想＞

・いつ学校が始まるか分からない不安定な状況の中で、顔を見合わせて情報を共有できたことはとても安心できた。

＜生徒の変容＞

実践当初は、オンライン朝の会に慣れずに戸惑う生徒の姿も見られたが、次第に操作スキルを身に付け、自信をもって発言する生徒が増えていった。また、各回出欠確認後に行っていた進路について考える授業では、友達の意見を真剣に聞き、自己の進路について「夢を実現できるように勉強に取り組みたい」「友達の不安な気持ちも分かり、今は会えないけど頑張って勉強したい」など、深く考えている意見が聞かれた。休業という不安な面はあったが、友達を身近に感じながら安心して参加できているといえる。

④ 課題

・「接続が途中で途切れる」「画像が粗い」ことへの対応、家庭の状況によって情報格差が生じないような配慮が求められる。

・生徒の学びを深めるための手立てとして、活動の中でグループ分けをしたり、アンケート形式で考えを確認したりする活動を教員側が十分に理解し、適切な場面で実践できる力を身に付けていく必要がある。

⑶ 教職員全員で取り組む授業動画配信
～『牧中　学びチャレンジ』の実践～（視点イ、ウ）

① 課題意識

以下に示す3つの課題意識をもって、動画配信に取り組んだ。

・休業中の生徒の家庭生活と学習の支援

・教師の在宅勤務における授業の準備

・オンラインを使って生徒の学ぶ力の育成

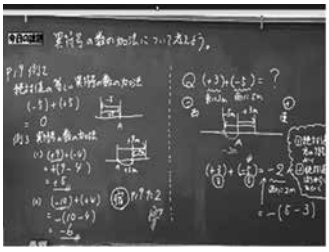
動画の編集ソフト等を用いる際には、容量や作業の簡便さを考慮し、無料であるZoomを活用し自撮りの動画撮影を実践した。

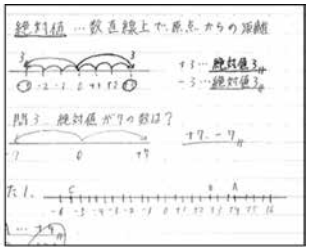
＜本校の動画の作成ポイント＞

・実際の授業を受けているような臨場感を出すため黒板を背景画面にし、説明しながらペンタブレット等で文字を書いていく形を基本とした。
（Zoomの共有機能でWord、PowerPointに教室の黒板の画像を貼り付けて、そこに書いていく）

・学校で作成する際は学校のパソコンを利用し、各教室で分かれて（三密を避けて）作成した。

＜黒板を使用した授業動画例＞ 生徒の様子（ノートより）





② 動画作成の前提となった研修

動画作成の前提となるカリキュラム・マネジメント、ICTに関する研修会を3度実施している。

表1　研修会の主な内容と教職員の変容

期日	主な研修内容	教職員の変容
2020/3	教科等横断的なカリキュラム・マネジメントについて	教科単独で授業を行ってきた教員が多かったが、他教科とのつながりを考えながら授業を実践していこうという声が出てきた。
2020/4	Zoomのインストールと使い方	グループでつながるメリットに気づき、教職員同士でも活用しようという試みが始まる。
2020/4	Zoomの録画機能を活用した動画作成	Zoomを活用して、簡単に動画を作成できることが分かり、研修会後、職員室で活動していた教職員が各教室で動画作成に取り組む。

研修会後は、教科の壁を越えて授業内容について感想を言い合ったり、改善を検討し合ったりするなどの様子が見られた。

③　動画配信の経過と教師の変容

・校長の指導の下、教諭2名がモデルとなる動画をつくりホームページに載せた。「校長室のとびら」で紹介すると、ホームページの閲覧数が急増した。教職員からも肯定的な意見が多く、作成方法についての質問が上がった。

・4月27日に臨時の研修会を開き、動画作成の手順と、以下のメリット、デメリットの共通理解を図った。教職員には、自分のパソコンで実際に簡単な動画を作成してみることで、「自分もできた」という達成感が広がった。

図2　Zoomを活用した授業動画のメリット、デメリット

【メリット】
・簡単な作業である。（簡単なものであれば、1回の在宅勤務で5つ以上の動画が作れる）
・容量が小さいので、ホームページにすぐ載せられる。（5MB～12MB）
・在宅勤務でも積極的に教材研究ができる。ICTを活用した授業に活かすことができる。
・生徒が、自分の学校の教員の動画を家族でいつでも見られ、安心して学習に取り組むことができる。
・ストックがあると、学校再開後、感染症にかかっても、授業で動画を見せて進められる。

【デメリット】留意点として
・動画の本数が増えてくると、載せる本数や配列を考慮する必要がある。
・即効性が肝要であり、細かな点にこだわらない気持ちが大切になる。

・4月28日から、「楽しくサクッと生徒のために」という合言葉の下、全教職員が一丸となり動画の作成を始めた。動画作成に堪能な若手教員がベテラン教員をサポートして取り組んだ。

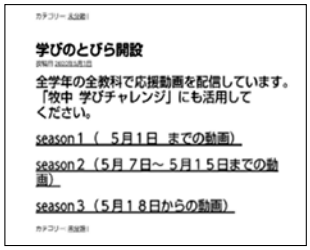
・作成後の疑問や感想を出し合ったり、互いの動画を見合ったりすることにより、各学年の研修担当から以下の共通理解事項が示された。

図3　動画作成にあたる教職員の共通理解事項

・9教科の教員、養護教諭が1週間に1本以上（最大4本まで）動画を作成する。
・動画の中に、生徒へのメッセージなどを取り入れるようにする。
・動画1つは10分程度とする。
・著作権を守るため、教科書の写真等の活用は控える。
・作った動画は本校ホームページ「学びのとびら」コーナーに掲載する。
・1週間単位（Season）で見出しを付け、教科等を整理してホームページに載せる。

・5月31日の臨時休業終了までに、約70本の動画をホームページに掲載した。教職員は、在宅勤務時に自宅で作成したり、各教室で個々に自撮りで録画をしたりと、三密を避けながら動画の作成を進めた。また、5月11日から、1週間毎の家庭学習の内容を時間割に位置付けて配信する「牧中　学びチャレンジ」も開始した。家庭学習の時間割と授業動画を関連させることで計画的に家庭学習に取り組むことができた。

<HP上の学びのとびら>

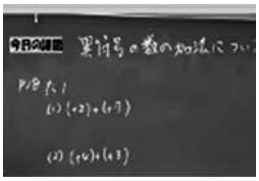


④　動画配信例<中学1年生、数学科>

1年生数学科の動画は臨時休業中8回挙げた。生徒は、まだ中学校の授業を1度も受けていなかったため、教科書を予習する内容で全体を構想した。生徒の学びを充実させるため、大切なポイントや考える発問を適宜入れながら作成に努めた。

図4　数学の授業動画のポイント

<指導内容>
・正負の数（符号のついた数、数の大小、加法）
<動画作成の配慮点>
1　授業を受けているような臨場感

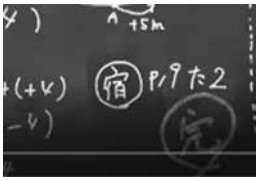


授業の臨場感を出すために、背景は黒板の画像をWordに貼り付けた。

2　ペンタブレットを活用し、ポイントも整理

ペンで書きながら説明をした。また、ポイントは色分けをし、ノートにまとめやすくした。

3　動画の終わりには宿題を提示



最後に宿題を提示し、家庭学習の充実を図った。

⑤　取組の成果

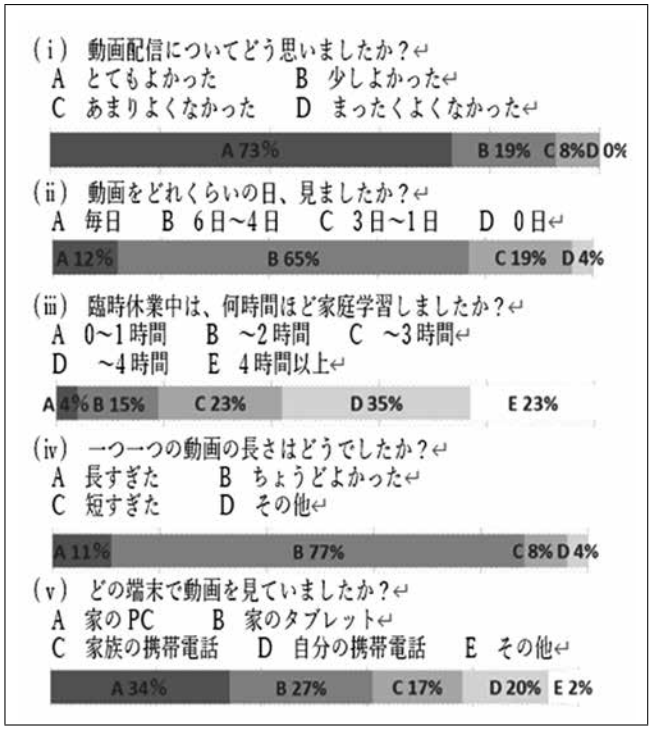
臨時休業終了後に、80名の生徒を対象に実施したアンケート結果から次のことがみえてきた。

動画配信については、肯定的な回答が多く、4日以上見ている生徒が70%を超えていた。

どんな時に見ていたかの項目では、「臨時休業中の時間割に合わせて」、「家で暇なとき」、「自主学習の一環として」との回答があった。臨時休業中の家庭学習の

時間が例年の調査結果に比べて多いことから、動画を活用して家庭学習を充実させていたことも伺える。また、動画のよさとして、繰り返し見られることや、静止させて自分のペースで学習を進められることが見いだされた。

図5　動画についてのアンケート結果（生徒）



一方、教職員からは、教科等横断的な授業実践への契機になったり、教師の授業力の向上にも繋がったりしたという感想が出された。

＜生徒の感想＞

○よかった点

・普段通りの授業を受けているようだった。
・止めながら繰り返し見ることができた。
・先生の声が聞けてよかった。
・家族といっしょに動画を見ることができた。

○今後の要望等

・もっと要点をまとめてほしい。
・もっとネットをつながりやすくしてほしい。

＜教職員の感想＞

・他教科の動画を見ることで他の教科の授業の視点が分かり、授業づくりの参考になった
・在宅勤務中に教材研究に取り組むことができ、ICTの活用技術が向上した。

⑥　課題

スキルがネックとなって動画づくりへ抵抗がある教師にとって、今後もICTの活用を推進するための研修を継続して行っていく必要がある。また、社会科や理科等、著作権の関係もあり資料の活用に制限がかかる教科については、資料を工夫する必要があり、作成に時間がかかる。

しかし、GIGAスクール構想が始まった現在、今回の取組の成果を共通理解し、ノウハウを生かしながら、生徒が家庭でも安心して学ぶことができる環境を充実させて行く必要がある。

4　成果と課題

＜成果＞

・校長の指導の下始まったオンライン朝の会を行うことで、臨時休業の期間中にも、学校と生徒、家庭とのつながりを維持できた。
・家庭科ではマスク作り、体育科では休業中の運動を紹介するなど、家族で視聴できる内容の動画を工夫することにより家庭とのつながりが深まった。

（視点　ア）

・ネットミーティングのよさとして、リアルタイムに繋がること、様々な情報の入手が可能となること、生徒が意欲的に参加できることが分かった。活用方法を工夫することで、生徒の深い学びに繋がるツールになる。
・授業動画配信により生徒の学びが保証できる。動画の要点をノートに写しながら見ることや、繰り返し再生して学習することが身に付くことで、家庭学習の幅がより広がる。

（視点　イ）

・理科では、臨時休業時に実験の様子を撮っておき、授業で活用している場面も見られた。学校再開後は、教員がペンタブレットやiPad等を活用しながら授業する様子が見られ、ICT活用能力が高まっている。

（視点　ウ）

＜課題＞

家庭にあるパソコンのスペックや、Wi-Fi環境が異なるため、思うように動画を視聴することができなかった生徒もいた。今後GIGAスクール構想の具現化によって、すべての生徒があらゆる機会にネット環境を使うことができるよう整備することが急がれる。また、双方向の授業や動画作成において生徒の深い学びを達成するため、全教員がICT活用力を付けるための校内研修の継続が求められる。

5　おわりに

授業動画作成は、実際にやってみると職員室のコミュニケーションが活性化し充実感が広がった。互いの授業動画を観覧し話題にすることで、教科の壁が低くなったことが最大の成果といえる。また、動画の向こうにいる生徒の姿を思い浮かべるとコロナ禍における多忙感は和らいだ。

校長のリーダーシップの下、一丸となって新たなことに取り組んだ経験は、学校再開後も取組が活性化し、教職員の一体感に繋がっている。

カリキュラム・マネジメントを生かした特色ある学校づくり

― 小中一貫教育を見据えた学校経営改善 ―

高岡市立伏木中学校　校長　久保村　　裕
教諭　山　端　洋　介（研究主任）

1　はじめに（研究主題設定の理由）

令和3年度からの新学習指導要領全面実施を控え、令和2年度より高岡市では、全小中学校で小中一貫教育を実施することとなっている。本校では、校区の3小学校（伏木小、古府小、太田小）との校舎統合はまだ先のことであるが、昨年度から小中学校が協力して、小中一貫教育の目標とグランドデザインを作成し、小中一貫教育の準備を進めてきている。

今年度は、新型コロナの影響を受けながらも、本校では、小中一貫教育の目標と本校の学校教育目標の実現に向けて、カリキュラム・マネジメント研修と道徳教育研修を校内研修に位置付けて取り組むこととした。

2　研究の仮説（視点）

⑴　カリキュラム・マネジメント研修を通して、教員の意識が改善し、授業改善が進む。

⑵　カリキュラム・マネジメント研修を通して、小中一貫教育に向けてICT機器を活用した研修が進み教師の授業力が向上する。

⑶　全教員で取り組む道徳を中心とした道徳教育研修会を行うことにより、道徳科に対する教員の意識が変わり、小中学校の教員交流も進む。

3　研究の実践

⑴　カリキュラム・マネジメント研修の方向性

本校では、カリキュラム・マネジメント研修の方向性を、千葉大学特任教授の天笠　茂先生の著書「学校経営戦略」を参考にして、次の3つの柱で研修を進めた。

①　教科等横断的な学習の開発
②　学校のリソース（人・物・時間・情報）の活用
③　PDCAサイクル（授業改善）の確立

①　教科等横断的な学習の開発

a　教科等横断的な学習題材関連表の作成

教科等横断的な学習の教材開発に向けて、「学習題材関連表」（図1）を作成した。これは、ベースとする教科と他教科やふるさと学習等との関連が分かるように工夫した。また「関連した学習内容の概要」として具体的な題材や学習内容を取り入れた。

作成にあたり、各教科担当者だけでなく、他教科の教員とも連携を図りながら、実際の授業に生かすことができる学習内容や指導方法について検討を重ねた。

［図1　学習題材関連表］

★関連表

ベースとする教科 ＼ 関連する教科・要素	国語	社会	数学	理科	保健体育	技術	家庭	音楽	美術	英語	ふるさと学習
国語		①②		③④							
社会	⑤						⑥		⑦		⑧
数学		⑨		⑩	⑪					⑫	⑬⑭
理科	⑮⑯				⑰						
保健体育							⑱				
技術		⑲		⑳							㉑
家庭											
音楽		㉒									㉓
美術		㉔㉕		㉖							㉗
英語		㉘㉙						㉚			㉛㉜

★関連した学習内容の概要

① 【2年国語　古文「枕草子」(5月)】×【1年社会　展開する天皇・貴族(7-11月)】

国語では、清少納言の四季に対するものの見方や感じ方に触れ、自分が感じる四季の趣と比較する学習を行う。

社会では、平安時代の天皇・貴族の政治や文化について学習する。

b　教科等横断的な学習題材を取り入れた授業

カリキュラム・マネジメント校内研修会を開催するにあたり、1学年理科「圧力」と3学年社会科「地方自治」の2つの単元で教科等横断的な学習題材を取り入れた授業を検討した。

＜1学年　理科「圧力」＞

【1年理科「圧力」】×【1年数学「比例と反比例」】

理科で「圧力は力に比例し、面積に反比例する」ことを確認し、圧力の公式を教えた際に、式の形や数量の変化の仕方から、数学科における「比例と反比例の特徴」を関連付けた。圧力に対して深く理解させるため、比例と反比例の復習をねらいとした。

＜3学年　社会科「地方自治」＞

【3年社会科「地方自治」】×【ふるさと学習】

生徒たちが住む伏木地区のよい点や課題を取り上げ、伏木をよりよくするためにはどのような政策を行っていけばよいか話し合うことで、地方自治についての興味や理解を深めさせることをねらいとした。

② 学校（情報、人的）のリソースの活用

＜1学年　理科「圧力」＞

「情報」リソースとして「ICT機器」と「web会議サービス『V-CUBE』」を活用した。数学科教師が待機する職員室と授業会場の教室をつないで、双方向によるオンライン授業を実施した。実際の授業では、授業会場の理科の授業者が圧力の説明をし、比例と反比例の説明は、職員室から数学科教師が補足した。

〔1学年 理科「圧力」授業の様子〕

＜3学年　社会科「地方自治」＞

「人的」リソースとして、地元の伏木支所長をゲストティーチャーとして招待し、授業で生徒たちが考えた伏木の将来政策案に対して、よい点や課題について指導助言をいただいた。

③ PDCAサイクル（授業改善）の確立

a 授業改善に向けた事後検討会

カリキュラム・マネジメント校内研修会に向けて、全教員が1学年理科部会と3学年社会科部会の2つの部会に分かれ、トライ（授業実践）を重ねながら、事後検討会を行い、授業改善を図った。

検討会では、授業を録画した映像を大型TVで再生しながら、授業者の悩みや改善点について議論した。

〔3学年社会科部会の様子〕

b カリキュラム・マネジメント・チェックリストの活用

これからの時代に求められる資質・能力を育成するためには、全教職員が学校の取組として具体的に何をすればよいか常に共通理解し、共通実践していくことが大切であると考えられる。そのために、今回は、千葉県総合教育センターで作成されたカリキュラム・マネジメント・チェックリスト（図2）を活用した。

チェックリストは、STEP1「学校として育成を目指す資質・能力の設定」、STEP2「児童生徒の具体的な姿を資質・能力の三つの柱で整理」、STEP3「手立てを用いた授業改善」、STEP4「PDCAサイクルによる資質・能力の育成」の取組状況を4段階分けられていることから、現在の教員の取組状況とこれから取り組むべき課題がとても把握しやすいと考えた。

［図2　カリマネ・チェックリストの一部］

資質・能力を育成するためのカリキュラム・マネジメント チェックリスト

千葉県総合教育センター　※該当する数字を○で囲んでください。

STEP		項目	とてもあてはまる	あてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない
STEP1	学校として育成を目指す資質・能力	① 自校の児童生徒の資質・能力に関する課題等を考慮しながら、学校として育成を目指す資質・能力を定めているか。	4	3	2	1
		② 資質・能力の育成が、学校経営計画に位置づいているか。	4	3	2	1
		③ 資質・能力の育成を推進する校内委員会が、校務分掌上に位置づいているか。	4	3	2	1
		④ 資質・能力の育成を、教育計画（シラバス）に示しているか。	4	3	2	1
		⑤ 資質・能力の育成が教科等年間指導計画や学年・学級経営に反映されているか。	4	3	2	1
		全教職員の共通理解のもと、資質・能力の育成を教科等横断的に取り組				

⑵ カリキュラム・マネジメント校内研修会

10月30日(金)に天笠 茂先生を招聘して、カリキュラム・マネジメント校内研修会を開催した。当日は、校区の小学校からも参加者があり、これまでのカリマネ研修の取組とカリマネを生かした公開授業について、天笠先生から直接指導をしていただいた。

⑶ 道徳教育研修の方向性

道徳教育研修を全教員で取り組む「全員道徳」と「主体的・対話的で深い学びが得られる道徳授業研究」の2つの柱で研修を進めた。

① 全員道徳

全学年の金曜1限を道徳に設定した。「全員道徳」として、担任や学年担当者を中心に、1つのクラスを複数の教員がローテーションで授業を担当できるようにした。また実施にあたり、年間指導計画とは別に、全員道徳実施計画表（図3）を作成した。

［図3　実施計画表の一部］

「全員道徳」実施計画表

	担任	6/5 (金)	6/12 (金)	6/19 (金)	6/26 (金)	7/3 (金)	7/10 (金)	7/17 (金)	7/31 (金)	9/18 (金)	9/25 (金)	10/2 (金)	10/9 (金)	10/16 (金)
11H	越田T	11	11	11	12	13					11	11	11	
教材番号		⓪	①	②	②	②					⑨	⑨①	⑫	
12H	渡邊T	12	12	12	13	11					12	12	12	
教材番号		⓪	①	⑯	⑯	⑯					⑨	⑨①	⑫	
13H	平田T	13	13	13	11	12					13	13	13	
教材番号		⓪	①	③	③	③					⑨	⑨①	⑫	
1A	今城T						13	11	12	11				12
教材番号							④	④	④	⑬				⑬
1B	平野T						12	13	11	13				11
教材番号							⑤	⑤	⑤	⑮				⑮
21H	山端T	21	21			21	22		21		22		22	
教材番号		⓪	①			③	③		⑧		⑧		⑬	
22H	大窪T	22	22			22	21		22		21		21	
教材番号		⓪	①			⑤	⑤		⑪		⑪		⑯	
2A	西田T			21	22	41		21		22		21		22
教材番号				④	④	④		⑱		⑱		⑫		⑫
2B	林T			22	21			22		21		22		21
教材番号				②	②			⑥		⑥		⑦		⑦
31H	草間T	31	31	31	32	33					31	32	33	

② 主体的・対話的で深い学びが得られる道徳授業研究

道徳授業研究では、畿央大学教授の島 恒生先生の著書「小学校中学校納得と発見のある道徳科」を参考にして、次の3つの柱で研修を進めた。

a 「氷山の三層モデル」を活用した授業づくり
b 発問の吟味
c PDCAサイクル（授業改善）の確立

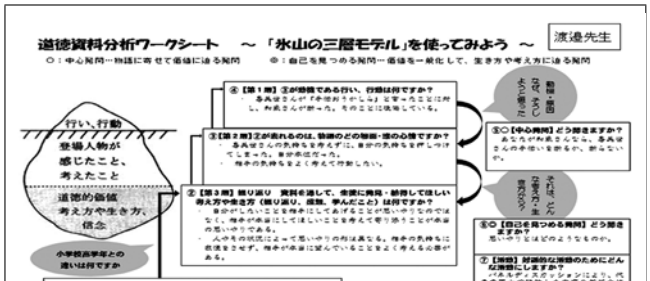
a 「氷山の三層モデル」を活用した授業づくり

島先生が提唱する「氷山の三層モデル」を参考に、資料分析ワークシート（図4）を作成した。資料を分析する際の視点として、道徳的価値に迫るために、登場人物の言動や場面を、次のような第1層～第3層のレベルで分析した。

第1層	状況理解レベル	行動、行い
第2層	心情読解レベル	登場人物が感じたこと、考えたこと
第3層	道徳的価値レベル	道徳的価値についての考え方や生き方、信念

授業者が作成した資料分析ワークシートは、授業のねらいや内容項目の道徳的価値、発問等を考える際に、「氷山の三層モデル」で分析した内容を関連させることで、資料分析や授業の展開、指導案作成の補助的役割を果たすと考えた。

［図4 1学年部会の資料分析ワークシート］



b 発問の吟味

発達の段階を考慮するために、生徒の考えや議論が前述の第3層に到達するための発問になっているかを吟味、検討した。今回は、資料の場面や登場人物の心情を問う「中心発問」と、資料から分かる道徳的価値や生き方を考えさせる「自己を見つめる発問」の2種類の発問を取り入れた。

事前に配布した「氷山の三層モデル」ワークシートに加筆した発問を、部会で吟味し、トライ（授業実践）をするごとに、生徒の反応や考察を書き込んだ表（図5）を作成して取組んだ。

［図5 2学年「気高い生き方を求めて」の取組］

案	○中心発問 ◎自己を見つめる発問	詳 細
Ⅰ 12月上旬	○ なぜジャンは罪を告白することができたのだろうか。 ◎ 自分の弱さに打ち勝つにはどうしたらよいか。	中心発問では、「嘘をついてはいけないと思ったから。」という旨の意見しか出ないのではないかという意見があった。また、そもそもジャンはかねてから罪を告白しようと考えていたわけではなく、罪人を前にして、咄嗟に行動したので、発問と合わないのではないかという指摘もあった。 自己を見つめる発問では、人間は自らの弱さに打ち勝たねばならないと生徒に強制することになると気付いた。
Ⅱ 12月24日	○ ジャンの弱さと強さとはなんだろう。 ◎ 私たちは自分の弱さとどう付き合っていけばよいのだろう。	中心発問では、生徒が気付くべきである、人間の弱さと強さという主題を先に与えてしまっている上に、案Ⅰと同様、答えが限られてくるのではないかという指摘があった。 自己を見つめる発問に対しては、「弱さを認めつつ、それに打ち勝つ強さをもつこと」といった、抽象的な意見しか出ないのではないかという意見があった。
Ⅲ 12月24日	○ 勝利の微笑と絶望の微笑を同時に浮かべたとき、ジャンはどんな気持ちだっただろう。 ◎ 今日の道徳で考えたことは何か。	中心発問は、ジャンが罪を告白した後に焦点を当てている上に、勝利と絶望という対極的なキーワードも出てくるので、生徒たちがジャンの葛藤、その末に彼が選んだものが何なのか、考えやすいのではないかと思われる。
Ⅳ 1月22日	○ 罪を告白したジャンが、勝利の微笑を浮かべたのはなぜか。 ◎ 人間の「弱さ」と「強さ」とは、何だろう。	中心発問は、ジャンが自分の弱さを受け止め、弱い自分を乗り越えることができた、そして、乗り越えたことに喜びを見い出したジャンに気付かせたいと考えた。 自己を見つめる発問では、人間には「弱さ」もあるが、それを認め、乗り越えようとする「強さ」も同時にもっているということを考えさせたい。

c PDCAサイクル（授業改善）の確立

全教員が1学年部会か2学年部会の2つの部会のどちらかに分かれて、トライ（授業実践）を重ねながら、必ず事後検討会を行い、授業改善を図った。

⑷ 道徳教育オンライン校内研修会

1月27日(水)に畿央大学教授の島 恒生先生を招聘して道徳教育校内研修会を開催する予定であったが、今回はコロナ禍のためオンラインという形で参加していただいた。当日は、2学年部会の「気高い生き方を求めて」（D(22)よりよく生きる喜び）の授業を「web会議サービス『V-CUBE』」を活用し、オンラインで研修した。授業の映像は、畿央大学の島先生と伏木中校区の3小学校、本校会議室と共有して研修を進めた。

また1学年部会では、事前に、1学年「その人が本当に望んでいること」（B（26）思いやり、感謝）＞の授業をDVDで撮影し、授業を参観できなかった教員や島先生に観ていただけるようにした。

4 成果と課題

⑴ カリキュラム・マネジメント研修会

① 成果

教科等横断的な学習題材関連表を作成することにより、教師間で教科等間の連携や横断の必要性を共有することができた。さらに、授業研究を進めることにより、教科担任間のコミュニケーションが促進され、教員間の連携、協力がとても深まった。

また、コロナ禍で授業や研修を進めていくうちに、オンラインを含めたICT機器の活用や地域教材の活用の研修も進んだ。

② 課題（次年度に向けて）

チェックリスト（10/26に教員21名に実施）の集計結果から、STEP1「学校として育成を目指す資質・能力の設定」の全体的な評価は高く、「①自校の児童生徒の資質・能力に関する課題等を考慮しながら、学校として育成を目指す資質・能力を定めているか。」や「④資質・能力の育成を、教育計画(シラバス)に示しているか。」では、95.5%の教員が「とてもよくあてはまる、だいたいあてはまる」の肯定的な評価をしていることがわかった。しかし、STEP2「児童生徒の具体的な姿を資質・能力の三つの柱で整理」の全体的な評価は低く、「⑪評価結果をもとに、三つの柱で整理した資質・能力が発揮された具体的な児童生徒の姿の見直しを行っているか。」では、38.0%の教員しか肯定的な評価をしていなかった。

この結果から、来年度に向けて生徒の具体像を新しい資質・能力の三つの柱で見直して、整理していくことが大切であることがわかった。またSTEP4「PDCAサイクルによる資質・能力の育成」の「㉒総括的に評価した結果は、自分の立場から地域・保護者・児童生徒に発信しているか。」についても肯定的な評価が42.8%と低いことから、一人一人の教員の立場から総括的な評価をどのように発信したらよいか検討をしていきたい。

〔カリキュラム・マネジメント校内研修会の様子〕

⑵　道徳教育研修

①　成果

・教員の意識の変化

「全員道徳」の実践により、全教員で道徳の授業に対して取り組む雰囲気が醸成され、道徳に対する教員の意識は高くなった。若手の教員からは「様々な手法や考え方を学び合える機会となっている。」、ベテランの教員からは「緊張感もあるが、道徳の授業が楽しみである。」という意見も聞かれた。

また、道徳教育オンライン校内研修会では、島先生から直接指導をしていただき、研修後、「これまで、生徒の意見を聞くだけで深まりがない授業をしていたが、授業の終盤で、課題に関する深い学びをクラス全体で共有したり、クラス全体の道徳性を深めたりすることが大切であることがわかった。次の授業からぜひ生かしていきたい。」などの前向きな意見が多く聞かれた。

・指導法の試行と共有

「全員道徳」では、どの授業でも参観できることから、様々な指導法を試行し、共有することができた。特に「KP法」や「パネルディスカッション」等の対話的活動を取り入れた授業の試行と共有も見られた。

・「情報リソース(ICT機器)」の活用

大型ＴＶや一人一台学習用端末等のICT機器を活用した授業を互見し、アイディアを共有することができた。

〔道徳オンライン校内研修会の様子〕

また、道徳教育オンライン校内研修会では、「web会議サービス『V-CUBE』」を活用し、畿央大学の島先生と校区の3小学校をつないで、初めてオンライン研修会を実現したのはよかった。

②　課題（次年度に向けて）

・道徳の授業における基礎的な要素の共通理解

「生徒が考えたいと思う課題づくり」、「話しやすい雰囲気づくり」、「教師による生徒の意見の受け止め方とつなぎ方」、「気になった意見に対する問い返し」など、道徳の授業における基礎的な要素を、日頃の道徳の授業から全教員で共通理解し、実践していくことが大切であることを再確認した。

・深い学び（第3層）を得るための発問の吟味

「氷山の三層モデル」を活用し、発達の段階に応じたねらいを考えていくためには、授業の前半では、教材の出来事を自分事として捉え、十分に共感させること、また授業の後半では、生徒が深い学び(第3層:道徳的価値レベル)を得るための発問は、どうあればよいかを吟味していくことが大切である。

・深い学び（第3層）を得るための対話的活動の開発

生徒が、主体的・対話的で深い学び（第3層:道徳的価値レベル）を得るような対話的活動については、日頃の教育活動から話合い活動を積極的に取り入れ、教室内の話しやすい環境を作りながら、実践を積み重ね、模索していくことが大切である。

5　おわりに

今年度は、新型コロナの影響で4月からは研修を始めることができなかったが、6月からは授業も再開し、何とか新学習指導要領の全面実施と小中一貫教育の準備に向けて、カリキュラム・マネジメント研修と道徳教育研修の2本柱で進めることができた。カリキュラム・マネジメント研修では天笠　茂先生、道徳教育研修では島　恒生先生から、コロナ禍であるにも関わらず、直接指導をしていただける機会を得た。

今回のカリキュラム・マネジメント研修と道徳教育研修を通して、小中一貫教育を進めていくためには、まず中学校内の横の連携と小中学校間の縦の連携が、とても重要であり、教科間と小中学校間の垣根を超えて、一緒に研修していくことの大切さを痛感した。今後は、コロナ禍で進展したICT機器やオンラインをツールとして積極的に活用しながら、伏木中学校区の小中学校が一緒に研修し、前向きに授業改善ができる土壌を作っていきたい。そして今年度取り組んできたこと、天笠先生や島先生から指導していただいたことを生かしながら、2年目の研修をさらに深めていきたい。

主体的・対話的で深い学びにおける学習者用デジタル教科書の効果的な活用

― 朝日町教育センターを中核とした学習者用デジタル教科書の調査研究及び効果的な共通実践を目指して ―

朝日町教育センター　所長　木　村　博　明

1　はじめに

令和2年3月現在において、全国の公立学校における学習者用デジタル教科書の導入率は8.2%である。富山県においては、令和2年度現在で導入しているのは、唯一朝日町だけである。

朝日町では、令和2年度に町内小学校5,6年生及び特別支援学級在籍学年に国語科、算数科、外国語科の学習者用デジタル教科書を導入した。新型コロナウイルス感染症による学校の臨時休業中は、学習者用デジタル教科書がインストールされたタブレット端末を児童に貸し出し、家庭学習の充実を図った。また令和2年8月には町内全小中学生の家庭と学校をつないだ遠隔・オンライン授業を実施した。一人一台タブレット端末の整備も令和2年9月末に完了している。このように朝日町では学校と家庭、行政が一体となってICTを活用した学習の推進に向けて環境整備に努めてきた。

このような全国に先駆けての学習者用デジタル教科書の導入や効果的な活用方法についての研究、町ぐるみでのICT教育の推進が評価され、令和2年度、文部科学省「学習者用デジタル教科書実証検証校」に朝日町の小学校2校が全国で初めて指定された。

2　研究主題設定の理由

朝日町の恵まれたICT環境を生かし、学習者用デジタル教科書を効果的に活用することにより、新学習指導要領改訂の要である「主体的で対話的な深い学び」の実現を目標とし、本研究主題を設定した。教職員にとっては安心して学習者用デジタル教科書を活用できるように、児童にとってはより学びが深まるように、朝日町教育センターを中核としたチームによる調査研究及び情報共有を行うこととした。また富山県内における学習者用デジタル教科書の活用のパイオニアとしての自覚をもち、町内の教職員だけでなく、他市町村にも研究成果を還元できるよう、公開授業や情報提供を行うこととした。

3　研究の方法

⑴　情報教育調査委員会による学習者用デジタル教科書の家庭への持ち帰りの効果等についての検証

⑵　学力向上推進委員会による学習者用デジタル教科書を活用した授業研究及び公開授業の実施

⑶　学習者用デジタル教科書に関する意識調査

4　研究実践

⑴　情報教育調査委員会による学習者用デジタル教科書の家庭への持ち帰りの効果等についての検証

新型コロナウイルス感染症による学校の臨時休業中、朝日町では「子供の学びを止めない」を合言葉に、どのような方法で子供の学習保障をするかについて協議を重ねてきた。その対策の一環として、外国語科の学習者用デジタル教科書をインストールしたタブレット端末を町内の全ての6年生に一週間貸し出すこととした。臨時休業時において、いかに効果的に、そしていかに安全に学習を進めるかについて、町教育センターの情報教育調査委員会を活用して研究を進めることとした。

学習内容については、外国語科専科教員の助言の下、児童一人でも学習を進めることが可能な課題を設定した。特に児童が意欲的に取り組んだのは、音声読み上げ機能を活用して、ネイティブスピーカーによる英文を聞き、正しく発音する活動であった。

事後のアンケートでは、「家庭で学習者用デジタル教科書を使った学習は楽しかったか」の項目で、約85%の児童が「楽しかった」と回答した。一人で学習を進める状況であるにもかかわらず、多数の児童が楽しさを感じることができたのは、学習者用デジタル教科書の機能の要因だけでなく、情報教育調査研究委員会と英語専科教員の連携による研究の成果であると考える。

⑵　学力向上推進委員会による学習者用デジタル教科書を活用した授業研究及び公開授業の実施

①　調査研究の組織づくり

学力向上推進委員会において通常授業での活用方法について研究を進めた。本委員会は各小中学校から推薦された教職員により組織され、主に国語科、算数・数学科、外国語科における調査研究を

行っている。

学習者用デジタル教科書の活用については、全国でも先行事例が少なく、使用にあたり不安を感じている教職員が多かった。そこで、町教育センターと学力向上推進員会と連携して調査研究を進め、各校での研修や授業実践に活かせるようにした。

小学校で使用する学習者用デジタル教科書の活用方法についての協議に中学校の教職員にも参加を促し、小中学校間の意見交流を活性化させた。小中学校の教職員間で、義務教育9年間で身に付けたい力を明確にし、その実現に向けて学習者用デジタル教科書をいかに有効活用するかに焦点をあてて研究を進めることにした。

② 各教科での実践

学力向上推進委員会における調査研究をもとに、国語科、算数科、外国語科において公開授業を行った。授業後は参観した教員が成果と課題について参観シートに記入し、町教育センターが集約し情報共有を行い、PDCAサイクルを生かしながら授業改善に取り組んだ。町外にも積極的に授業を公開し、研究の成果を先行事例として他市町村にも還元できるようにした。

【国語科における実践】

小学校5年生「固有種が教えてくれること」の単元において授業研究を行った。

朝日町の5年生は、新出漢字の読み書きの定着が不十分で、読むことに苦手意識をもつ傾向がある。そこで、本実践では言語や読むことの力の定着のため、学習者用デジタル教科書の機能を活用することとした。

「なぞり書き」の機能

言語については、毎時間の授業の導入時に「なぞり書き」の機能を活用し、熟語の読みや書き順を復習する時間を設けた。毎時間の導入時に、「なぞり書き」の機能を活用することで、児童が短時間に集中して漢字練習を行うことができた。また、多くの児童が飽きることなく何度も繰り返しながら学習に取り組むことができた。

読むことの指導では、教材文の資料を拡大したり、書き込んだりすることで文章理解に役立てた。根拠となる文やポイントとなる表現に線を引いたり、色分けしたりすることで、自分の考えをまとめられるようにした。線を消したり、色を変更したりすることが簡単に行えるので、児童は何度も試行錯誤しながら自分の考えを練り上げることができた。また、タブレット上に書き込んだ考えを友達同士で見せ合うことにより、様々な考えに触れ、自分の考えを深めることにもつながった

「線を引く」の機能

【算数科における実践】

小学校6年生「データの特ちょうを調べて判断しよう」の単元において授業研究を行った。

朝日町の6年生は、正しく計算できるなど知識・技能の力は高いが、考えを練り上げたり、順序よく整理したりするなどの思考力・表現力に課題をもつ傾向がある。そこで、本単元では学習者用デジタル教科書のコンテンツを活用した操作活動を多く取り入れ、試行錯誤を繰り返すことにより思考力・表現力の向上を図った。

児童は学習者用デジタル教科書のコンテンツを活用して「ドットプロット」や「ヒストグラム」の作成をした。児童は、自分が納得できるまでデータの収集や配置を繰り返し、試行錯誤しながら表の作成に取り組み、最頻値や度数分布について理解を深めた。コンテンツ上で操作することにより、データを収集し直したり、表を作成し直したりすることが容易になり、考えを再構築したり、新たな発見を導き出したりすることにつながった。学習後の児童の感想からは「何度もやり直すことができるのでよかった」「簡単に操作することができるので、いろんな工夫ができた」等、試行錯誤しながら多様な方法で問題解決に取り組むことができたことへの満足感が感じられた。

コンテンツ上でのヒストグラムの作成

【外国語科における実践】

小学校6年生「Program5　It was green」の単元において、学習者用デジタル教科書を活用した授業研究を行った。

朝日町の6年生は、英文を正しく聞き取ったり、発話したりする力に課題があり、自信のなさから英文で伝え合う活動に消極的な傾向がある。そこで、「語や音「なぞり書き」の機能への知識・技能を高めること」「言語活動への意欲を高めること」をねらいとして、授業研究に取り組んだ。

「語や音への知識・技能を高めること」では、各Lessonの初めに登場するPanorama紙面（音声が埋め込まれたイラスト図）を使って単語や英文を聞き取り、しっかりと聞き取ることができた語をワークシートにチェックしていく活動を継続して行った。興味のある語やうまく聞き取ることができない語を何度も繰り返して聞くなど意欲的に学習に取り組む姿が見られた。この活動により、語や音への興味や関心が高まり、知識・技能を高めることにつながったと考える。

Panorama紙面上で聞き取り

「言語活動への意欲を高めること」では、ペン機能を使ってPanorama紙面上の現在と過去の様子や状態の違いに○をつけて比較し、ペアで“It is～.”や“It was～.”を使って変化の様子を伝え合う活動に取り組んだ。分からない語の発音については、その絵をタップすれば聞くことができる。何度も繰り返して練習に取り組むことにより、自分の発音に自信をもてるようになり、意欲的に英文で伝え合おうとする姿が多く見られた。この自信の積み重ねこそが、言語活動への意欲を高めることにつながったと考える。

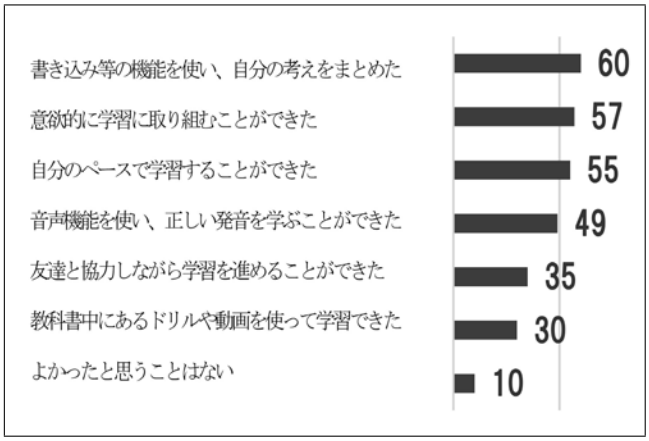
⑶　学習者用デジタル教科書に関する意識調査

学習者用デジタル教科書を効果的に活用するためには、そのメリットやデメリットを十分に検証するとともに、児童生徒及び教職員の実態、社会や保護者のニーズ等を把握することが大切であると考える。そこで、各教科において学習者用デジタル教科書を使って学習した後、児童、教員、保護者に対し、アンケート調査を行うこととした。

【児童へのアンケート】

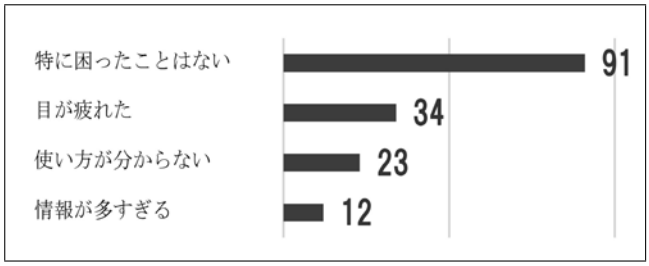
学習者用デジタル教科書を使用した町内小学5，6年生145名（5年生73名、6年生72名）を対象にアンケートを実施した。学習者用デジタル教科書を使ってよかったと思うことと困ったことについて、複数回答形式で調査を行った。

調査①　【児童：「よかった」と思うこと】複数回答



学習者用デジタル教科書を使用してよかったと思うことの設問に対しては、「書き込みや切り抜きの機能を使って自分の考えをまとめることができた」「意欲的に学習に取り組むことができた」「自分のペースで学習することができた」等に回答が集まった。この結果から、学習者用デジタル教科書の使用により、自分の考えをまとめ練り上げることや、学習意欲の向上、個に応じた学習について効果が期待できることが認められた。また、外国語科や国語科では、音声での読み上げ機能を利用することにより、正しい発音や読み方について理解を深めることにも効果が期待できることが認められらた。

調査②　【児童：「困った」と思うこと】複数回答

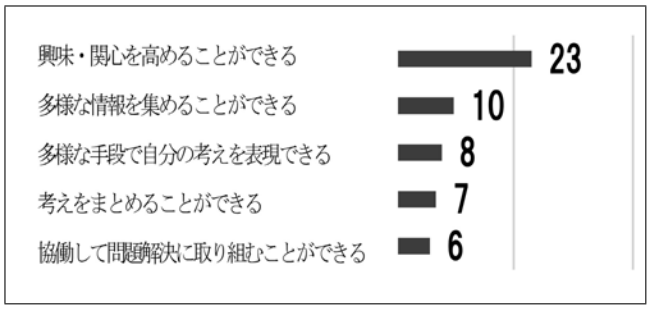


一方、学習者用デジタル教科書を使用して困ったことの設問に対しては、「特に困ったことはない」の回答が一番多かった。この結果と調査①の結果から、学習者用デジタル教科書を使用することに抵抗感はなく、使用することのメリットの方が大きいと感じている児童が多いことが明らかになった。しかしながら、目の疲れや技術的な心配に困り感を感じている児童も少なからずいる。また、情報活用についても、どのように必要な情報を収集して活用にするかについて戸惑っている児童もいることが分かった。

【教職員へのアンケート】

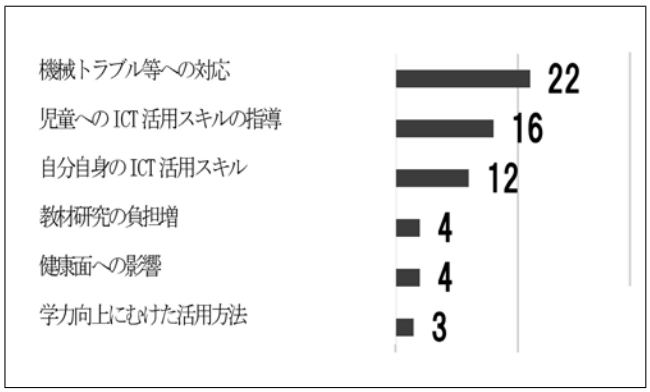
町内小学校教職員24名を対象にアンケートを実施した。学習者用デジタル教科書を使用して効果が期待できること、不安に感じることを複数回答形式により調査した。

調査③　【教職員:効果が期待できること】複数回答



教職員からは、特に効果が期待されることとして、「子供の興味・関心を高めることができる」の回答が多かった。実際に学習者用デジタル教科書を使用した授業では、子供たちが意欲的に学習に取り組んだという感想をもつ教職員が多かった。その他にもコンテンツを活用した情報収集や、書き込み機能等を活用した思考の整理や表現においても効果が期待されることが明らかになった。

調査④　【教職員:不安なこと】複数回答



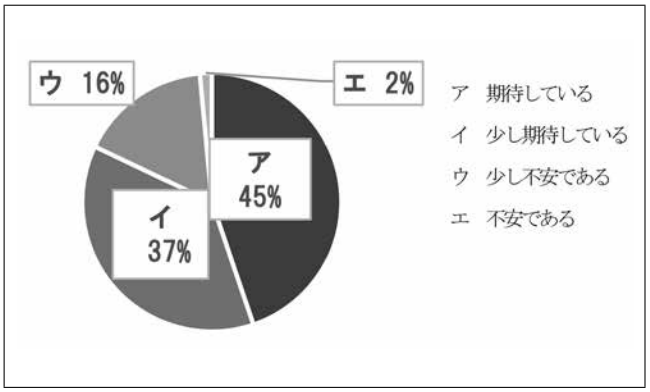
教職員が学習者用デジタル教科書を使用する際に不安と感じることの多くは、機械トラブルへの対応や児童への技術的な指導、そして自分自身のICT活用のスキル等、主に機器の取扱いや操作に関することであることが分かった。これらは先行事例の少なさや教職員のICT活用の経験不足に起因する不安であると考えられる。不安の解消に向けて、町教育センターを中心として情報提供を積極的に行い、授業実践を積み重ねることが重要であると考える。

【保護者へのアンケート】

学習者用デジタル教科書の使用について、町内の小学6年生の保護者68名にアンケート調査を行った。

学習者用デジタル教科書にどの程度期待しているか、どんなことに期待しているか調査した。

調査⑤　【保護者:学習者用デジタル教科書への期待】



保護者の82%が「期待している」「少し期待している」と回答している。その内容については「情報の充実」への期待が多かった。保護者は、児童に対して、必要な情報を取捨選択し、自分の学びに活かしてほしいという願いをもっていることが明らかになった。また、ICT活用の能力や個に応じた学習、学習意欲の向上にも期待を寄せていることが分かった。

一方、18%の保護者は不安を感じている。不安を感じる理由として、「書く力の低下」「個人情報漏洩や不適切な情報へのアクセス」への懸念が挙げられた。

5　成果と課題

(1)　成果

教職員が安心して学習者用デジタル教科書を活用するには、「それほど難しくない」「学習効果がある」と実感できることが大切である。そこで町教育センターや各調査委員会が効果的な活用方法について情報提供することにより、教職員がその有効性を実感し、積極的に活用しようとする機運が高まった。

各教科における「主体的で対話的な深い学び」を実現するための調査研究も進んだ。学習者用デジタル教科書を使用することのみが目的とならないように、身に付けたい資質や能力を明らかにし、児童が自ら学びたくなるような教材開発に取り組んだ。児童の授業後のアンケートからも、本研究の成果により、充実した学びとなったことが明らかになった。

また、研究成果を町内外に積極的に発信した。今後、学習者用デジタル教科書は全国的に普及が進むことが予想される。その先行事例として情報発信できたことは、富山県の教育にとって意義のあることと考える。

(2)　課題

今後は紙の教科書との効果的な併用について研究を重ねる必要がある。この研究においても、町教育センターが中核となり調査研究を積み重ね、その研究成果を県内外に向けて広く発信していきたい。

児童の運動有能感を高める体育授業を求めて

― 第３学年「みんなで楽しくつなごう！プレルボール」の実践から ―

富山市立堀川小学校　教諭　森　田　みはる
（R2 富山市立蜷川小学校での実践）

1　はじめに

本学級は、昨年度第3学年時の10月に、運動有能感尺度の調査を実施した。これは、「身体的有能さの認知」「統制感」「受容感」の3因子、全12項目で構成されており、3因子の合計点は12点から60点に分布するように開発されている。本学級では、特に「身体的有能さの認知」の因子において、20点中、学級平均14.80点と最も低い値を示した。「身体的有能さの認知」とは、自分は運動ができるという自信を表す項目である。

また、「身体的有能さの認知」に関する質問項目「わたしは運動がよくできると思います」「わたしは頑張ればほとんどの運動は上手にできると思います」「わたしは運動が得意な方です」「体育の時間、わたしは友達の上手な見本として、よく選ばれます」において、「いいえ」と回答した児童を対象に、その理由を自由記述で調査したところ、運動に自信がもてない理由を大きく3つに分類することができた。

① 走るのが遅い、ボールがキャッチできないなど、技能面による理由
② 運動が苦手、体育の授業で活躍できないなど、心情面による理由
③ 友達の方が運動が得意だ、友達の方がよく見本に選ばれているなど、友達との比較による理由

以上の調査結果をもとに、本研究では、以下の3つを実践し、運動有能感の高まりを検証することにした。

① 自己の技能向上を感じるドリルゲームの開発
② チームで活躍できたと感じる本ゲームの開発
③ 先生や友達に認めてもらえる授業展開の工夫

2　実践結果

① 自己の技能向上を感じるドリルゲームの開発

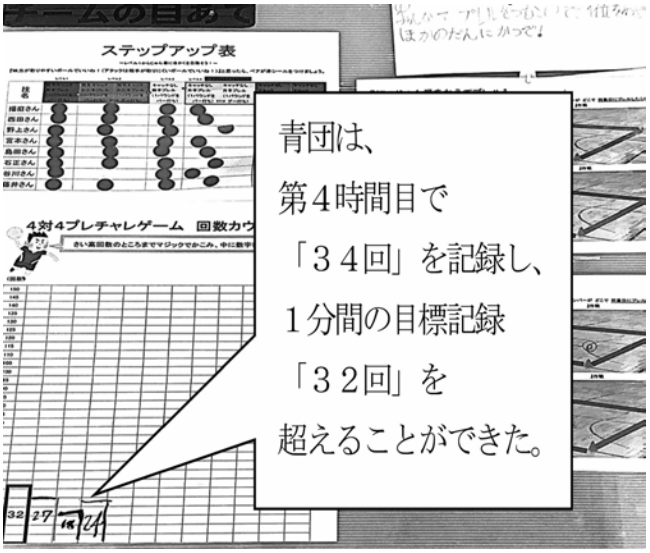
プレルボールの基本ルールは、以下の通りである。

❶ 1チーム3～5人で行う
❷ 5分間で多くの点数を取ったチームの勝ち
❸ サーブは、自分のコートでボールをプレルして、相手のコートに入れる
❹ ボールが1バウンドした後に、相手のコートへアタックまたはプレルでボールを返す
❺ 3回までに相手のコートへボールを返す
❻ ボールがコート外に出た、自分のコートでボールが2バウンドした、同じ人が2回連続でボールに触った場合、相手チームの得点とする

従来のプレルボールの授業では、ルール❸や❹に見られる「自分のコートで1バウンドしたボールを手の平で打ちつけて相手のコートに返す技術（プレル）」の難易度が高いため、運動に自信のない児童は積極的にゲームに参加することができず、技能を向上させる機会が減少していた。ドリルゲームとは、本ゲームの前段階として行う基礎的な技能の習得を目的とした記録達成型のゲームであり、授業の導入に取り入れることで、運動に自信のない児童でも自己の技能向上を感じて、本ゲームにも積極的に参加できるようになるのではないかと考えた。本単元のドリルゲームの内容は以下の通りである。

時数	ドリルゲームの内容
1～3	キャッチありプレル【ペアで曲に合わせて楽しく】 【チームで回数をカウント】
4	サーブ＆キャッチなしプレル【ペアで実践形式】
5～6	サーブ＆キャッチなしプレル【ペアで実践形式】 作戦練習ゲーム　【チームで実践形式】

本単元では、プレルボールの基本ルールにはない「自分のコートで1バウンドしたボールをキャッチし、もう一度バウンドさせて相手のコートに返す技術（キャッチありプレル）」という新しい技能を開発した。キャッチありプレルは、バウンドしたボールを一度キャッチすることで勢いを抑えてから、狙いを定めてボールをプレルすることができるため、運動に自信のない児童でも、単元前半のうちに自分の狙った場所にボールを返せるようになった。特に、キャッチありプレル【チームで回数をカウント】では、制限時間内であれば、チームの誰かが失敗をしてもリセットせずに回数を加算し、毎時間チームボードに記録を蓄積するというシステムにしたことで、多くの児童が自己の技能向上を感じることができた。



【A児が所属する青団のチームボード】

【ドリルゲームでキャッチありプレルをする青団】

②　チームで活躍できたと感じる本ゲームの開発

ルール❻では、相手のチームがミスをすることで、自分のチームに点数が加算されることになっている。そのため、児童にとっては、チームでボールをつなぐことよりも、運動に自信がある児童にミスなく点数を決めてもらうことが本ゲームにおいて重要になってしまう可能性があった。そこで、ルール❸「3回までに相手のコートにボールを返す」を「4回つないで相手のコートにボールを返せたら1点が入る」というルールに変更した。「4回つないで」としたのは、本学級では4人1チームで本ゲームを行っていたため、全員でボールをつなぐことがチームの得点に結び付くルールにしたかったからである。

青団に所属するA児は、運動に自信のない児童で、セストボールの授業では、ボールがパスされると避けてしまうこともあった。本単元でも、第1時間目後の体育ノートには、「ボールをペアにプレルするのは難しかった」と記述していた。以下は、本単元でのA児のプレルやアタックの成功率の変化である。

	ドリルゲーム			本ゲーム		
時間	触球数（回）	成功数（回）	成功率（回）	触球数（回）	成功数（回）	成功率（回）
1	42	28	66.7			
2	54	42	77.8	30	28	93.3
3	38	23	60.5	36	33	91.7
4	10	5	50.0	27	26	96.3
5	22	17	77.3	20	19	95.0
6	25	19	76.0	39	38	97.4

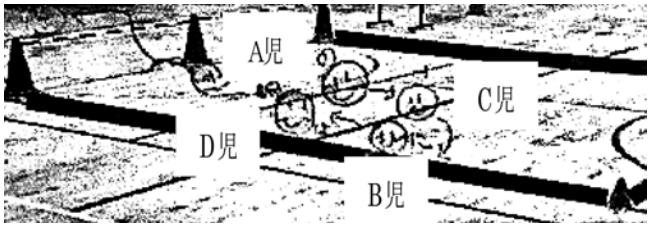
A児のドリルゲームでの触球数は10回～54回、成功率は50%から約80%であった。本ゲームでは、ビデオに不具合があり撮影できなかった1時間目を除き、触球数は20回～39回、成功率は90%以上をキープした。セストボールの授業とは異なり、毎時間のドリルゲームが設定されていたことや本ゲームのルールが変更されていたことによって、A児の触球数を毎時間30回以上確保することができた。そのことが、A児のプレルやアタックの成功率の向上につながったと考えられる。

時数	A児の体育ノートの記述
2	前よりもキャッチありプレルが上手になってうれしかった。それに、チームでボールをつないでたくさん点数を入れられたのでよかった。
3	青団で決めた作戦で、BさんとCさんがボールをキャッチできなかったときに、私がキャッチして、Dさんが点数を決めることにしている。 **自分でも点数を決められるようになりたい。**

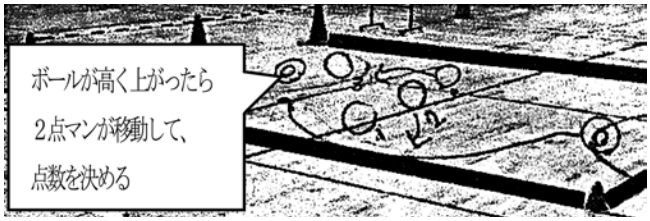
第2時間目までの青団は、A児の体育ノートの記述からも分かるように、全員でボールをつなぐことで点数が入ることを楽しんでいる様子であった。しかし、青団は個人の技能差が大きいチームであったため、第3時間目には、運動に自信があるD児が最後に点数を決めることが多くなっていた。その傾向は、青団だけでなく、他の団にも見られた。そこで、第4時間目から、「4回つないで相手のコートにボールを返せたら1点が入る」というルールに、「2点マンが点数を決めた場合には2点が入る」という新しいルールを追加した。2点マン

とは、どちらかのチームに点数が入るとそれぞれの児童に順番に回ってくる役割で、色帽子を被った2点マンが点数を決めると、チームに2点が加算される。このルールの追加によって、第4時間目以降の青団の作戦に変化が生まれた。

第3時間目までの青団は、「ABC作戦」という、A児、B児、C児の3人がプレルでボールをつなぎ、最後にD児がアタックで点数を決めるという作戦を行っていた。第4時間目のルール追加をきっかけに、青団は新しく「まどわせ作戦」という作戦を考え出した。「まどわせ作戦」とは、2点マンがコートの後ろで待機し、チームメイトがボールを高くプレルしたことを合図に2点マンが素早く移動して点数を決める作戦である。ドリルゲームでA児とペアだったD児は、A児にアタックの仕方を助言することが増え、初めてアタックに挑戦した第4時間目のA児の成功率は一旦低下したが、第5時間目には70%台まで成功率を高めた。また、第4時間目の作戦は、その場でフォーメーションやアタックのタイミングが変わるため、「Dさん高くプレル!」「2点マン、ここでアタック!」などチームの声かけも増えた。第5時間目の体育ノートには、「今日はアタックが全部成功してよかった。最後のプレルボールの授業に向けて、新しい作戦を考えたい」と記されていた。



【「ABC作戦」:A児、B児、C児がD児にボールをつなぐ作戦】



【「まどわせ作戦」:ボールが高く上がったら2点マンが点数を決める作戦】

【本ゲームでまどわせ作戦を実施する青団】

③　先生や友達に認めてもらえる授業展開の工夫

第4時間目から、それぞれ児童は体育ノートに、「相手のコートのここにプレルすれば(アタックすれば)点数が取れるのではないか」と作戦を書いていた。しかし、チームの作戦タイムを設定すると、どうしても発言力のある児童の作戦が本ゲームに採用されることが多かった。そこで、本人の了解を取り、教室内にそれぞれの考えた作戦を掲示することにした。もっと詳しく紹介してほしい作戦には、児童が赤シールを貼り、赤シールが多かった作戦を中心に授業の導入で紹介する時間を設けた。その際には、児童の考えた作戦をパワーポイントにすることで、どんなふうに動く作戦なのか他の児童に分かりやすく伝わるようにした。作戦を聞いていた児童からは、「相手がいないところにボールをプレルするのだね」「わざと後ろに構えて相手を油断させるなんてすごい」など、その作戦を考えた児童を認める声かけが聞かれ、パワーポイントで紹介された作戦が実際のゲームで採用されることも増えた。

【授業でA児の作戦が紹介されている様子】

3　取り組みの成果

本単元終了後、再度、運動有能感尺度の調査を行った。どの項目においても点数の向上が見られ、授業前と比べて、「身体的有能さの認知」が最も大きく向上した。A児に関しては、全ての項目において向上が見られ、合計点は学級の中で最も大きな向上となった。その中でも、最も大きな数値の向上となったのは、「難しい運動も頑張ればできると思う(2あまりそう思わない → 5とてもそう思う)」の項目である。単元終了後のA児の体育ノートにも、「1番難しいキャッチなしプレルやアタックで点数を決められてうれしかった」と記述されており、プレルボールに必要な技能の習得が保証されていたことが、A児の運動有能感の高まりにつながったと考えられる。

因子	授業前	授業後
1　運動がよくできる	4.07	4.27
2　運動は上手にできる	3.98	4.00
3　練習すれば記録が伸びると思う	4.03	4.30
4　頑張れば運動は上手になる	4.27	4.33
5　先生が応援してくれる	4.07	4.50
6　仲間が応援してくれる	4.07	4.37
7　誘ってくれる友達がいる	3.63	3.93
8　見本として選ばれる	2.73	3.43
9　一緒に運動する友達がいる	4.10	4.34
10　運動が得意である	4.07	4.30
11　難しい運動も頑張ればできると思う	4.21	4.31
12　あきらめないで練習すればできると思う	4.07	4.40
身体的有能さの認知	14.80	16.00
統制感	16.53	17.20
受容感	15.90	17.00

【本学級の運動有能感尺度の変化】

因子	授業前	授業後
1　運動がよくできる	3	4
2　運動は上手にできる	2	4
3　練習すれば記録が伸びると思う	4	5
4　頑張れば運動は上手になる	3	5
5　先生が応援してくれる	5	5
6　仲間が応援してくれる	3	4
7　誘ってくれる友達がいる	3	3
8　見本として選ばれる	2	3
9　一緒に運動する友達がいる	3	5
10　運動が得意である	3	5
11　難しい運動も頑張ればできると思う	2	5
12　あきらめないで練習すればできると思う	3	5
身体的有能さの認知	10	16
統制感	12	20
受容感	14	17

【A児の運動有能感尺度の変化】

4　取組の課題

形成的授業評価を用いたアンケート調査を見ると、第4時間目の授業が、本学級の児童に最も低い評価を受けていることが分かった。第4時間目は、「キャッチなしプレル」「アタック」を初めて取り上げた授業であり、A児の成功率も最も低い値を示した。難しい技能だからこそ、毎時間のドリルゲームに取り入れることで、児童も抵抗なく技能を身に付け、成果を感じられる授業になったのではないかと考える。

5　終わりに

本研究を通して、児童の運動有能感を高める体育授業を行うためには、以下の2点が大切であるということが分かった。

- 運動に自信のない児童も積極的にゲームに参加できるドリルゲームの開発や本ゲームのルール設定
- 先生や友達に認められる授業展開の工夫

様々な運動領域で、運動有能感の低い児童生徒の運動有能感を高める授業実践が行われており、いずれも運動有能感の低い児童生徒の運動有能感の伸びだけではなく、記録や技能についても向上がみられたことが報告されている（水谷・岡澤、1999）。しかし一方で、これらの授業実践が運動有能感の低い児童生徒の運動有能感を高めるという視点から工夫されているため、運動有能感の高い児童生徒の運動有能感の向上が見られない、若干の低下がみられる事例もある（岡澤・辰巳、1999）。本研究でも、授業前に運動有能感が高い児童の場合、授業後の運動有能感の調査でほとんど変化しない、または低下した児童が4名見られた。ただし、運動有能感の低い児童生徒が積極的に参加できる「個人スポーツの集団ゲーム化」「教え合い、励まし合いながら取り組める場」の工夫が、運動有能感の高い生徒の運動意欲や、楽しさに有効な影響を及ぼすことが明らかとなった（岡澤、2008）との報告もある。

今後は、運動有能感が低い児童の基本的な技能の習得を目指した単元計画の作成はもちろん、運動有能感が高い児童の技能面だけに留まらない活躍の場の確保も念頭に入れて、授業研究を続けていきたい。

6　参考文献

岡澤祥訓・諏訪祐一郎「運動の楽しさ」と「運動有能感」との関係（1998）

岡澤祥訓・馬場浩行「運動有能感が体育授業中の児童 生徒行動に及ぼす影響」（1998）

岡澤祥訓・井上寛崇「体育授業における運動有能感を高める工夫が運動意欲および楽しさに及ぼす影響に関する研究」（2003）

新しい生活様式に応じた、子供の自己学習力を高める授業の在り方

― 自由進度学習を参考とした授業改善の営み ―

富山市立船峅小学校　教頭　松　本　竜　也
（R2 富山市立船峅小学校　教諭での実践）

1　はじめに

令和2年度始めの臨時休業措置から学校が再開され、現在は感染症対策を行いながら日々の授業を実施している。しかし、コロナ禍は収束の兆しが見えず、今後再度の臨時休業措置等も考えられ、教師主導による一斉授業のみで教育活動を進めていくことには限界が感じられるようになった。

このような状況において、子供が個別に学習を進め、一人一人の自己学習力を高めていく授業に取り組むことが、これまで以上に重要であると思われた。また、そのような授業を通して高められた自己学習力は、コロナ禍の収束後にも、子供が自らの人生を切り拓いていく力につながると考えられた。

しかし、本校では現在においても一斉授業が主流であり、学習の個別化への着目は少ない。また、子供たちの日々の様子からも、一人一人が自らの学習をつくる意欲と力を高めていく必要性が感じられる。そのような中、個別学習を通して子供一人一人の自己学習力を高める自由進度学習が、私たちの授業改善の参考になると思われた。

2　自由進度学習と子供の自己学習力

⑴　自由進度学習の概要

自由進度学習とは、ある教科・単元において、一人一人の子供が、自分のペースや方法で主体的に学習を進めていく授業形態である。愛知県東浦町立緒川小学校で実践されてきた「週間プログラム学習」から発展し、その後にも様々な学校の実践が「教科の一人学び」として紹介され[※1]、現在も多くの学校で実践が重ねられている。

自由進度学習では、まず単元の初めに、その単元の学習内容やチェックポイントが示された「学習の手引き」を全員に配付し、子供たちはそれに基づいて自らの学習計画を立て、課題追究を進めていく。課題追究のためのワークシートも単元の初めに子供に手渡され、必要な用具等も教師によって準備されている。このような中で子供は個別に学習を進め、教師はその支援を行っていく。

⑵　自己学習力の捉えと本校の子供の実態

前述の緒川小学校[※2]では、数十項目の評価の観点を文章化し、それらを子供の「自己学習力」と定めた。また、澤田[※3]は、「自己学習力とは、他人からの命令・指示によってではなく、自分の意志・判断によって、自らの学習を組み立て、進めていくことができる能力を指す」と述べている。山崎[※4]は、「自ら学ぶ力」の育成の視点として、「個性と創造性」「主体性の育成」「基礎・基本の習得」等の五つの要素を示している。これらに共通する子供の姿は、学習課題を自らのものとして捉え、自らの計画に基づいて学習を進め、自己評価を行い、さらに自らの力の高まりを願って学習を進めていく姿である。

その視点から本校の子供たちを見ると、教師の発問や指示に対しては熱心に応えようとするものの、課題を自分事と捉え、計画を立てて追究を進めたり、自己評価を次の学習に生かしたりする経験は少ないように思われ、子供たち一人一人の自己学習力を高める取組の必要性が感じられた。

そこで、本研究では自由進度学習を参考とし、以下の四つの視点から、子供の自己学習力を高める授業の在り方について考察する。

① ワークシートの活用と教師の役割の明確化
② 授業の実践
③ 子供の反応と教師の意識
④ 実践の考察と今後の改善策

3　ワークシートの活用と教師の役割の明確化

⑴　ワークシートの作成と提示

子供が使用するワークシートとして「学習の手引き」と「学習シート」の二種類を用意した。

「学習の手引き（資料①）」には、単元の目標を明示し、その単元の学習内容を時系列に沿って全て掲載するとともに、教師が確認するチェックポイントを示した。また、単元の目標や各学習課題は、教師が一方的に示すのではなく、子供たちの話合いを通して具体化し、学級全体で確認しながら提示するようにした。「学習シート」は、教科書付属のワークシートを基に、子供が無理なく段階的に学習を進められることを意識して作成し、「学習の手引き」と合わせて単元の始めに配

資料①

4年理科「とじこめた空気と水」学習の手引き

名前

【目標】（標準時間６時間）

○ とじこめた空気や水の性質について正しく理解しよう。
○ 正しい仕方で実験・観察・記録をし、自分の考えを表現しよう。
○ 学習したことを、これからの学習や自分の生活に生かそう。

【学習の流れ】（標準時間：６時間）

学習内容	教科書	学習カード	答えカード
【スタート課題】 プラスチックのつつに玉をつめ、おしぼうを使って、玉を飛ばしてみよう。	P118 ～119	① ★チェック１	
【話し合い】 問題をつかみ・学習計画を立てよう。	P120	学習の手引き ★チェック２	
【課題１：　　】	P ～	②③④ ★チェック３	
【課題２：　　】	P ～	⑤⑥ ★チェック４	
【たしかめよう】 わかったかな・できたかな／考えよう	P127	たしかめよう ★チェック５	答えカード①
【テスト直しと、学習の振り返り】		学習の手引き アンケート ★チェック６	

※ここまでは必ず終わりましょう。

発展学習	☆ 玉をより遠くに飛ばす方法を考えよう ☆ 的当てゲームを作ろう …等

【学習の振り返り】	◎・○・△
○ とじこめた空気や水の性質について、正しく理解することができた。	
○ 正しい仕方で実験・観察・記録をし、自分の考えを表現することができた。	
○ 学習したことを、これからの学習や自分の生活に生かそうとすることができた。	

★自分の学習を振り返って、思ったこと、考えたこと、気付いたこと等を、自由に書きましょう。

付し、子供たちが学習の見通しをもてるようにした。子供たちは、これらのワークシートを基に、一人一人が学習課題を確かめ、自分のペースで学習を進めていった。

⑵　学習過程における教師の役割

学習は子供が自ら進めることを原則とし、学習中に子供たちが互いに相談することや、必要に応じて教室外や図書室等に行くことも自由である。教師は机間巡視をしながら、主にチェックポイントでの確かめと、相談のあった子供やつまずきの見られる子供への個別支援を行うようにした。

4　授業の実践

⑴　6つの授業実践

本研究では、筆者、4年担任、1年担任が、以下の六つの授業実践を行った（①～⑥は実施順）。

① 4年生理科「1日の気温と天気」筆者（教務主任）
② 4年生理科「電流のはたらき」同上
③ 4年生理科「すずしくなると」同上
④ 4年生理科「とじこめた空気と水」同上
⑤ 4年生国語科「お礼状の書き方」4年担任
⑥ 1年生国語科「かん字学しゅう」1年担任

⑵　4年生理科「とじこめた空気と水」より

本単元は、4年生9名の子供たちにとって、四つめの自由進度学習による単元である。単元の導入は教師による「空気鉄砲」を提示した。興味をもった子供たちは、それぞれの実験キット（プラスチック製の筒と押し棒、「玉」等が含まれている市販の注射器型実験用具）を手にし、それまでの自由進度学習の経験を生かしながら、教科書を参考に「学習の手引き」に沿って自らの学習計画を立てた。

最初の課題である、閉じ込めた空気の性質についての学習では、子供たちは「空気鉄砲」による実験に意欲的に取り組み、空気は押し縮められることや、押し縮められた空気は元の体積に戻ろうとすること等を理解していった。教師は、安全面に関する指導以外は子供たちの自主的な活動を促し、子供には最小限の助言を行うにとどめた。子供たちは「玉の位置や数を変える」「中に小さな発砲スチロールを入れる」等、それぞれが工夫した実験を行い、「玉を奥まで入れると、遠くまで飛ばなくなるのは、中の空気の量が少ないからじゃないかな。」「発泡スチロールが縮んだ!中の空気全体が縮んでいるんだ!」等と、体験を通して理解を深めることができた。また、実験の方法や観察された結果について、子供同士が「同じくらいの位置で、同じくらいの力で押したら、やっぱり同じくらい飛ぶよね。」「僕は空気は縮められたけれど、縮めるほど押し返す力が強くなった。○○さんはどうだった?」「僕もそうだったよ。どうしてだろう。」等、自然発生的に意見交換をする姿も見られるようになった（写真①）。そして、そのように閉じ込めた空気の性質について学習した子供たちは、「水は空気と同じなのかな」と、自然と次の疑問をもち、その後も仲間と関わりながら、主体的に学習を進めていった。

【写真①】

閉じ込めた水の性質を確かめる学習でも、子供たちは水鉄砲をつくったり、押し棒の押し方や向きを変えたりしながら、一人一人が様々な方法を工夫して実験を行っていた。また、「なぜ空気は押し縮められて、水は押し縮められないのだろう」と自ら疑問をもち、調べてみようとする子供も現われた。

さらに、発展学習では「空気鉄砲」を利用した「手作りクラッカー」を製作するなど、学習したことを生かして活動を工夫する子供も見られた（写真②）。

【写真②】

このように、子供たちが自ら課題を見付け、自由な発想による実験を行い、楽しみながら発展的に学習をつくり出していく姿が見られた要因として、以下のような自由進度学習による授業の特徴が考えられる。

① ワークシートによって、子供が学習の見通しをもって自ら学習計画を考えられる。
② 一人一人が自力解決を求められることで、子供が学習課題を自分事として捉え、解決方法等を自分で考えるようになる。
③ 学習の進め方（進度、用具、場所等）が一人一人に任されているため、子供が自らの意思や発想に基づいて学習を進められ、充実感や達成感を得られる。
④ 教師が個別の子供の実態を捉え、個に応じた指導や支援を行いやすい。

以上のような特徴をもつ自由進度学習を取り入れた授業によって、一人一人の子供が主体的に学習に取り組み、自己学習力を高めていくということが、子供の姿を通して少しずつ明らかになってきた。

5 子供の反応と教員の意識

⑴ 子供のアンケート結果

自由進度学習による子供の変容を捉えるために、各単元の終わりに「①今回、自由進度学習に取り組んで、一人で学習する力が高まったと思いますか。」「②今後も自由進度学習に取り組んでみたいと思いますか。」の2項目について、「とてもそう思う（4）」「まあまあそう思う（3）」「あまりそう思わない（2）」「まったくそう思わない（1）」の4段階での自己評価と、自由記述でのアンケートを行った。自己評価の結果は表1・表2の通りである。

表1 一人で学習する力が高まったと思いますか。

	天気と気温	電流	すずしく	空気と水
A児	3	3	4	4
B児	3	3	4	3
C児	3	3	4	4
D児	3	3	3	4
E児	4	4	4	4
F児	4	4	4	4
G児	3	3	4	4
H児	4	4	3	4
I児	3	4	4	4
平均	3.33	3.44	3.78	3.89

表2 今後も自由進度学習に取り組んでみたいと思いますか。

	天気と気温	電流	すずしく	空気と水
A児	3	3	3	3
B児	3	3	3	4
C児	3	3	4	4
D児	3	4	4	4
E児	4	3	4	4
F児	3	3	4	4
G児	4	3	4	4
H児	3	3	3	3
I児	4	4	4	4
平均	3.33	3.22	3.67	3.78

最初の「天気と気温の変化」と、最後の「とじこめた空気と水」の平均値を見ると、質問①は3.33から3.89へ、質問②では3.33から3.78へと、どちらも上昇している。この2単元の回答について統計的に分析を行った結果、質問①②共に有意な差が見られた（分散分析：質問①$F(1,8)=10.00, p<.05$、質問②$F(1,8)=6.40, p<.05$）。以上の結果から、子供たちは自由進度学習の経験を重ねることを通して、自ら学ぶ力の高まりを感じるとともに、さらに学習を続けていく意欲が向上したと考えられる。

また、自由記述での回答や、個別の面談では、以下のような言葉が見られた。

・調べたいことや難しいことを、自分で乗り越えられて、とても嬉しかった。（MJ児）
・自分で進めると、楽しくなっていった。もっと自分で進めるようになりたい。（NA児）
・自分で最後まで進めてよかった。達成感があった。家庭学習でもやってみたい。（OS児）
・自分でやることで、がんばったこととして、記憶に残る。何度も自由進度学習に取り組むと、学習する力が高まる。（YA児）

アンケートの結果や自由記述での回答は、子供の自己学習力や自由進度学習に対する意識の変容を示しているものであり、自己学習力そのものの向上を示しているものではない。しかし、自由進度学習を継続することによって、子供に自信と意欲が高まったことは確かであり、そのような自信と意欲は、子供が自らの力を高めていく土台となるものであると思われる。以上のことから、子供の自己学習力を高めるために、自由進度学習を取り入れた授業実践は、大きな力になると考える。

⑵ 実践に取り組んだ教師の意識

① 4年生国語科「お礼状の書き方」

理科と同様に「学習の手引き」とワークシートを活用

して子供が個別学習を進める授業を行った。以下は授業を行った4年担任のコメントである。

・自分の興味・関心に基づいて学習を進めることで、目標や課題に向けて自主的・意欲的に取り組んでいた。「お礼状」が完成したときの達成感を強く感じている様子だった。自分から学習することへの意欲は増したように思う。他の教科や単元でも自由進度学習を取り入れて、子供たちが主体的に学習する力を伸ばしたい。（4年担任）

4年担任は、子供たちの学習意欲や達成感が高まった姿に触れ、一人一人が主体性に取り組む授業をより多く実践しようとする意識が高まった。実際にこの後の4年生の授業では、教師が話す時間が減り、子供が話し合ったり活動したりする姿が、より多く見られるようになった。

②　1年生国語科「かん字学しゅう」

1年生は発達段階を考慮して部分的に自由進度学習を取り入れた。「学習の手引き」に代わる、学習方法を示したA4用紙1枚のシートを配付し、子供たちはそれに基に自分の漢字ワーク（市販）を進めた。授業を行った1年生担任のコメントを以下に示す。

・子供たちが進んで学習するようになった。以前は「（漢字ワークの）どこをやるんですか」と言っていた子供が「次、進んでいいですか」と言うようになった。丁寧に書こうとする意識も高くなったように思う。個に応じたアドバイスをしやすくなったし、漢字が苦手な子供を時間をかけて見られるようになった。（1年担任）

1年担任は、子供の学習意欲の高まりを感じるとともに、自由進度学習によって個々の学習の進め方やつまずき等が見えやすくなったことから、個に応じた指導への意識が高まった。現在ではこの取組を漢字以外の学習にも応用し、一人一人の子供が自らの力を高める授業の工夫を継続している。

6　実践の考察と今後の改善策

⑴　子供同士の交流場面の設定

自由進度学習による個別学習の中でも、子供たちが互いに関わり合おうとする姿が見られた。また、アンケートの自由記述においても、「たまにはみんなで意見を発表しながら勉強したい」という回答が見られた。その後の自由進度学習の中で全員での話合いの機会をもったところ、普段よりも活発な話合いが行われ、子供から「みんなでいっしょに意見交換できてよかった」という声が聞かれた。

これらのことから、個別学習を中心としながらも、子供同士の交流は重要な意味をもつことや、個別学習が充実しているからこそ交流の必然性が高まることが感じられた。今後は、子供たちの交流への必要感を重視し、適切なタイミングで機会を設定できるように、子供の実態把握と教材研究を通して、単元の構成を工夫した授業を行っていく。

⑵　学習内容の定着との両立

本研究においては、子供の学習内容の定着については検証していない。今後は、学習内容の定着に関する評価を単元の中で行い、その結果を子供にフィードバックすることによって、単元を通して子供の自己学習力の向上と学習内容の定着を両立していくようにする。また、その結果についても検証を行い、さらによりよい方法を探っていきたい。

7　おわりに

本研究を通して、子供たちは、学習を自分事と捉え、自らの力で進めようとする姿が見られるようになった。また、実践に取り組んだ教師からは授業を通した子供の変容を感じる声が聞かれるとともに、一人一人の子供の自己学習力を育てようとする意識の高まりが感じられた。子供一人一人の自己学習力を高める授業を行っていくことは、このコロナ禍後の子供たちの学びにとっても、一人一台端末時代の授業づくりに取り組む教師にとっても、非常に重要なことであると考える。今後は、本研究で得られた成果をさらに広く教師間で共有し発展させていくことによって、本校の子供たちのさらなる成長や、学校全体の授業改善につなげていきたい。

【引用・参考文献】

※1　竹内淑子・小山儀秋『教科の一人学び「自由進度学習」の考え方・進め方』2019、黎明書房
※2　愛知県東浦町立緒川小学校『オープンスクール選書8 自己学習力の育成と評価―続・個性化教育へのアプローチ―』1985、明治図書出版
※3　澤田稔「単元内自由進度学習から見たカリキュラムマネジメント」、同※1
※4　山崎裕二『三つの学習類型による「自ら学ぶ力」の育成』、北尾倫彦『図文・指導と評価シリーズ① 自己教育力育成の実践事例集』1990、図書文化社

生徒一人一人に確かな学力を身に付けさせる学年経営の工夫

― 学習環境整備の側面から生徒の学びを支援する学年経営を通して ―

高岡市立福岡中学校 教諭 寺 田 孝 子

1 はじめに

小学校から中学校への学校生活の変化は、生徒の心身の発達に大きな影響を与える。特に、第1学年は、中学校における学習の基礎を固める大切な学年である。私が考える「学習環境デザイン」は、生徒が成長する上で知識を習得することや思考を深めることを支援したり方向付けたりするように、物理的・心理的な支援を総合的・計画的に行うことである。授業での活動のさせ方や学習規律の定着、家庭学習の定着、人間関係の安定等、「学習環境デザイン」という側面からの支援は、第1学年にこそ効果的であると考える。さらに、生徒同士の学び合いを醸成するリーダーの育成、問題を抱えている生徒の自己肯定感・自己有用感を高める取組等は、今後の3年間の中学校生活、特に学力の向上に必ずやプラスに働くはずである。

本校第1学年は、通常学級3クラスと特別支援学級1クラスの計4クラスである。担任は、4人とも20代であり、経験年数も1年から3年という非常に若い教員と学年主任（筆者）で構成されている。担任は、前向きでひたむきに教育活動に取り組んでいる。しかし、経験が少ないため、学習指導、生徒指導、分掌や教育相談等、様々な場面で方向性を示したり、サポートしたりする必要がある。

そこで、今年度、第1学年の生徒一人一人に確かな学力を身に付けさせる手立てを「学習環境整備」の側面からデザインし、担任の育成も含めた学年経営をしたいと考え、実践研究を行うこととした。

質問項目に対して肯定的な評価をした人数の割合

かなりそうだ ややそうだ	教師	教師－生徒(差)	1年
「分かる」「できる」について	100%	**20.7**	**79.3%**
授業の振返りについて	94.1%	13.9	80.2%
家庭学習や定期考査を活用した振返りについて	94.1%	**14.8**	**79.3%**
高め合う集団づくりについて	100%	11.5	88.5%

2 実態把握のために

観察・質問紙を用いた生徒の意識の実態調査から

本校での学校評価の結果から学習についての項目を抜粋し、生徒や教員の学習に対する意識の実態把握や改善の指標とした。

このように1学期の学校評価では、教師も生徒も概ね良い評価をしている。特に、「高め合う集団づくり」についての達成度が大変高いという結果が出ている。しかし、予想通り、学習や学力に直接関係している項目については、教師と生徒の意識差が比較的大きい。このような実態を踏まえて、より一層、確かな学力を身に付けさせる学年経営の工夫を学習環境整備の側面から支援することが大切であると考えた。

3 学年経営の目標

Ⅱの実態把握を受けて、学年経営をしていく上での今年度の目標は、以下の通りである。

- 規律ある生活習慣を身に付け、心身の健康維持に努めることができる生徒の育成
- 学び方を身に付け、主体的に授業や家庭学習に取り組み、確かな学力向上に努める生徒の育成
- 生徒会活動や、学校行事などの取組を通して、感謝と思いやりの心をもち、自己肯定感や自己有用感をもつことができる生徒の育成
- 学年委員会を中心に学年内の問題点を自分たちで自覚し、改善していくことができるような自己浄化力の高い生徒の育成

4月当初の学年会で、学年担当の教員全員と共通理解を図った目標があったが、このように修正した。

若い担任の先生たちは、全員がやる気に満ちており、多くのことを切磋琢磨しながら積極的に吸収していこうという気持ちにあふれている。そのため、実態に応じて今後の方向性を示し直すことが、担任や指導者として何をすべきか、何をすればよいのか分かりやすかったようである。若いスタッフの授業や学習指導の改善に対する意識に大きなプラスの変化が見られた。

4　学習環境整備の側面から生徒の学びを支援するための具体的な取り組み

⑴　基礎的な学習環境整備の工夫

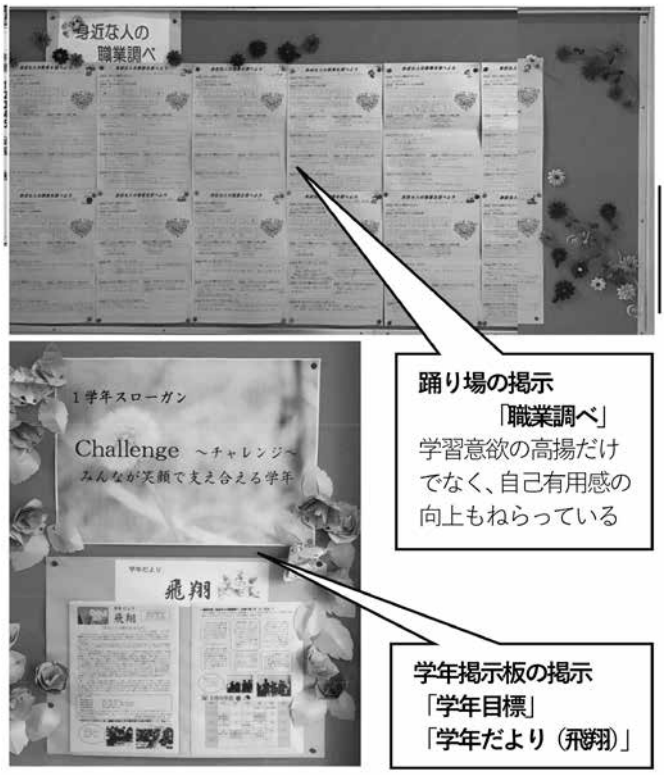
①　言語環境の整備

環境の整備で第一に、言語環境が重要であることを学年の教員全員で確認し、「生徒一人一人を大切にすることが学年全体の生徒を大切にすることである」という意識から、品格のある言葉遣いや思いやりのある言葉かけを行うように共通理解を図った。

学年主任としては、毎日、学校の開門と同時に生徒玄関に出て、登校してくる生徒たちの顔を見て挨拶を交わし、その日の生徒の様子などを担任と話題にすることによって、問題を抱えている生徒をより早く発見し、問題解決につながるように心がけた。特に、朝の生徒たちの様子は、その日の学習のモチベーションを感じる上で、大切な情報となるため、玄関での登校指導は、学年主任にとって、貴重な時間であった。

②　掲示の工夫による学習環境の整備

生徒の学びを支援するためには、安心、安全な学習環境づくりが欠かせない。そこで、学習環境を整えるために、教室等の環境整備を行った。「美しい心は、美しい環境から」という気持ちを各担任と共有し、学年で統一した教室環境整備を行った。その際、筆者が自分自身で掲示物をデザインし提案した。生徒全員が落ち着いた気持ちで学習活動に集中できるということと学習意欲の高揚を第一に考え、教室や学年に関係する場の掲示を工夫した。



③　授業における学習環境デザイン

1時間1時間の授業の積み上げにより確かな学力を身に付けさせるためには、その時間の目標、活動内容、振り返りという授業デザインが欠かせない。その時間の学習活動のデザインを中心としながらも、どのような場所で、何を使ってどのように思考を働かせるのかという展開に生きる学習環境を効果的に構成する必要がある。筆者の経験では、本時の目標から思考過程、振返りまでを美しく構成しデザインすることによって、生徒の学びをより深めるという効果があった。それに付随して、「学ぶ喜び」「視野の広がり」「生活に生かす」という成長まで見られるようになった。

本校の研修会での「ベテランの授業から学ぶ」という取組を通して、この美しい授業デザインを示すことにより、若い担任が多くのノウハウを吸収し、それらを自分の授業に生かしていることが、その後の「若手の授業から学ぶ」という公開授業の場で、確認することができた。

・生徒同士で考えさせる場面では、十分な時間が確保されていた。
・スモールステップで課題に取り組ませることで、生徒が自分の考えを述べることができていた。
・大型TVやデジタル教科書等のICTを活用することで、教科書のどの部分、図形のどの部分、演技のどの部分がポイントなのかが分かりやすくなっていた。
・ワークシートと同じ画像を大型TVに写し、そこに教師がかき込んだり拡大したりして模範演技を丁寧に行う説明の仕方がスムーズで分かりやすかった。

若手の公開授業を見ての感想より

④　家庭学習の習慣づくり

○　毎英ノートの取組から

家庭学習の定着を図るために、学年全員の生徒に「毎英ノート」に取り組ませている。中学校での英語科では、覚えなければならない単語量が、小学校の外国語活動と比較して格段に多くなる。そこで、英語のノートに毎日1ページ以上、英単語を練習する課題を出している。もちろん、休日も1日1ページ以上、英単語練習をさせることにしている。また、課題を出せなかった生徒には、その日のうちに英単語のプリント1枚を練習させ、提出してもらうことにしている。毎日、学年主任が学年全員分の毎英ノートを点検することによって、生徒の家庭学習のモチベーションを高めることができている。

また、この「毎英ノート」は、ただ単に英単語の語彙数を増やすことが目的ではなく、家庭学習の習慣付けや学習に入るための準備体操という意味をもって取り組ませている。これを第2学年の後期まで継続し、その後、家庭学習は、「テキスト学習」へとスムーズに移行していく計画である。

○　学年主任主催の放課後勉強会

家庭での学習環境が整わない生徒たちに、定期考査前の放課後、自主学習の場を提供した。これにより、学年のリーダーが、学習面でも他の生徒を引っ張り、生徒が互いに学び合う姿が多く見られるようになった。

⑵　生徒・学年のスタッフの将来を見据えた学習環境整備の工夫

①　行事を通して自己肯定感を向上させる

本校での大きな行事として、2学期に福中運動会があった。その中で、生徒一人一人や学年のスタッフに工夫させる場面を設定し、主体的に、応援合戦、全員リレー、学年団体競技（台風の目）を行わせたり、係活動をさせたりすることで、生徒一人一人の存在の大切さを共有・共感させることができた。お互いの健闘をたたえ合う様子が生徒主体で生まれ、クラスの団結がより深まった。球技大会では、クラス対抗でバレーボールを行わせたことで、助け合いの精神や団結力、互いの向上意欲を生み出すことができた。

また、毎学期や、学校行事毎に生徒に個人目標をもたせ、この目標が、学級目標、学年目標を意識した設定となるように指導した。そして、その目標を達成する意欲や態度を大切にしてきた。

これらのことが、個々の生徒の自己肯定感や自己有用感を高めるために効果的に働いた。

②　実力あるリーダーの育成

各クラスの学級会長、副会長、書記で構成する学年委員会では、定期的に生徒・学年スタッフと共にリーダーについて学び合い、学年のリーダーを育成してきた。指導していくうちに、各学級の問題点を、横のつながりから共に改善していこうとする姿が見られるようになった。また、前・後期学年委員を集結しての拡大学年委員会では、来年度の生徒会長に立候補しようという積極的な姿が見られ、その生徒たちをサポートしたり、応援したりしようとする学年全体の動きが見られた。

このことで、リーダー性のある生徒たちは、自分や学年に自信をもつことができ、学習においても各種活動

においても実力を発揮するようになった。学年のリーダーたちは、学習面でも他の生徒を引っ張り、学び合う姿が多く見られるようになった。家庭での学習環境が整わない生徒たちに、学年リーダーたちが、放課後、学習面で「ミニ先生」となり教えている姿も見られるようになった。

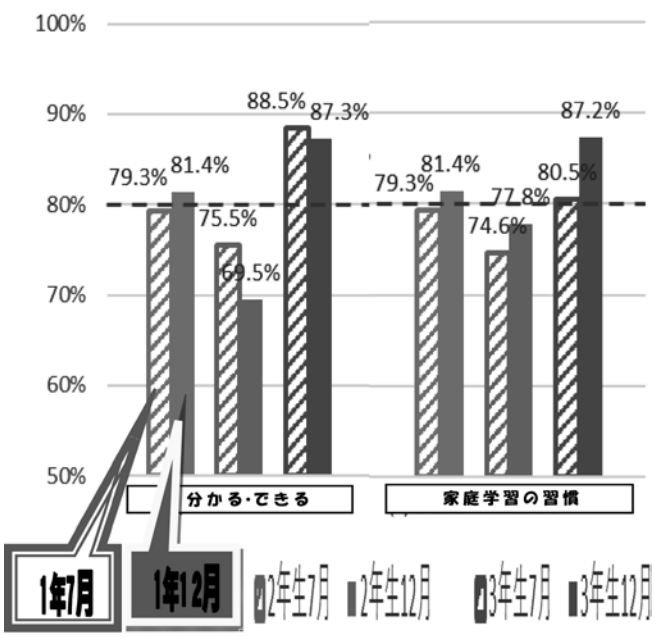
③　学習の問題を抱えている生徒の家庭学習の習慣化

2学期の後半から学習内容が難しくなるにつれ、学習に問題を抱えている生徒が、浮き彫りになってきた。このような生徒は、家庭学習を習慣化することが難しい。多くは家庭環境が大きく影響しているため、担任だけに任せるのではなく、学年主任として、自分自身で保護者や関係機関と連携を密に取りながら、問題に当たらなければ上手くいかないことが多い。家庭環境、成育歴が、家庭学習習慣や学習へのモチベーションに大きく影響していることは、周知の事実であるが、このことは早期に解決できない問題なので、通級指導や定期考査前の個別指導を通して粘り強く対応してきた。最も手応えを感じたのは、筆者が学年のスタッフにそのような姿勢を示し続けたことで、教師としての意識が明らかに変容したことである。

5　成果と課題

⑴　成果

1学期の評価と比較すると、2学期の学校評価では、第1学年の学習に関する項目で肯定的な評価が伸びてきた。今年度の取組が、生徒自身やそれを指導する学年スタッフの成長をもたらし、相乗的な効果を上げたと考えられる。



現在の学年は、学年主任としては、3巡目となる。毎年、生徒の学力向上を目指し、学習環境デザインに努めてきた。学年主任として2巡目の生徒達であった第3学年の11月に行われた中教研学力調査の結果は、県平均をはるかに凌駕し、約40点近く上回るという結果を出すことができた。入試直前のコロナ禍でも粘り強く家庭学習に取り組み、実力を出し切って志望校へ進学していった。今回の結果や暦年の成果から考えると、第1学年からの学習環境を物理的、心理的側面からデザインすることが、学力向上に深く結びついていると考えられる。そして、この学力向上こそが、生徒指導上の問題を激減させる効果があることも見えてきた。

⑵　今後の課題

今後の学年経営の課題は、継続も含めて以下の4点のデザインであると考えている。

・「あいさつをする」「時間を守る」「正しい服装」「授業を大切にする」など、形を整えることを根気強く指導する。また、情報交換を密にし、小さな問題行動も見逃さず、早期に指導する。
（規律ある学年）

・生徒会活動や学級活動などの取組を通して、一人一人が所属感や達成感を感じられるような場面を意図的に増やす。
（自己肯定感の高まり）

・学年委員会を中心に、学年内の問題点を自分たちで自覚し、改善していくことができるような実力のあるリーダーを増やす。
（リーダーの育成）

・保護者と連絡を取りながら、問題を抱えている生徒に対応していく担任のスキルをさらに向上させる。
（問題を抱えている生徒への支援）

6　おわりに

学習環境のデザインは、学力向上を図る上ではなくてはならないものである。今後は学習環境をデザインするだけではなく、学習環境をイノベーションしていくことが、学校経営の一端を担っている自分の役割である。このことは、学習環境のデザインを美しく構築していくことに他ならない。

今後も学習環境デザインを継続的に行っていくことが、学習環境のイノベーションを生み出すことにつながると考える。

教職員の資質・能力向上につながる授業改善（校内研修）3UP（スリーアップ）

― 働き方改革を見据えたOJTを通して ―

滑川市立田中小学校　教頭　辻　　里　美
（R2 滑川市立滑川中学校　教諭での実践）

1　はじめに

年度当初、学校運営方針が示された。その大黒柱は、授業改善と研修の充実。この運営方針は昨年度から継続された方針である。また、本校は学力向上拠点校として2年目を迎えた。

教務主任（研究担当）として、拠点校の取組と新学習指導要領全面実施に向けた授業改善の取組、そして研修会を進めるに当たりこれまでの互見授業や研修会等の在り方について再考し、模索した。

まず、考えたことは前例にとらわれず、堅苦しいイメージを払拭した互見授業や研修会ができないかである。校内では、これまでも互見授業は呼びかけられていたものの略案が必要であったり、普段の授業を終始見られるなどの抵抗感から実施には消極的であったりした。さらに研修会は、実施できない月や時間を短縮されて希薄なまま終えるという実態があった。

次に、授業改善に努めることや研修会が私たち教師にとってどれだけ有用性のあるものか、誰のためであるのか原点に戻り、教職員が主体的に研修に取り組むことができるようにしたいと考えた。そして、その考えを分かりやすく堅苦しさを払拭し、馴染みやすいものにならないかと考えたとき、キャッチフレーズが思い浮かんだ。

その名称は「3UP」である。意味は、Brush up、Level up、Career up。教職員一人一人が「3UP」の文字を目にすることでスイッチが入り、授業改善や研修会を自分のこととして捉え、実践してもらえるのではないかと考えたからだ。

また、中学校現場は部活動指導を熱心に行いたい教職員も少なくないので放課後の時間が貴重な時間かつ有限的となることや、昨今の教育課題である働き方改革が求められたり、若手教員の増加と年齢差のある教職員構成を生かしたメンター制度の導入が推奨されたりするなど、限られた時間を有効に使い、教職員の資質・能力を高めることができる校内研修を目指したいと考え、研究することとした。

2　研究の手立て

⑴　研修だよりの発行と研修会の実施
⑵　研修課題等の設定と公開・互見授業の立案
⑶　授業観察シートの作成
⑷　公開・互見授業の実施と事後プチ研修会（メンター制の試み）
⑸　若手、中堅教員と授業（OJT）（TT）の実施

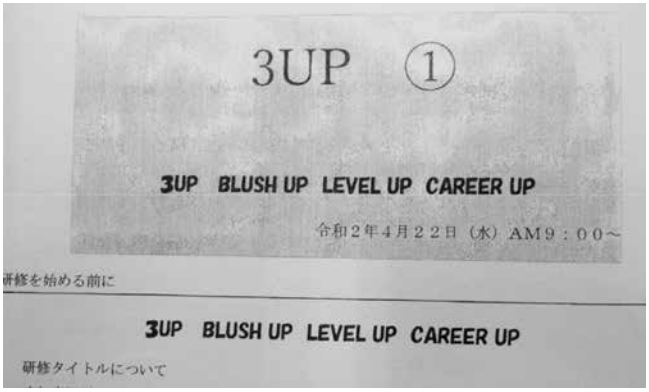
3　研究の実践

⑴　研修だよりの発行と月１回の研修会

担任時代や学年主任当時はよく、各だよりを発行していた。だよりには、自分の考えたことやその時々に起こる出来事を載せることにより、考えを知ってもらえるなどの有効性があると実感していた。

学年所属を離れ立場が変わると一層、自分の考えや周知したいことは自ら発信しないと深まらないと思い、研修だよりを発行することにした。内容にも少し配慮した。一つは、あまり堅苦しいものではなく考えるきっかけとなるようなもの、二つ目は研修に関わることだけでなく、日常的な話題や生徒のよさを共有したいなど、多岐にわたるものになるようにした。また、曖昧になっていた研修会を毎月の職員会議後に位置付け、月1回は実施できるようにした。そうすることで、研修する内容に系統性が生まれ、継続して行う価値が高まると考えた。さらに、研修会資料の作成に当たっては早めに着手し、教職員が見通し（内容と時間）をもって研修会に臨むことができるよう事前配付をモットーとし、資料を一読して臨めるよう努めた。

【下記は研修会資料・その見出しも3UP】



⑵　研修課題、身に付けたいスキルの設定と公開・互見・見学授業の立案

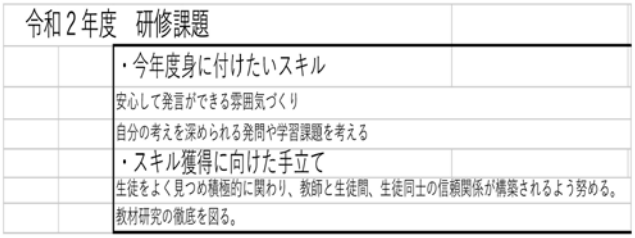
一人一人に目指すものがないのは動機付けにつながりづらいと考え、個々の研修課題と身に付けたいス

キルや毎月の課題を設定できるようにした。同時に学期単位、毎月公開･互見授業等を実施する日や週、同教科、他教科の教職員の授業を参観する日を合わせて立案できるようにした。そして、その設定は長期休業中の比較的時間にゆとりのある時期とした。入力したデータは紙媒体としての提出義務はなく、いつでも予定が変更できるようPC内に一人一人のデータ保存とした。また、課題、日程設定、授業公開することなどが個人の負担とならないよう次の点に配慮し、伝えた。

- 指導案や略案は不要とする。
- 1時間終始、参観しなくてもよい。自分の予定に合わせた参観時間でよい。
- 年間指導計画、学級の実態、単元の特性、考査や調査等の予定も鑑み、無理な予定を立てない。
- 予定の変更はいつでも可能である。

それぞれが立案した公開授業の予定は自分のPCのカレンダーアプリに入力し、PCの起動とともに予定が見られるように設定した。そして、該当する教職員に予定や学級等の変更がないかを確認し、変更がなければ公開となる教科、時間、場所を全体に知らせた。

【若手教諭の研修課題(通年)と公開授業等の予定表】



公開･互見授業の実施回数の制限を設定しない、フルタイムでの参観ではなく、ゆとりがないときは5～10分でもよいなど、実施しづらいと思われる事柄をなくしたことが功を奏し、毎月約十数名の教職員が実践に当たった。また、毎週同一時間に授業を公開して、継続的に変容を確かめたいと意欲的に取り組む教職員もいた。

【ある日の公開授業のお知らせ】

⑶　授業観察シートの作成

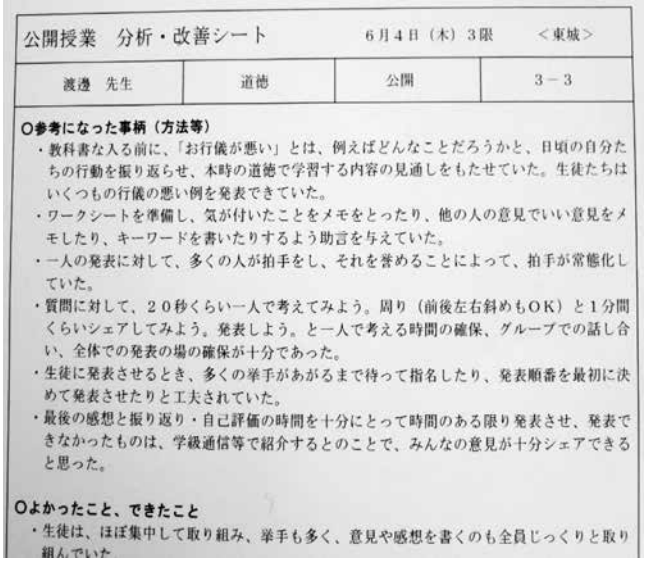
授業を公開するに当たり、これまで必要であった略案を不要としたため漠然と参観することを回避し、次につながるものにしたいと考え、観点等を定めた授業観察シートを作成した。また短時間の参観でも参観者と授業者の両者がどの部分に着目し、参観したかが明確になるようなシートに工夫した。

【下記のシートは授業実践チェクシート･校長先生が授業を参観し記入　→　授業者の下へ】

（様式1）

下記は分析･改善シート、具体的な事柄を箇条書きしたものである。

【校長先生が具体的助言を記入してくださった】(様式2)



公開授業　分析・改善シート　　6月4日（木）3限　　＜東城＞

渡邊　先生	道徳	公開	3－3

○参考になった事柄（方法等）

・教科書を入る前に、「お行儀が悪い」とは、例えばどんなことだろうかと、日頃の自分たちの行動を振り返らせ、本時の道徳で学習する内容の見通しをもたせていた。生徒たちはいくつもの行儀の悪い例を発表できていた。

・ワークシートを準備し、気が付いたことをメモをとったり、他の人の意見でいい意見をメモしたり、キーワードを書いたりするよう助言を与えていた。

・一人の発表に対して、多くの人が拍手をし、それを誉めることによって、拍手が常態化していた。

・質問に対して、２０秒くらい一人で考えてみよう。周り（前後左右斜めもＯＫ）と１分間くらいシェアしてみよう。発表しよう。と一人で考える時間の確保、グループでの話し合い、全体での発表の場の確保が十分であった。

・生徒に発表させるとき、多くの挙手があがるまで待って指名したり、発表順番を最初に決めて発表させたりと工夫されていた。

・最後の感想と振り返り・自己評価の時間を十分にとって時間のある限り発表させ、発表できなかったものは、学級通信等で紹介するとのことで、みんなの意見が十分シェアできると思った。

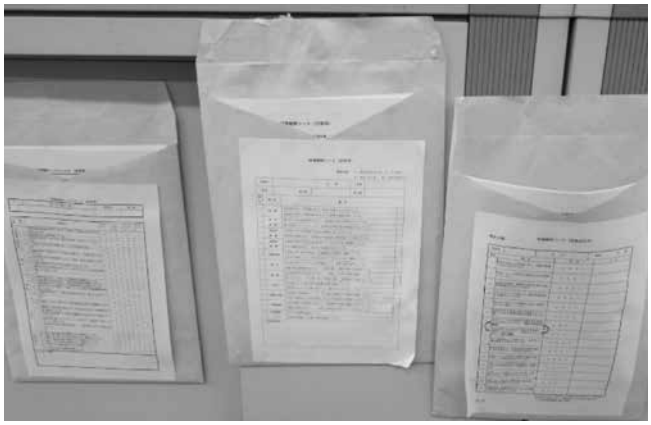
○よかったこと、できたこと

・生徒は、ほぼ集中して取り組み、挙手も多く、意見や感想を書くのも全員じっくりと取り組んでいた

このように、公開･互見授業等を実施した後は様式1か2のお土産をいただけるという利点がある。そして、その記入事項を基に継続的に取り組めばよいことや改善点が明瞭となり、次への意欲付けとなる。

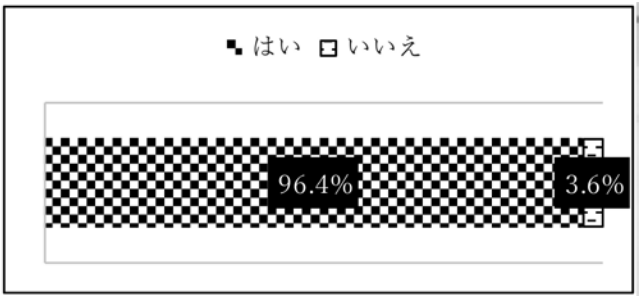
実際にこのお土産を手にした若手教員は、「毎時間、道徳の授業を進めていくうえで、暗中模索しながら展開していることが多く自信がないまま進めていたが、具体的なアドバイスをいただいたことで（可視化）少しずつではあるが自信がもてるようになった。また、次はもっとこうしようなど、改善、工夫する点が明確になって意欲が向上した。」という感想であった。各シートはコピーして保存した。時折、そのシートに記入されたことを参考にして、授業を継続的に参観することもあった。

【手軽に取れるよう職員室中央、机側面のデッドスペースを有効活用した】



一方、シートの有効性等について価値を確かめ、今後も継続していく指標にしたかったのでアンケートを実施した。以下はその質問と結果である。

質問：シートの内容や助言は、授業改善に生かしていますか。



結果から、有効性があることが分かったので今後も継続的に活用していきたい。

⑷　公開･互見授業の実施と事後プチ研修会（メンター制度の試み）

冒頭でも述べたとおり、校内研修が堅苦しいものや授業公開することを敬遠したり、事後研修の時間確保が困難であったり、実施者の負担をできるだけ軽減したいとの考えから全体での事後研修や教科部会等、形式張った会は設定しないことを大前提とした。また、部活動指導に時間を充てたい若手、中堅教員のニーズにも応え、事後研修の有無については実施した教職員の意に沿うことも踏まえた。そして、事後研修を実施したときは様式1や2のシートを基に1対1で進めた。シートがあることで話合いが焦点化でき、短時間で済むことが少なくなかった。全教職員で会を開いていないため、聞きたいことへの躊躇いがなく、話合いができた。これは研修担当に限定せず、授業を公開した教員と参観した教員との両者で繰り返し実施された。

公開されている授業の参観については、空き時間に努めて参観した。さらに校長先生には、年間を通して多くの授業を参観していただき、担当として何より心強い後ろ盾となった。

【1対1によるプチ事後研修】

また、自分自身もまだまだ学びを深めたい一人として、何度か授業を公開した。いつもとは違う緊張感を味わいながら授業に取り組めた。

【生徒とのロールプレイング】

⑸　若手、中堅教員と授業（ティームティーチング）の実施（OJT）

自分自身が授業を公開して取り組むこともあったがそれを見て、若手、中堅教員がコメントするには勇気が要るだろうし、面と向かって協議することは抵抗があると思った。実際に自分が若かりし頃は、先輩教員には遠慮して本音を吐露できず、躊躇うことも少なくなかったことを覚えている。このようなことや、自分自身が若手、中堅教員と一緒に授業をすることで、何らかの手掛かりになったり、自分にはなかった発想や手立てに気付き、自分自身も学びを深めたりすることができると考え、道徳授業を中心にティームティーチングに取り組んだ。

題材選びや授業展開、発問等は一任した。授業を実施する前日や当日等に打合せをして、役割分担の詳細を決めた。

ティームティーチングを行った学級は教科を担当している学級と限定した。初めて道徳の授業に参加したときの生徒の様子は普段、教科の授業で見せる姿とは違い緊張した面持ちであったが、参加するうちに慣れていった。何度か取り組んだ授業は生徒と一緒に授業を受ける参加型とし、一緒に話し合ったり、挙手して意見を述べたりした。

【写真の授業は板書している一場面】

この1年間、一緒に授業を実践した中堅教員の感想は次のとおり。

・「足袋の季節」では、発問を考えるところから一緒にやらせていただきました。普段一人で授業や教材研究をしていると、どうしても自分の見方に凝り固まってしまいますが、いろいろ話をしながら教材研究をすることで、自分自身の学びにもなり、それによって授業の質が高まると感じました。また、事後検討でもいろいろな見方で話をすることができ、これも大変勉強になりました。

・T1が授業を進め、T2が板書をするというように役割分担をすることで、T1は生徒の話を聞きながら切り返しを考えることに力を注ぐことができました。これも、TT形式の大きな利点だと感じました。

4　成果と課題

〈成果〉

・2年間を通して、継続的に取り組んだ授業公開は抵抗感をもたず実施し、定着しつつあるとともに公開・互見授業をするための教材研究等、主体的に研修することにつながっていた。また、個人の計画に基づいて予定を立てているので、時間にメリハリを付けて諸活動や他の仕事とのバランスを取りながら進める姿がうかがえた。

・校長先生、ベテラン、他教科の教職員が異なる授業を参観することで、多様な考えや見方ができ、学びを深めていた。

〈課題〉

・定着しつつある反面、慣れが生じてくることが懸念される。それを生まないために、各教科に舵取り役となる教員を決めることも取り入れたい。

5　終わりに

中学校という校種の特徴を踏まえ、そして今の時代に沿った校内研修の在り方を今でも模索している。捉え方によっては、生温いや中途半端と感じる部分もあるだろう。しかし、本校の生徒数、教職員数や年齢構成等を鑑みると、この取組はバランスが取れているのではないかと感じた。また今後、若手教員が増加傾向の中で、メンター制度を取り入れていくことが教職員の資質・能力の向上につながると強く感じた。一方で、担任となると多くのことを抱えながら研修しなければならないことから、ドロップアウトしないよう持続可能な研修の在り方も考え続けたい。

＊令和3年度経営改善助成申請一覧

【学校部門】

	学　校　名	職　名	氏　　名	研　究　テ　ー　マ
1	朝日町立あさひ野小学校	校　長	水　島　祐　司	自校の教育課題の解決に向けた校内体制づくり
2	入善町立ひばり野小学校	校　長	大　森　博　彰	複式学級の特性を生かした教育活動の在り方
3	入善町立桃李小学校	校　長	上　島　芳　子	だれもが気持ちよく過ごせる学校づくり
4	滑川市立寺家小学校	校　長	広　田　積　芳	個の学びが育つ教育経営を目指して
5	滑川市立田中小学校	校　長	玉　木　彰　治	コロナ禍における、子供たちの健康づくり、体力づくりはどうあればよいか
6	上市町立南加積小学校	校　長	筒　井　勝　志	自らの学びを評価する活動を通して、学びを次に生かそうとする子供の育成
7	富山市立浜黒崎小学校	校　長	北　　嘉　昭	教師も子供も生き生きと輝く学校つくり
8	富山市立草島小学校	校　長	佐　藤　寛　子	業務改善と勤務時間の改善
9	富山市立広田小学校	校　長	伊　藤　貢三子	教職員の自律的な動機づけを高める学校経営
10	富山市立大沢野小学校	校　長	三　原　　茂	主体的に学ぶ子供の育成
11	富山市立大久保小学校	校　長	林　　哲　哉	主体的に考え、仲間と共に行動する、自立した子供の育成
12	富山市立上滝小学校	校　長	杉　本　和　博	コミュニティ・スクール化を好機と捉えた学校改革
13	富山市立大庄小学校	校　長	中　山　隆　博	よく考えて豊かに表現し、共に学ぶ楽しさを味わう子供の育成
14	富山市立福沢小学校	校　長	岩　城　達　也	地域人材を活用し、地域に根差した教育活動を展開することで、子供たちの地域への愛着を高める取組
15	富山市立神通碧小学校	校　長	三日市　　寛	夢のある学校づくり
16	富山市立鵜坂小学校	校　長	土　田　泰　美	「自分大好き 友達大好き 学校大好き 鵜坂っ子」の育成を目指して
17	富山市立朝日小学校	校　長	横　野　誉　子	主体的・対話的に探究する子供の育成
18	富山市立山田小学校	校　長	西　村　勇　嗣	小中一体型校舎の強みを生かした小中一貫的連携教育の工夫と改善
19	富山市立保内小学校	校　長	川　本　綾　子	子供たちの主体性と確かな学力を育成する学校経営
20	富山市立呉羽小学校	校　長	深　井　美　和	主体的な学びの実現を目指した授業改善
21	富山市立老田小学校	校　長	上　岸　栄里子	主体性をもち、学ぶことを思いっきり楽しむ子供の育成
22	高岡市立川原小学校	校　長	荒　井　外志明	主体的・協働的な学びを目指す実践的研究
23	氷見市立十二町小学校	校　長	指　崎　邦　久	挑戦する子供の育成を目指して
24	砺波市立砺波東部小学校	校　長	井　澤　清　徳	みんなで学び、前向きに挑戦する学校づくり
25	砺波市立鷹栖小学校	校　長	砂土居　良　江	「仲間とともに自分を伸ばし、鍛える子供の育成」を目指し、教職員一人一人が自己の資質・専門性を向上させる学校づくり

	学　校　名	職　名	氏　　名	研　究　テ　ー　マ
26	南砺市立上平小学校	校　長	林　　秀　次	保育園から高校までを見通し、地域全体で子供を育てるための連携の在り方
27	南砺市立井波小学校	校　長	松　永　和　久	学び続ける教員が育つ学校づくり
28	南砺市立福野小学校	校　長	梨　谷　一　男	地域の力を生かした学校の活性化
29	南砺市立福光中部小学校	校　長	棚　田　賢　也	個別最適な学びの実現を目指して
30	入善町立入善中学校	校　長	上　野　郁　行	コロナ禍におけるしなやかな学校運営
31	富山市立芝園中学校	校　長	高　木　健　吉	自らの在り方・生き方を見つめ、成長に向けて努力する生徒の育成
32	富山市立新庄中学校	校　長	丸　山　正　宏	何事にも、元気・根気・やる気・本気で取り組む生徒の育成
33	富山市立岩瀬中学校	校　長	岩　田　克　則	各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせて「主体的・対話的な深い学び」を実現する授業改善の工夫
34	富山市立山田中学校	校　長	佐　藤　龍　也	小学校・中学校相互の乗り入れ授業による連携と主体的に学ぶ児童・生徒の育成を目指した授業づくり
35	富山市立杉原中学校	校　長	松　岡　弘　美	学校統合に向けた組織づくりと円滑な運営を目指して
36	富山市立楡原中学校	校　長	鍋　田　敬　一	小規模校における小中連携の在り方について
37	射水市立新湊中学校	校　長	京　角　輝　彦	学校生活の充実・向上に主体的に取り組む生徒の育成
38	高岡市立南星中学校	校　長	加　茂　雅　章	一人一人の自尊感情を高める指導
39	南砺市立井波中学校	校　長	河　原　秀　樹	徳を積み、豊かな人間性を育む学校づくり
40	南砺市立吉江中学校	校　長	島　田　博　英	生徒と共に、響き合う教職員チームの育成
41	南砺市立南砺つばき学舎	校　長	瀬　戸　広　美	笑顔あふれる学校「チーム（子供・保護者・地域・教職員）つばき」の実現に向けて
42	富山県立新川みどり野高等学校	校　長	高　島　由　順	生徒個々の実態に即した支援（指導）体制の構築について
43	富山県立高岡高等学校	校　長	串　田　至　人	「生徒の進路実現のための継続的な支援」のための指導改善

【個人部門】

	学校名（グループ名）	職　名	氏名（代表者名）	研　究　テ　ー　マ
1	黒部市立石田小学校	教　諭	藤　森　かおる	アセスメントを生かした通級指導教室の支援のあり方について
2	富山市立針原小学校	教　諭	篠　田　美希子	主体的に学ぶ子供の育成
3	富山市立浜黒崎小学校松風分校	教　諭	柳　原　直　明	体験活動を通して児童の自己肯定感を高める
4	富山市立水橋西部小学校	養護教諭	岡　田　奈　菜	子供の健康課題を把握し、健康の保持増進を図る活動（指導）の在り方
5	富山市立蜷川小学校	教　諭	濱　田　幸　恵	思考ツールを活用して、主体的・対話的な学びのある授業を目指す
6	富山市立熊野小学校	教　頭	亀　澤　　誉	挑戦（Challenge）することにより変化（Change）を生み出す全教職員による働き方改革への取組
7	富山市立神通碧小学校	教　諭	山　下　真　里	主体的に追究し、他と関わり合いながら学ぶ子供の育成を目指して
8	南砺市立上平小学校	教　頭	安　田　陽　子	一人一人の教職員が持続可能な働き方を実現するための同僚性の構築
9	富山市立北部中学校松風分校	教　頭	岡　村　紀　子	「SDGs17 の目標」の視点を生かして、自己を見つめる力を高める
10	高岡市立南星中学校	教　諭	早　貸　永貢子	教育活動の質の向上と学校経営の改善を図るために、ICT を活用した「校務処理の効率化」「教職員の情報共有」「家庭や地域との連携」はどうあるべきか
11	高岡市立志貴野中学校	教　諭	竹　嶋　和　裕	数学的活動を通して事象の中にある情報を整理･統合し、的確に表現したり、筋道を立てて説明したりする力の育成

◇　課題研究奨励助成報告「優秀賞」

多様な考えを引き出し、主体的な言語活動を生み出す授業づくり

～第6学年国語科「『鳥獣戯画』を読む」「日本文化を発信しよう」の実践を通して～

朝日町立さみさと小学校　教諭　松　井　和貴子

1　課題設定の理由

本校では、今年度国語科「読むこと」の指導を中心に研究を進めている。昨年度の「話すこと・聞くこと」の研究で身に付けた対話スキルを「読むこと」の学習にも生かし、多様な考えをもち、主体的に取り組む子供の姿を目指し、本課題を設定した。

2　研究実践

⑴　目的を明確にした単元構想

本単元では、「日本文化」を発信するためのパンフレット作りを学習のゴールに設定し、自分が書き手となることを意識させた上で「『鳥獣戯画』を読む」を読み、絵のよさを引き立てる筆者の文章表現の工夫に着目しながら学習した。学習のゴールが明確になっていることで、子供たちは「実況風に書く工夫を自分もやってみたい」等、自分が作るパンフレットのことを考えて学習に取り組むことができた。また、学習した内容を掲示しておくことで、パンフレットを作る際にも、「高畑さんみたいに、読者に呼びかけるような文にしよう」「読者が分かりやすいように、写真や絵の示し方を工夫しよう」等、学習を振り返ったり、読者の立場から考えたりしながら学習を進めることができた。

⑵　文章表現の工夫に着目させるための教材の工夫

「『鳥獣戯画』を読む」の中には、筆者が自分の見方や考え方を伝えるための文章の表現や構成の工夫がたくさんあり、それを捉えさせたいと考えた。多くの子供は、文章を一読しただけでは、筆者の工夫を見付け出すことが難しいと考え、右のような、教材文の文末や表現を変えた文章を作成して提示した。二つの文章を読み比べることで、子供たちはその違いに着目し、表現の工夫とその効果について多様な考えをもつことができた。

高畑さんの文章

はっけよい、のこった。秋草の咲き乱れる野で、蛙と兎が相撲をとっている。蛙が外掛け、すかさず兎は足をからめて返し技。その名はなんと、かわず掛け。おっと、蛙が兎の耳をがぶりとかんだ。この反則技に、たまらず兎は顔をそむけ、ひるんだところを蛙が――。

先生の文章

秋草の咲き乱れる野で、蛙と兎が相撲をとっています。蛙が外掛けをして、兎は足をからめて返し技をしました。かわず掛けです。すると蛙が兎の耳をかみました。この反則技に、兎は顔をそむけ、ひるんだところを蛙が――。

⑶　主体的な言語活動を生み出す学習形態や学習活動の工夫

本単元を進めていく上で、自分の考えをもつことを大切にし、自分の考えをもつ時間を確保するようにした。表現の工夫を考える学習では、「自分の考えをもつ→グループで話し合う→全体で共有する」という流れで1時間の学習を進めた。グループ活動では、一人一人が考えや思いを伝え合うなど互いの考えを交流する機会を多くもったことで、自他の考えのよさを感じることができた。また、ホワイトボードを使って意見をまとめ、短冊に書いて共有し、そのまま掲示することで、学びの足跡を残すこともできた。

パンフレット作りでは一人一台のタブレットＰＣを使用し、共同編集を行った。同じファイルを同時に編集することで、互いのページの内容やレイアウトについて話し合いながら作成することができ、よりよいパンフレットにしようと、意欲的に取り組むことができた。

3　研究の成果

・学習のゴールを明確にし、学びの積み重なりを掲示していくことで、子供たちは見通しをもち、主体的に取り組むことができた。
・文章を比較して読ませることは、その違いやそれぞれのよさに気付き、多様な考えをもつための手立てとなった。
・目的に応じて学習形態や学習活動を工夫することは、主体的な言語活動を生み出すきっかけとなった。

4　今後の課題

今回は、国語科を中心に研究を進めてきたが、他教科においても主体的な言語活動や深い学びにつながる手立てを考えていきたい。

児童が互いに関わり合いながら、学びを再構築するための教師の支援の在り方

～社会科の実践を通して～

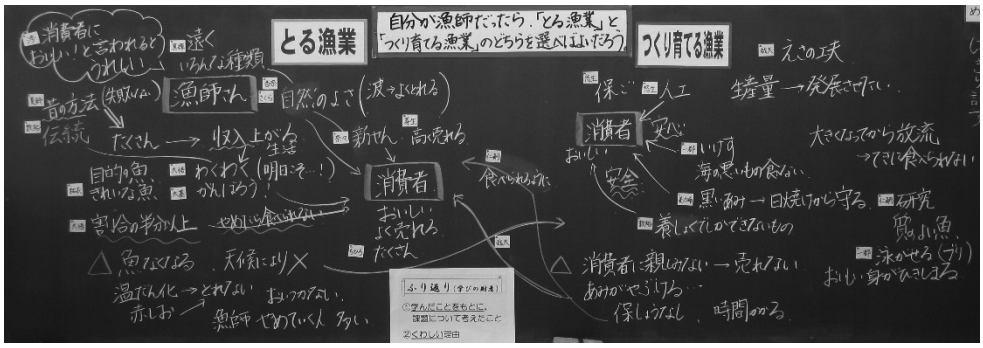
魚津市立道下小学校　教諭　松　原　はるか

1　課題設定の理由

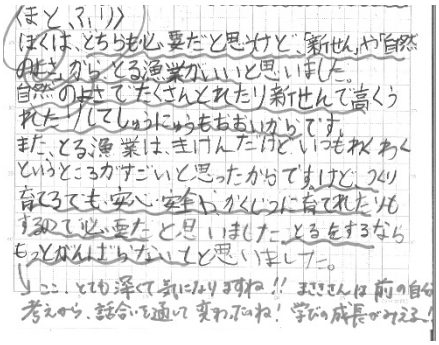
昨年度は、体験的な学習や一人学習の充実により、個々が学びを深め、地域社会への適切な関わり方を考える力を育てることができた。しかし児童同士が互いに関わり合う姿には及ばなかった。互いに関わり合うことは、学びの視野を広げたり、考えを再度作り上げたりするために大切である。そこで、児童が互いに関わり合うための支援に重点を置き、研究を進めることにした。

2　研究実践

⑴　根拠を明確にし、互いに関わり合いながら課題解決に向かうための工夫



「未来へつなごう水産業」の単元の終末には、「自分が漁師だったら、獲る漁業とつくり育てる漁業のどちらを選べばよいだろう。」の課題について考えた。2つの立場から考えたことで双方のメリットとデメリットを比べやすく、既習事項を用いて根拠を明確にしながら考えをまとめる児童の姿が見られた。話合いでは、考えを比べたり結び付けたりして語るうちにその漁業にしかないよさや難しさが徐々に明らかになり、議論が深まっていった。話合いの中盤、養殖業の割合の増加を示すグラフを提示した。水産業の現状を実感したことで思考が一気に働き、改めて双方の漁業について深く考える場面となった。初めは「自然の海はわくわくするから獲る漁業がいい。」「いろんな工夫をしている養殖を選ぶ。」と語っていた児童も、「天候に左右される獲る漁業だけでは生産量が安定しない。」「消費者がいつでも魚を食べられるようにするには、両方の漁業が必要だ。」と、日本の水産業についてより現実的に話し合うことができた。



⑵　児童が自身の学びを深めるための振り返り

学習のまとめでは、「学んだことを基に課題について考えたこと」「くわしい理由」の内容を示し、課題について考えたことを詳しくまとめられるようにした。「両方の意見を見直しながら書こう。」と声かけしたことで、児童は自分とは異なる考えや新しい気付き、それまで学習してきたことを総動員し、自分の考えを再度作り上げることができた。友達の考えを聞いて両方の大切さに気付いた子、考えが変わった子、話合いで出たメリットやデメリットを基に考えを見直し、元の自分の考えに対する思いをさらに強くした子等、一人一人の学びの深まりや成長がわかる振り返りであった。

3　研究の成果

・2つの立場で考える課題により、自分の考えにこだわり、根拠を基に詳しく語ることができた。双方の考えを比べたり結び付けたりしやすく、互いに関わり合いながら話合うことができた。

・振り返りの書き方を工夫したことで、児童は話合いや既習事項を生かしながら考えを再構築することができ、自らの学びの成長にも気付くことができた。

4　今後の課題

学習課題は、児童が切実感をもって考えられることが大切である。獲る漁業か養殖業のどちらを選べばよいかを考えさせる際には、どのような問題を解決するための選択なのか、日本の水産業の問題と学習課題とをしっかり結び付けた上で問題解決を進めていく必要があった。

互いにつながり合い、高め合う子供の育成

上市町立相ノ木小学校　教諭　**渡　辺　大　貴**
（R2 上市町立上市中央小学校での実践）

1　課題設定の理由

今年度は、コロナウイルス感染症予防の為、休業期間があったり学校行事が縮小されたりと、例年と比べ子供同士の横のつながりや学級への所属意識を強める機会が制限されている。

ましてや学校生活に不慣れで、友達との関係も希薄である1年生にとっては、その影響はとても大きい。自分の思いを安心して打ち明けられるような温かな学級風土の中で、協同しながら課題解決を図り、自分や友達のよさを見出せる集団を作りたいと考え、本課題を設定した。

2　研究実践

課題達成に向け、右の図を意識して学級経営に臨んだ。まずは、支持的な風土の形成、そして、子供の思いが反映された学級目標の設定が必要だと考えた。

課題達成に向けたイメージ図

⑴　子供の思いを基にした学級目標づくり

学級目標を考える話合いでは、どんなクラスにしたいか、そして、自分たちはどんな一年生になりたいかについて話し合った。「かっこいい一年生になりたい」と答える子供が多く、具体の姿に下ろしていく中で「ヒーローみたいだね」と呟いた子供がいた。その呟きを全体に広めると、共感する子供が多かった。ヒーローという言葉に自分たちの目指す具体の姿が包括されているように感じたと思われる。子供の思いをつないだり、広めたりすることで、納得感や愛着をもてる「みんながヒーロー」という学級目標を立てることにつながった。

⑵　会話を通して、互いの距離を縮めるペアトーク活動

朝の時間にテーマに関してペアで自由に話し合う活動を設定した。活動後に、互いにサインを書くワークシートを準備し、学級の全員のサインを集めようと投げかけたことで、保育園が違う子供にも自然に声をかけるようになった。また、活動に慣れた頃に「2分間途切れずに話し続ける」を条件に加えたことで、互いの会話量が平等になるように意識して話を進める姿や、質問したり頷きながら聞いたりするなどの会話のスキルも身に付いた。

⑶　目標や課題を共有するための「可視化」

学校生活や学習中のきまりの定着を図ることは、学級を経営する上でどの学年でも大切になるが、何事も初めての一年生は、継続的な指導が必要になる。右のように学級をよりよくする為のルールをキャラクターとして提示することで可視化し、学級全体の目標として位置付けた。みんなで頑張ればキャラクターを捕まえられるようにすることで、成長を実感しながら成功体験が積めるようにした。また、捕まえる為の条件を子供同士の話合いを通して設定（可視化）したことで、受動的ではなく主体的に活動に取り組むようにつなげられた。

学習や生活のきまりに
関するキャラクターの掲示

3　研究の成果

学習や生活のきまりについてキャラクターを介して提示したことで、学級の問題をより自分ごととして捉えたり、みんなで解決しようという意識を強めたりする手立てとなった。低学年の実態に合った効果的な指導の一つになったのではないかと考える。

4　今後の課題

実践を通して、横のつながりや所属意識が強まってきたが、それらを授業で生かしきれていないと感じる。子供の意欲が促される課題の設定や、互いに関わり合いながら課題解決を図れるような授業づくりに努めたい

友達との関わりを深めながら、自分の思いを表現していく子供の育成を目指して

－第1学年　国語科「おもいうかべながらよもう　『くじらぐも』」の実践を通して－

富山市立大広田小学校　教諭　太　田　凪　紗

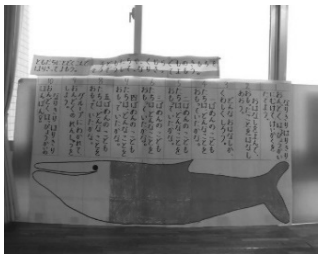
1　課題設定の理由

本学級では、帰りの会に絵本や紙芝居の読み聞かせを行っており、読んだ物語の面白かったところや不思議なところについて、友達同士で交流する姿が日常的に見られる。また、国語科の学習では、「おおきなかぶ」や「おむすびころりん」に出てくる繰り返しの表現の面白さに気付き、手拍子をしたり体を動かしたりしながら楽しく音読する姿が見られた。しかし、そのような姿が見られる一方、物語の場面の様子や登場人物の気持ちを想像することができない子供が多く、音読も一本調子になっていることが多かった。そこで、友達と考えを交流しながら豊かに想像を広げたり、想像したことを自由に表現したりする子供の姿を願い、この課題を設定した。

2　研究実践

○　見通しと目標をもって学習に取り組むための単元を貫く言語活動の設定

単元全体を通した課題として学習の終末に「はりきり　なりきり　音読発表会」を位置付けた。提示の際には、「はりきって読む」とは、「言葉のまとまりに気を付け、みんなに届く声の大きさで読むこと」であり、「なりきって読む」とは、「声の大きさや速さ、強さに気を付け、表情や動作を工夫して読むこと」であることを子供に伝え、『はりきり　なりきり　音読発表会』という目標に向かって、見通しをもって学習に取り組ませるようにした。そうすることで、聞き手を意識して音読したり、場面の様子や登場人物の気持ちに合うよう、声や表情、体全体を使ってのびのびと表現したりする子供が見られた。また、毎時間の授業の始まりと終わりに音読活動を設定し、その日に学んだこと、読み取ったことを終わりの音読に生かすよう意識させた。その際、3人グループになって役割読みをし、互いの読みを聞き合うようにしたことで、「～な感じに読みたい」という思いを音読に表現する子供の姿につながった。



〔学習計画の掲示〕

〔役割読みの様子〕

○　想像を広げて読み取ったことを表現したり伝え合ったりする場の設定

本単元では、初発の感想で子供たちが面白いと思った叙述や特に気になると思った叙述を掘り下げ、子供たちの思いを大切にしながら学習を進めた。物語を読み進める中で、面白い(!)と思った叙述や気になる(?)と思った叙述にシールを貼り、それをもとに子供たちの考えを交流させることで、叙述には表れていない登場人物の行動や気持ち、出来事が起こった理由などについても想像する子供が現れた。また、場面の様子や登場人物の気持ちをより具体的に想像させるため、挿絵に吹き出しを付けてせりふを書き加えたり、実際に動作化して感じたことを交流する活動を繰り返し取り入れたことで、感じたこと、考えたことを言葉で表現することを楽しむ子供の姿が見られた。

〔動作化の様子〕

3　研究の成果

場面の様子や登場人物の行動を動作に表したり、登場人物の気持ちをワークシートの吹き出しに書き加えたりすることを通して、くじらぐもと心を通わせる「1年2組の子供たち」の楽しそうな様子や気持ちを豊かに想像することができた。また、3人グループに分け、役割読みをしたことで、友達に聞こえる声の大きさで読もうとしたり、登場人物になるきるために、せりふの声の大きさや速さ等を変えたりするなど、自主的に工夫して音読する姿が見られた。また、クラス全体で「はりきり　なりきり　音読発表会」という一つの目標に向かって学習に取り組んだことで、最後には、クラス全体に一体感と達成感が生まれた。そして、「物語を読むことが大好きになったよ。」という子供たちの声をたくさん聞くことができた。

4　今後の課題

子供たちが、自分の1時間の学びをねらいに沿った観点で自己評価することで、学んだことやできるようになったことを実感できるようにし、次時の学習を楽しみにする主体的な姿を生ませたい。

書く楽しみを実感できる国語科「書くこと」の授業づくり

～書く意欲を高め、相手に分かりやすく伝わる文章を書くことの指導～

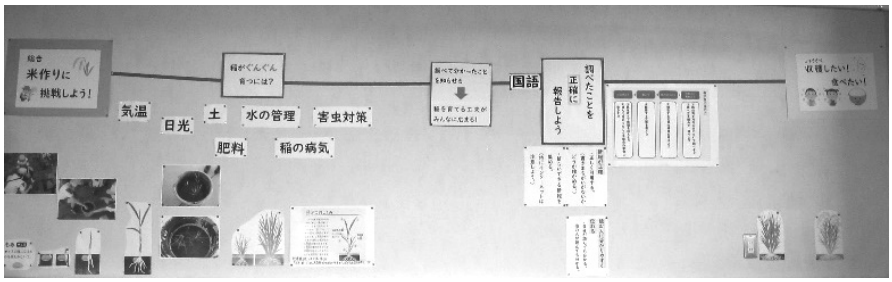
富山市立豊田小学校　教諭　奥　沢　綾　香

1　課題設定の理由

本学級には、文章を書くことに苦手意識をもつ子供が多い。書くテーマや内容をはっきりと自覚しておらず、「何を書けばよいか分からない。分からないから書きたくない」という負のスパイラルに陥っている。また、書くことを苦手としていない子供でも、相手に伝わるように意識して書いている子供は少ない。書いた文章を読み直すこともなく、自分が読んで分かればよいという意識をもっているのではないかと思われた。一人一人が伝えたいことをもち、相手を意識した伝わりやすい文章を書けるようにするため、本課題を設定した。

2　研究実践

⑴　書く意欲を高める単元構想



<学習の流れが見通せる掲示>

総合的な学習の時間「米づくりに挑戦しよう」では、バケツ稲を育て自分たちで収穫し、食べるというゴールを設けた。また、稲がよく育つようにするためにはどのような工夫が必要か、調べる目的をはっきりとさせることで、子供たちは意欲的に調べメモを取った。これらの活動を国語科の学習に活かすことで、書く活動にも意欲的に取り組むことができると考えた。また、同じ学習に取り組む5年生の仲間に伝えるために、調べたことを報告する文章を書くことを提案し、総合的な学習の時間と、国語科の双方の学習の流れが分かるように教室に掲示をした。調べ学習では、調べること、分かったこと、出典を「引用カード」に書きためた。それを基に伝えたいことを自分で選択して報告する文章を書く子供の姿が見られた。「引用カード」を蓄積してきたことで、何を書けばよいかで悩むことが少なくなった。子供たちが関心をもっている「米づくり」についての願いを基にした調べ活動と、書くテーマや伝える内容とを結び付けた単元構想にしたことで、子供の書く意欲を高めることができた。

⑵　読み手になって推敲するためのグループ学習

分かりやすく伝わる文章になっているかを読み合って見直すグループ学習を行った。報告したい内容が同じ子供同士でグループを作ることで、書く人によって使う言葉や文章構成が違うことに気付きやすいと考えた。その結果、「水をやる」と書くだけではなく、水の温度や量、回数等も書く方が読み手に分かりやすいことや「種籾」という言葉が伝わりにくいこと等に気付くことができた。全体の話合いで、N児は、「調べた人は種籾が何か分かるんだよね。でも、知らない人には何のことか分からないんじゃないかな」と発言した。読み手の立場になって考えた発言を聞き、書き手には分かるけれども読み手に伝わらない専門用語をどうすればよいか、考えるきっかけとなった。読み方が難しい専門用語にルビを振ったり、言葉の意味の説明を書き加えたりし、自分の文章を見直す子供の姿が見られた。

3　研究の成果

・総合的な学習の時間と関連させたことで、書くことの材料が調いやすくなった。子供の実態を把握し「なぜ書く必要があるのか」を考えさせ、他の学級の友達に読んでもらうという書く目的を明確にすることは、書く意欲を高める上で欠かせないものだと感じた

・推敲する際にグループで読み合うことで、自分の書いた文章を他者が読んだらどう思うかということを考えさせることができた。

4　今後の課題

・学習課題をよく吟味することが重要である。「分かりやすい」というのは、誰にとって分かりやすいのかということをはっきりさせておくべきであった。読み手を意識した具体的な観点で、推敲することができるようにしたい。

・今回は、アドバイスがしやすいように同じ内容ごとにグループをつくったが、稲のことを何も知らない人が読んでも伝わるかという意識が低くなってしまった。ねらいに合ったグループをつくることで、読む対象を意識して推敲できるのではないだろうか。

子供が思考を広げ、深めていく授業の工夫

－第6学年　道徳科、映像教材の実践から－

富山市立新庄小学校　教諭　上　野　友里愛
（R2 富山市立浜黒崎小学校での実践）

1　課題設定の理由

本学級には、どのような学習でも活発に意見を出し合い、積極的に取り組もうとする子供が多い。しかし、道徳科のように答えがない問いを考える学習では、自分の意見をもったりそれらを友達と共有したりすることを苦手だと感じる子供がいる。そこで、友達と関わり合いながら学習することの面白さをどの子供にも感じてほしいと考え、道徳科の学習を通して子供が思考を広げ、深めていくことを目指した。

2　研究実践

⑴　登場人物に寄り添い、考えたくなる教材の選択

この学習では、NHK for Schoolの道徳番組から、「目標は何のためにあるんだろう」という動画教材を選んだ。本資料の主人公は富山県の小学5年生で、水泳が苦手な少年が遠泳大会で2.5kmを泳ぎ切ることを目標とし、努力する姿を追ったドキュメンタリー映像である。自分の苦手に向き合い、努力する過程で、徐々に前向きに変化していく心や目標を達成したときの喜びに触れることができる。同じ富山県民であることや、海沿いで暮らしているということ、同じ年代であること等、本学級の子供たちとの共通点が多い。そのような子供が願いをもって努力する姿に心を動かされ、自然とどの子供も学習課題に対して自分の思いをもつことができるのではないかと考えた。A児はなかなか自分に自信をもてない子供だが、少人数グループや全体の聴き合いの場で、主人公の立場になって考えたり、B児の発言を受けて新しい視点から主人公の思いを語ったりする姿が見られた。担任のねらいどおり、どの子供も教材と向き合い、友達の意見につなげて活発に発言したり聴いたりすることを通して、「目標をもってがんばること」について考えを広げたり深めたりすることができた。

〈A児の発言記録〉

〈４人グループでの聴き合い〉
A児：ビート板があってもなぁ。おれだったら無理って思うかもしれない。海だからこわい。でもせっかくお父さんが応援してくれてるし、申し訳ない。

〈全体での聴き合い〉
B児：ビート板を使うと諦めている感じになるし、自分に負けたと思ってしまうから、使わなかった。
A児：学校だけじゃなくて、せっかくお父さんにも教えてもらったから恩返しをしたかった。みんなが一緒にやってくれたから。
C児：思いを背負っていた。
D児：お父さんやみんなに自分の練習した成果を見せたかった。
T：みんなもそんな経験ある?
A児：ある!

⑵　学びを自分の生活に生かすための導入と振り返り

学習課題について自分自身を振り返らせ、学びを自分の生活へとつなげるために、導入では目標をもって何かに取り組んだ経験について問いかけた。また振り返りでは、弱い気持ちを乗り越えて目標を達成した少年の晴れやかな表情や気持ちの変容から感じたことを基に、「目標をもってがんばること」について改めて考える場を設けた。振り返りのワークシートの記述からは、子供たちが教材を通して、主人公の努力する過程を疑似体験しながら心の変容を感じ取ったり、目標をもつことのよさに気付いたりすることができたことが分かる。また、振り返りを通して、これまでの経験を思い起こしながら、今後自らが目標をもって自分自身の力を伸ばしていくことについて考えることができた。

〈振り返りのワークシートより〉
E児：苦手なことでも逃げずにがんばって練習すればできるんだと思った。できなかったことができるようになると、達成感もあるし、嬉しいし、自信にもなると思った。
F児：主人公はすごく疲れたと思うけど、やり終えたときに笑顔で帰ってきたので、やり切った喜びの気持ちの方が大きかったのかなと思った。泳げないところから挑戦したのがすごいと思った。ぼくも挑戦していきたい。
D児：すぐに諦めるのではなく、続けることが大切だと思った。私は今倒立をがんばっているから、練習を毎日諦めずにこつこつ続ければ、最終的には私も倒立ができるようになると信じて練習したいと思った。がんばりたい。
G児：自分も前まで水に顔をつけるのが怖くてできなかったから気持ちがすごく分かると思った。自分はまだ苦手なこともたくさんあるから、これからは何にでも挑戦したいと思った。動画を見て、あきらめず毎日練習することやそのような気持ちが大切だと思った。

3　研究の成果

・子供たちの実態を捉え、子供たちが心を寄せることのできる教材を選択することで、どの子供も教材に向き合い、主人公の姿を通して「目標をもってがんばること」について、自分の思いをもつことができた。それによって、自分の考えと比べ、友達の思いにも耳を傾けようとする意欲が高まった。
・導入と振り返りで自分の生活について考えさせることで、教材を通して得た学びを実生活に生かそうと考える姿が見られた。今後、実践につながるよう適宜立ち返る時間を設けていきたい。

4　今後の課題

子供たちが聴き合いを通して「目標をもってがんばること」のよさに気付いた。一方で、その一人一人の気付きを振り返りに十分に生かすことができなかった点が課題である。この学習では、自分の生活に生かすことが重要であると考えていたので、今後の自分のよりよい具体的な姿を思い描けるように、ワークシートに記述したことを、交流する時間を十分に取ることが大切であったと考える。子供たちが道徳的価値を自分の生活に生かしていこうとするための手立てを更に工夫していきたい。

自ら学ぶ子供を育てる学習指導の工夫

－ コグトレの導入と第4学年社会科「わたしたちのくらしと防災」の実践を通して －

富山市立新庄北小学校　教諭　赤　川　　尚

1　課題設定の理由

本学級は、私が担任をして2年目の学級になる。子供たちの昨年度の様子から、学習に苦手意識をもつ子供も学習意欲が高い子供も全員が進んで学び、「学ぶことが楽しい」と思えるようにする必要感を感じる。また、新学習指導要領が育成を目指す、資質・能力の3つの柱の1つとして「学びに向かう力、人間性等」が求められていることから、本課題を設定した。

2　研究実践

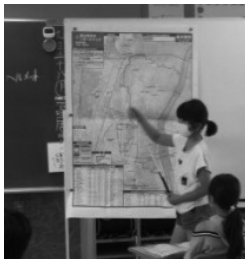
(1)　子供たちの認知能力の向上を目指した「コグトレ」の導入

【コグトレをしている子供】

「コグトレとは、『認知○○トレーニング』の略称で、○○には『ソーシャル（→社会面）』『機能強化（→学習面）』『作業（→身体面）』が入り、学校や社会で困らないために3方面（社会面、学習面、身体面）から子供を支援するための包括的プログラムである」と宮口幸治氏は、述べている。本学級では、学習面の機能強化を図るトレーニングを中心に行った。毎日、朝学習の5分間をコグトレの時間として設定し、継続的に行った。まず初めに、見る力を鍛えるために複数の絵の中から2枚の同じ絵を見付け出すトレーニングを行った。トレーニングをしている様子を見ていると、学習面で識字や内容理解に困難さや苦手意識をもっている子供たちは、正解の2枚の同じ絵を見付けることができなかった。しかし、トレーニングを行った後に同じ絵を見付ける方法を指導し、繰り返しトレーニングを積んでいくことで、正答を見付けることができるようになってきた。答え合わせで正答だったときに、飛び上がって喜ぶ子供の姿も見られた。このトレーニングを繰り返していくことで、授業開始後の活動への取りかかりが早くなったり、あきらめずに最後まで取り組んだりする姿が見られるようになった。

次に、リンゴの数を数えながら、できるだけ早くリンゴの記号に✓を付けて、特定の記号の右横のリンゴは✓をせずに数えないという集中力を付けるトレーニングを行った。前述のトレーニング同様、漢字の書き間違えや計算ミスをすることが多い子供たちは、数え間違えることが目立った。トレーニングを繰り返すごとに、ミスが減ってきて、学習中に簡単な間違えをする回数が減ってきた。また、家庭学習を行う際に、課題にかかる時間の目標を設定して学習し、目標通りの時間で終わったと自分の努力を話す子供も見られた。このように、自分の能力に合った目当てを立てたり、見通しをもって取り組んだりすることを通して、子供たちは自分自身の努力や高まりに手応えを感じてきている。

(2)　子供が進んで考えたくなるような単元構想や資料提示の工夫



【ハザードマップを見て
考えたことを話す子供】

社会科「わたしたちのくらしと防災」という単元名から、子供たちの今の「防災」に対する意識や考えを掘り起こすことから学習を始めた。その中で子供たちは、報道等でよく見聞きする地震や風水害等の自然災害を思い起こした。しかし、子供たちはこれまでに、大きな自然災害を体験していない。その子供たちが「どうして自分たちの身の回りでは自然災害が起こっていないのかな。誰かが守ってくれているのかな」と自分たちで学習問題をつくることができるようにしたいと考えた。そこで、校区にある常願寺川が60年もの間、災害が起きていないことが分かる資料を子供に提示した。それを知った子供たちからは、「常願寺川では、なぜ水害の被害がないのだろう」という問いが生まれ、その理由を治水や砂防等の工事が行われたことなど、常願寺川の整備によるものだと考えたり、災害が起こったときにわたしたちを助けてくれる存在がいたりすることに目を向けたりした。

その後、様々な立場（学校、地域、消防、警察、市役所、県庁等）の人たちが関わり、災害に対する備えをしていることを学習した。それにより、自分たちが様々な人々の働きによって自然災害から守られていることに気付き、多くの子供たちが「もし水害が起こっても、様々な機関の人々が助けてくれるから大丈夫」と感じていた。その子供たちが、「このままでは自分たちの暮らしを守ることができない」「暮らしを守るためには、自分ができることをしなければいけない」と自助の在り方について考え始めるだろうと想定し、新庄北地区のハザードマップを提示した。そうすることで、子供たちは水害が起こったときに自分の家がどうなるのか、どうするのかという自助の在り方について考え始めた。ただ公助に守られているだけではなく、家族で避難場所について話し合ったり、防災グッズを備えたりするといった自分にできることが大切だと気付き、万が一の災害に備えて自ら選択・判断していくことの重要性について意識を高めていた。このように、子供たちが思わず気になる状況をつくり出すことで、子供たちは自分事として問いを解決しようと取り組んでいた。

3　研究の成果

・子供の認知能力の向上を図る手立てを講じることで、子供は学習に向かうレディネスを整え、意欲的に学習に向かうことができた。

・単元構想をデザインしたり、資料提示を工夫したりすることで、子供が社会的事象について自分事として捉え、問題意識をもって進んで考えることができた。

4　今後の課題

・単元構想をデザインし、子供の様子を捉えながら単元構想を適宜加除修正することで、子供の思考に合わせた発問をしたり、問い返しをしたりするなど、子供の実態を丁寧に捉えられるよう努めたい。

社会の変化に対応しながら、思いや願いを実現させていく子供を目指して

富山市立堀川小学校　教諭　杉　本　茉　由
（R2　富山市立大庄小学校での実践）

1　課題設定の理由

コロナ禍で学校を取り巻く状況、そして児童の学校生活も大きく変わった。今後も大きく変化し続けていく社会の中で、状況に合わせて対応する力や、新しい考えを生み出して計画・実行する力が必要だと考えた。そこで、総合的な学習の時間において、今年度ならではの新しい形で実施した「運動会」をテーマに以下の実践を行った。

2　研究実践

(1)　意欲を高める提示

今年度の運動会を「OOSYO2020」と題し、年間を通して各競技を分散して行う「分散型運動会」であることを提示した（資料①）。その際、事前に作成したプロモーションビデオ（今年度の運動会の実施についての紹介動画）を視聴した上で、「OOSYO2020」が、大庄小学校「史上初」の取組であること、最高学年である今年の6年生が「歴史を創る学年」であることを伝え、意欲を高めた。また、オリンピックをイメージさせ、大会を盛り上げるために6年生としてどんなことができるか、どんなことをしたいかを考えさせることで今後の活動への期待感をもたせた。

分散型運動会　OOSYO2020

実施時期	大会名	
6月	スピード王決定戦	個人（各学年）
7～8月	ミニ玉入れ大会	団体（各学年）
9月	玉入れ大会	団体（各学年）
11月	オンライン応援合戦大会	団体（全校）

資料①　年間を通した分散型運動会の計画

(2)　思いを大切にしたプロジェクト活動

「OOSYO2020」を運営していくにあたり、多くの児童からの「できそう」「こうしたい」という思いを引き出し、それを計画・実行していく「プロジェクト」を立ち上げた（資料②）。各プロジェクトチームに企画書を配付し、内容や役割分担、スケジュール等を考えさせることで見通しをもって活動を行っていけるようにした。

動画プロジェクト	掲示プロジェクト		お知らせプロジェクト
	玄関前	家庭科室前	
・団役員の紹介動画作成 ・競技の様子の動画作成	・得点板の設置 ・各団マスコットキャラクターの募集	・団ごとの掲示コーナーの作成	・競技の日程や結果の放送 ・新聞の発行 ・ロゴマークの募集

資料②　立ち上がったプロジェクトと主な活動内容

動画プロジェクトは、各学年の競技の様子や頑張りを全校に伝えたいという児童の願いの下、立ち上がった。タブレットパソコンを自由に使える環境を整え、児童の願いが実現できるよう支援した。児童は、動画の撮影から編集までを行い、状況に合わせて全校に配信した（資料③）。また、掲示プロジェクトでは、得点や団の情報が常に全校の目に触れるところに掲示したいという願いの下、活動を進めていった（資料④）。

資料③　動画プロジェクトの活動
編集を行う児童（左）と編集画面の様子（右）

資料④　掲示プロジェクトの活動
得点（左）と団の掲示コーナーの様子（右）

3　研究の成果

(1) 「分散型運動会」の提示の仕方を工夫したことによって、例年とは大きく変化した状況下でも、できることをしたり、新たな挑戦をしたりしようという児童の意欲を高めることができた。

(2) 児童の「できそう」「こうしたい」という思いや願いを大切にプロジェクトを立ち上げ、それを実現するための環境を整えたことで、試行錯誤を繰り返しながら積極的に取り組むことができた。

4　今後の課題

日々変化する社会状況の中で、現実的にどこまでのことが実現可能か、判断が難しいところがあった。そのため、児童にとっても見通しが共有されないまま進めてしまった部分があった。児童の思いや願いに寄り添いながら、様々な可能性を考えた上で、教師の見通しを細部まで立てておく必要がある。

互いに聴き合う話合い活動の工夫

ー朝のトークタイムと必要感のある話合い活動の設定の実践を通してー

富山市立蜷川小学校　教諭　濱　田　幸　恵
（R2　富山市立鵜坂小学校での実践）

1　課題設定の理由

本学級の子供たちは、素直で明るく、課題に意欲的に取り組む子供が多い。しかし、授業中の発言は限られた子供になりがちで、全体の場で自信をもって発表できる子供は少ない。子供たちから、「自分の意見に自信がない」「クラスの仲間の反応が気になる」という思いを聴いた。そこで、互いの意見を認め合い、聴き合う場を大切にすることで、自信をもって意欲的に発言できる子供が増えるのではないかと考え、本課題を設定した。本実践では、①朝のトークタイムと②必要感のある話合い活動の設定を通して、子供たちに聴き合いの雰囲気を広げることをねらいとした。

2　研究実践

子供たちが互いに認め合う「朝のトークタイム」

毎週月曜日の朝の会に、テーマに沿った話題について話をする「トークタイム」を設定した。班や全体で話したり、時間制限を設けたりと、ルールを変化させながら毎週継続した。この「トークタイム」では、話し手の意見や考えを理解しようとすることを約束とした。取組を通して、仲間の考えを受け入れたり、興味をもって関わろうとしたりする姿が増えた。また、話し手にとっては考えを受け入れてもらえる安心感が得られ、意欲的に自分のことを話したり、考えを広めたりするようになった。「トークタイム」の取組により子供たちが互いに関わり合う姿につながった。

〈自身のホワイトボードにトピックをかき、話をする子供〉

○　自分のことを認めてもらえる安心感～A児の姿から～

A児は、今まで自ら発言することが少ない児童であったが、実践を進めるにつれて自ら発表をすることを目標にするようになった。「自分の考えに対して質問や意見等の反応してもらえることがうれしく、安心して話ができるようになった。少しずつ自分に自信がもてるようになった」と思いを綴っている。更に、発表を通して自分に自信が付き、学級代表に立候補できるまでになった。自分のことを認めてもらうことで、安心感が生まれ、自分の意見を発言できるだけでなく、今までできなかったことに挑戦するまでに成長した。

必要感のある話合い活動の設定～事例:体育科の保健学習より～

学習では、必要感を感じられる話合い活動の場を設定した。保健学習「緊急事態宣言!病気から守れ、自分の体」では、子供たちが生活習慣病について学ぶだけでなく、自分自身の生活を見つめ直して課題意識をもてるような単元を構想した。それぞれが自分の生活改善に向けたルールを決めて実践し、そこから生まれた悩みを互いに解決し合う場を話合い活動として設定した。自分事だからこそ「解決の手助けをしよう」「悩みを聴いてもらいたい」という気持ちが生まれ、意欲的に相手の言葉を聴こうとする姿につながった。

〈悩みにアドバイスをし合う子供たち〉

○　仲間の考えを知りたいと思う必要感～B児の姿から～

B児は、6年生になって初めて発表し、1年を通して毎時間発表できるようにまでなった子供である。「グループのみんなが、自分の悩みについて話を聞いてくれ、考えを広めてくれた。仲間と話し合うことで学びが深まることを感じ、仲間の大切さに気付いた」と学習の振り返りを記録している。必要感のある話合い活動を設定することによって、互いに聴き合おうとする意欲につながり、仲間と学習をする大切さに気付くようになった。

互いに聴き合う話合い活動

3　研究の成果

1学期から本実践を継続して行い、互いに聴き合う話合い活動を意識して取り入れることで、進んで発言する子供が増えた。それだけでなく、自分の考えを聴いてもらう経験を積むことで、自分を認めてもらえる安心感が生まれ、自信につながることが分かった。また、仲間の考えを知りたいと意欲的に関わり合うことで、仲間の大切さを感じることができることも分かった。このように、互いを認め合い、聴き合うことは、多様な効果につながることが分かった。

4　今後の課題

互いに聴き合う話合い活動を経て、認めるだけでなく一人一人が自分の考えを構築していく話合い活動にどうつなげていくか、研修を進めていきたい。

自分の考えをもち、主体的に学び合う子供の育成

－ 体育科「みんな輝くフットサル～目指せ！最高のチーム～」の学習を通して－

富山市立月岡小学校　教諭　岡　崎　奏　斗

1　課題設定の理由

本学級は、運動が好きな子供が多いが、運動の内容によっては経験値や技能に差がある。また、勝負にこだわり、相手を責める様子もしばしば見られる。教材や仲間との深い関わりの中で、技能を高め、自分の考えをもち、達成感を子供一人一人が味わうことのできる学習を通して、互いを認め合い、学び合う子供を育成したいと考え、本課題を設定した。

2　研究実践

本学級のA児は、サッカーの経験があまりなく、自分の技能や動きに自信がなかった。本単元の体育科「みんな輝くフットサル～目指せ!最高のチーム～」の学習を通して、A児は自己の技能を向上させようと練習したり、友達のよさを自分に取り入れたりしながら、学習に取り組んだ。

(1)　子供自らが選ぶ練習方法

子供自身が伸ばしたい技能を考え、選択することで、楽しみながら練習し技能を高めていくことをねらい、練習方法を幾通りか提示した。サッカーの技能に自信のないA児は、第1時で自己の技能を高めることを意識し、パスやシュート練習を中心に、蹴ることを練習した。A児の第1～3時までのワークシートから、自分の技能が上達したことを感じていることが分かる。段階的に練習を繰り返すことで、自分の動きの高まりを実感するようになった。(資料1)

資料1　　＜A児の振り返りカードより＞

時数	A児の振り返り
第1時	相手のチームがすごく強くて負けてしまったので、もっとチームで練習してリーグ戦のときは、勝てるようにがんばりたいです。他のグループにも勝てるように、ドリブル、シュート、パスを特に練習してうまくなりたいです。
第2時	試合はしなかったけれど、第1回よりも、上手になっていたし、チームワークも上がったと思うのでよかったと思います。第3回や、次の試合などでも、がんばりたいです。
第3時	パスができるように、敵がいないところに動いてあげることはできたけれど、しっかりとめたり、すぐに次のパスを出したりできなかったので、練習したいです。
第4時	トラップ、パス、シュートなど、前より「蹴る」「止める」が正確にできて、上手くなってきているのでよかったと思います。
第5時	チームで練習していたときには、パスやトラップ、チームでの動きができていたけれど、試合のときには、すぐにボールを取られてしまったので、相手にボールをとられないようにがんばりたいです。
第6時	チームでパスがあまりつながらなかったから、もっと仲間がどこにいるか見て、パスをできたらいいと思います。
第7時	リーグ戦では負けてしまったけれど、パスの仕方やドリブルやシュートを狙えるようなっていたので、次はがんばって勝ちたいです。
第8時	指示を出せていなかったけれど、前よりシュートをねらえるようになったし、相手のボールをチームで取れるようになったのでよかったです。でも、負けているので、勝てるようにしたいです。

(2)　ハイブリッドパソコンを使用した振り返りの場の設定

各チームにハイブリッドパソコンを配付しチームの練習と試合の中で、気になった点を動画で撮影して確認することで、課題を見いだし解決できるようにした。

技能面が少しずつ向上し、手応えを感じたA児は、試合での自分の動きを意識し始めた。資料1の第3時では、「敵のいないところに動く」ことを意識していることが分かる。A児が自分の動きを意識したのは、ハイブリッドパソコンの映像を視聴した際の、B児の発言がきっかけである。

A児と同じチームのB児は、「自分のパスの仕方は、ボールばかりを見ていて仲間を見ていなかった」と自分の動きを見て気付いたことを、積極的にチームの仲間に伝えていた。A児は、B児の発言に触発され、自分の動きはどうだったのかと考えながら、映像を見ていた。

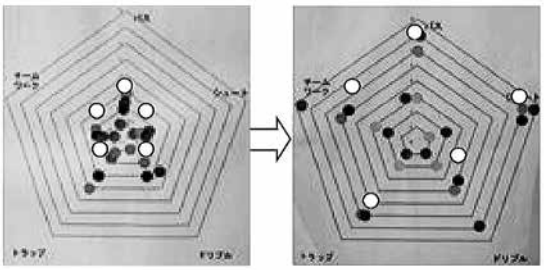
さらに、第4時で、A児は、ゴールの前で点数を入れられないように守備についていたB児のよさを見付けた。(資料2)B児のように動くことで、勝つことができ、よりよい動きを自分もしたいと願いをもったA児は、チームの仲間の動きを見ながら、考えて動くことを意識するようになっていった。第6時に「チームでパスがあまりつながらなかった。仲間がどこにいるか見て、パスしたい」とA児が記述している(資料1)のは、B児の「パスのもらえるところに動こう」などの、パスをつなぐための仲間への働きかけがあったからだと考える。

資料2　＜第４時のチームの話合い後のA児の振り返りより＞
Bさんが、試合のとき、敵にゴールを入れられないように、ゴールの前に立っていました。敵にゴールされそうになったとき、ふせいでいたので、すごいと思いました。

単元の終末で、「相手のボールをチームでとれるようになったので、よかったです」というA児の記述から、チームとして伸びた点を喜び、仲間との関わりの中で自分も向上していったことに満足していることが分かる。

資料3＜チームの振り返りレーダーチャート＞※○はA児

第１時　　第６時



資料3は、5つの観点(パス、シュート、ドリブル、トラップ、チームワーク)を自己評価したレーダーチャートである。第1時と第6時を比較すると、チーム全体的にどの観点も高まっており、自分の技能面だけでなく、チームワークの高まりを感じていたことが分かる。パソコンを活用して具体的に動きを振り返ることで、自分の姿を客観的に捉え、自己の抱える課題解決につなげることができた。

3　研究の成果

・個々の願いや実態に応じた練習の場を設定し、自分で選択して練習できるようにすることで、子供たちは見通しをもち、技能を高める活動に取り組むことができた。
・ICT機器を活用し、活動時の映像を振り返ることによって、チームや自分の動きを確認し、子供同士が対話する中で、課題を見いだし改善しながら解決することができた。

4　今後の課題

作戦やチームに合った動きを考える際に、チームの特徴の捉え方や仲間を見る視点が曖昧だったために、振り返ったことが効果的に生かされないことがあった。チームの様子や一緒に活動する仲間の姿と各自の思いについて聴き合う場を設定し、作戦や仲間を見る視点の具体化を図るための言語活動を充実させていく。

認め合い、のびのびと自分の考えを表現しながら学び合う子供の育成

富山市立新保小学校　教諭　小　杉　有　希

1　課題設定の理由

本学級には明るく元気な子供が多いが、自分と異なる意見に対して、最後まで聞く前に強く反発する子供もいる。そのためA児は、積極的に挙手をするが自信のなさから発言を途中で諦めてしまうことがある。学級全体が温かな雰囲気をもち、互いに認め合うことができれば、子供たちが安心してのびのびと自分の考えを表現し、学び合うことにつながると考え、本課題を設定した。

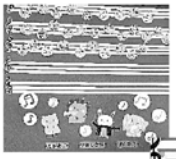
2　研究実践

⑴　互いのよさを感じ、認め合うことができるための温かな雰囲気作り

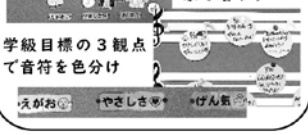
思い・考えを自由に話す「お話タイム」

朝の会の中で、子供が「話したい」「聞きたい」と思うような、話しやすいテーマで 15 分程度行う。土日明けは「休日何したか」、行事がある日はその行事について等、子供たちが普段休み時間に話しているような雰囲気で行っている。

クラス全体で達成感や満足感を共有する「音符集め」



←帰りの会で１日の振り返りを行い、みんなの思い出になったことを音符の掲示で増やす



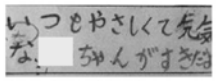
学級目標の３観点で音符を色分け

子供のよさを伝える場作り

←自主学習ノートのがんばりを掲示

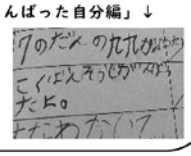
絵が得意な子が自主的に作ったポスターを掲示　→

友達のよさ・自分のよさに気付く、伝える「すてきノート」



←友達のすてきを書く「みんなから編」

自分のすてきを書く「がんばった自分編」↓



⑵　主体的・協働的に学ぶための学習活動の工夫(学級活動「目ざせ!けんこうマスター」より)

コロナ禍での臨時休校による家庭でのメディア利用の増加

・お話タイムにおける「新しいゲーム機を買った」「ずっとしている」という子供の発言

・保護者の「メディアばかりで心配」「言葉遣いが気になる」「自制してほしい」との思い

お話タイムの活用

＜事前に行ったテーマ＞
- けんこうマスターってどういう人？
- 休日何して過ごした？
- メディアについて（よいところや心配なこと）
- メディアを使ってできること
- メディアではない遊びって何があるかな？
- 自分の今の健康レベル
- やってきたメディアチェックをみんなで見てみよう

＜事後に行ったテーマ＞
- 作戦を使ってみた？
- メディアオンオフ大作戦の途中経過について
- メディアオンオフ大作戦をやってみてどうだった？

話したい！聞きたい！

＜本時＞

紙芝居を用いた「新保しんくん」（第三者）の長時間利用の様子やその心身への影響から、改善案を考え、健康へ意識を向ける。

なんとかしないと！

しんくん、けんこうマスターから離れている！

自分のメディアチェックを振り返り、自分事として考える。

なんだか心配になってきた…

脳にも影響があるなんて驚いた

自分に合う作戦を考え、継続して健康な生活を送る意欲を高める。

自分で１日の時間割を決めたい

Bさんの作戦、やってみたい！

養護教諭との連携

- 専門性を生かし、「けんこうはかせ」として子供に分かりやすい言葉で長時間利用による心身への影響を提示
- 天使と悪魔のペープサートで心の葛藤を表現
- 事後の活動においても子供が感じた疑問や悩みに応じる

がんばろう

自分で　家族と

＜事後＞ メリハリをつけてメディアに関わるための「メディア オンオフ大作戦」

3　研究の成果

A児は、「けんこうマスター」に近づこうと考えながら、積極的に思いを話すことができた。また、学習の中で生まれた友達への疑問を素直に伝え、全体の場でも相手に尋ねることができた。さらに、A児の発言に対して、「分かる」「僕も聞きたい」等、肯定的なつぶやきが多く聞かれた。

ペアやグループで話す経験を積むことや、友達の考えをよく聴くことで、子供たちは互いに認め合いながら、安心してのびのびと自分の考えを表現でき、集団で学び合うことのよさを感じることができたと考える。

4　今後の課題

2年生における発達段階としては、自己決定ができず、家庭や教師の支援が必要な場合もある。児童の実態に合った指導を今後も継続していく必要がある。また、全体での話合いの際には、発言を一つ一つ板書して、学びが途切れることのないよう、板書の内容を吟味したり、子供の学び合いが深まるような発問や切り返しの仕方を工夫したりしていきたい。

自己を見つめ、進んで学習に取り組む子供の育成

富山市立大沢野小学校　教諭　渡　利　哲　朗

1　課題設定の理由

子供たちが、毎日、笑顔で学校生活を送ることができることを願っている。それには、いじめのない学級をつくることが大切である。いじめを受けるつらさに真剣に向き合い、本気でいじめをなくそうと努力する子供たちに育てたい。そこで、「いじめの詩を書く（道徳、国語）」という単元を設定した。子供たちがこれまでに経験した『いじめ』を基に詩を書き、それを見合いながら率直に語り合うことを通して、子供たちの人権感覚を高めていきたいと考えた。

2　研究実践

(1)　つらかった以前の自分をみつめ、いじめと向き合おうとする子供たち

導入で、「いじめっこ　いじめられっこ－谷川俊太郎と子どもたち－」の詩の作品を提示し、感想を書かせた。下記は、A児の初発の感想である。

> いじめを助けようとしている心だけでもすごいと思いました。いじめを止めようと言われるが、私は止められないです。こわいです。見ているだけでもつらいです。思い出したくない過去を思い出して辛くなりました。いじめられた時、誰も味方してくれない、私はここにいない、見えないかのように無視されていたので、味方が一人でもいれば心が軽くなったと思います。だからいじめをなくせるように詩を書きたい。

A児は、中学年でいじめのつらい経験をしている。いじめの詩を読むだけで「悲しい思い出がよみがえって、涙が出そうになった」と私に語っていた。そのA児が左の詩を書いた。A児は、「詩を書いてすっきりとした」と述べていた。長い間、誰にも言えず自分一人で抱え込んでいた“嫌なこと、くやしかったこと”を吐き出して、心が静まり軽くなったのであろうと思われる。また、子供たちの書いたどの詩からも、いじめに悲しみ、苦しんでいる様子がありありと感じられたが、それ以上に「いじめを憎しみ、なくしていこう」とする健気な思いも強く感じることができた。

> いじめられた日
> 毎日しゃべっていた子に
> 突然無視された
> 何か悪いことした？
> 謝ったけど
> 無視された
> 陰口も言われた
> つらくて悲しいものが
> 心に突き刺さった
> それから
> ずっと一人になった
> 毎日すごく寂しかった

(2)　いじめについて真摯に語り合う子供たち

「書くこと」に苦手意識のある子供たちも、この学習では、そのことを口にせず、自分なりに精一杯努力しようとする姿勢があった。そして、それぞれが作ったその詩（無記名）を互いに見合いながら、思ったことを語り合う授業を行った。

話合いでは、どの子の発言からも「いじめをなくしたい」という思いをもっていることが伝わってきた。右の詩からは、傍観者としての自分の在り方について、どうあればよいのかをみんなで考え合った。中には「いじめをなくそう」と決意を述べる子供もいた。

授業後には、「自分にとって、救われるような思いを感じた学習だった」「クラスのみんなの優しさを感じた」という感想を書いている子供が多くいた。

> 勇気
> 今日もまた
> B君がいじめられている
> B君は、僕のことを
> 「助けて」という目で
> チラチラ見てくる
> 僕だって助けてあげたい
> 立ち向かう勇気を
> 出そうとも思った
> でも、できなかった
> なんでだろう
> 助けたら次はぼくだから
> いじめっ子は強いから
> そんな目で
> チラチラ見られると
> 自分が情けなくなる
> B君を助けられたのは
> 自分の頭の中の
> 妄想だけだった

3　研究の成果（解明されたこと等）

子供たちの詩は、フィクションも多少は入っているが、経験したことを基に書いたことで、それを読む子供も真剣に仲間の気持ちに向き合うことができた。そして、つらかった互いの思いを感じ合おうとした子供たちだったからこそ、それぞれの詩から「いじめ」について真剣に考えようとした。また、そんな学習の中で、子供たちはクラスの仲間に対する安心感をもったように思われる。

4　今後の課題（残された問題点）

子供たちは今、人権週間を機会に「いじめ」に対する自分たちの思いを全校児童に広めようとしている。今後も「自分も大切、仲間も大切」という言葉をキーワードに、人権感覚を高めていきたい。

自分自身で感染症から身を守る児童の育成

－ 学校保健委員会と児童保健委員会の取組から －

富山市立大庄小学校　養護助教諭　植　野　未　久

1　課題設定の理由

新型コロナウイルス感染症等の拡大防止のため、子供たちが自分自身で感染しない・感染させないための手洗いやうがい、咳エチケット等を自ら意識して生活する力を身に付けほしいと願い、コロナ禍における指導体制の下での学校保健委員会・児童保健委員会の活動について、その在り方を検討し、実施し、成果を確かなものにしたいと考えた。

2　研究実践

⑴　新しい方法を取り入れた学校保健委員会

例年、10月の学習参観に合わせて実施している学校保健員会は、今年度の実施が見通せないことから、学校医・学校薬剤師や管理職、関係教職員と、実施の意義や方法、評価、保護者との連携等、学校保健委員会の在り方について、相談・検討を行った。また、各学年の生活科、理科、体育（保健領域）、理科特別活動やの指導内容を確認し直し、カリキュラム・マネジメントの視点からも「手洗い」に重点を置いた指導を計画し、習慣化を図った（右上表）。指導に当たっては、指導用動画(右ＱＲコード：保護者へも周知)とワークシートを作成し、各学級で手洗いチェッカーを活用して実施した（資料①）。子供は「しっかり洗ったのに指先が洗えていない」「手の平に汚れが残っている」等ときれいに洗えていないことに驚いていた。ワークシートの内容（資料②）を学校薬剤師に確認してもらい、手洗い等についてのアドバイスを得、その内容を保健だよりで紹介したり、学級での指導に活用したりした。

資料①　手洗いチェッカーを使った確認

手洗いの指導（学級活動）
①普段の自分たちの手洗いの仕方で手洗い
②手洗いチェッカーでの洗い残しの確認
③動画で正しい手洗い方法の確認
④「手洗い歌」の動画を視聴し、手洗いの仕方の振り返り

学校保健委員会資料動画

⑵　児童保健委員会活動による活動

①　「手洗いタイム」

学校保健委員会で学んだ正しい方法で丁寧に手を洗うことができるように、1日2回、5分間の「手洗いタイム」を設けた。さらに校内放送で上記の「手洗い歌」を流し、時間を確保した。手洗いタイムでは、手洗い歌を口ずさみながら、真剣に手を洗う子供の様子が見られた。（資料③）

②　「清潔チェック」

学校保健委員会では、手を洗った後はきれいなハンカチで手を拭くことも学習し、それと連動した、ハンカチとティッシュの清潔な携行を促す活動を行った。また、その状況を昼食時の校内放送で紹介した。その後、年間を通した活動に定着した。

資料②　ウイルスバイバイノート

資料③　手洗いの様子

3　研究の成果

連動した学校保健委員会と児童保健委員会の運営は、目的や方法を再確認する機会となり、子供の正しい手洗い方法の確認等、感染症から自分や周りの人を守る意識を高めることできた。

4　今後の課題

子供の感染症対策の意識の持続化を図り、確実に健康な生活習慣を身に付ける意欲を高める等、自らの健康を守るための主体的な行動を促す両保健委員会の運営を改善する必要がある。

子供の心を開く鍵となるツールの活用

富山市立柳町小学校　養護教諭　長　越　由　莉

1　課題設定の理由

一見元気に見える子供でも、内心は悩みや不安を抱えている場合がある。さらに、新型コロナウイルス感染症で、子供が精神的に不安定になりやすい状況が予測できた。そこで、子供が本音を打ち明けやすい存在として、個々に合った接し方で日頃から声かけをすることや、子供の変化にいち早く気付き、子供が承認されていると感じられる関わり、より前向きな気持ちになれる関わりを大切にしてきた。

しかし、本校に赴任した年度当初は、子供との関係性を築くことが難しく感じられた。理由は、マスクを着用した関わりで表情の変化に気付きづらいこと、またコロナウイルス感染防止対策の指導は、個々と関わる時間が限られる中で行うため、子供と温かい関わりをしたいという根本にある思いが、子供に伝わりにくく感じられたからである。

そこで、ツールを用いて子供との関係性が深まった経験を基に、ツールは自然と心を開きたくなる効果的手立てになると考え、上記のような課題を設定した。

2　研究実践

①　元気おみくじ（幸せ運・勉強運、家族運等全7種類がある）掲示

多くの子供が①を日課のようにひいていく。おみくじの「今日は家族にただいまと言ってみよう」という言葉を見て、笑顔で「今日、ママが早く帰ってくるから言ってみる。」と声をかけてくる子供もいれば、「家族運か。実はね‥。」と、家族に感じている不満を吐露し始める子供もいる。これらが会話の鍵となり、深く掘り下げていくことで、子供の本音を受け止める関わりに繋げていくことができる。

②　痛みのものさし（痛みを5段階のレベルで表し、絵の表情とリンクさせたもの）

②は、子供が痛みの程度を言葉で伝えることが難しい時に使っている。日本語が難しい外国にルーツをもつ子供は、怪我をした時、「痛い。分からない。」と繰り返し、困った表情をしていたが、②を見ると、「これ、これ。」と、納得した表情で痛みの程度を伝えることができた。また、来室してきた子供に対し、他の子供が②を見せながら「どのくらい痛いの。」と関わる姿も見られるようになっている。

③　わくわく質問カード（「好きな季節は何か。」や「あこがれている人は誰か。」など、楽しく自分の好きなことや自分の強みに目を向けることができるカード）

③は、校内で持ち歩いて話題のきっかけにしたり、保健室のすぐ見える場所に置き、子供が触れることができるようにしたりしている。会話が苦手な子供や、体調不良の部分ばかりに気が向いてしまう子供も、一緒にカードの文字を見ながら向き合うようにすることで、リラックスして自分の話をすることができている。

3　研究の成果

ツールを用いた関わりは、どのような子供でも話がしやすく、通常の会話だけの時よりも子供理解が深まる上、子供同士の交流のきっかけにもなっている。「最近、楽しかったことは。」という質問に、ある子供は、「先生と話す時間だよ。いつも楽しいことを考えたり、元気になったりするからだよ。」と答えていた。毎日笑顔で話しかけてくるその子供にとっては、ツールに込めた養護教諭の思いが伝わっていると感じられる。

4　今後の課題

今は、子供の「こんな質問はどうかな。」という意見を取り入れながらツールを作っている。ツールを上手く活用し、自分から困り感を伝えることのできない子供の心も開くことができるように、子供の心に寄り添った関わりを続けていきたい。

「考え、議論する道徳」実現に向けての具体的手立ての発案

高岡市立能町小学校　教諭　高　野　昌　幸

1　課題設定の理由

「自分なりの考えをもち、友達と議論を交わして、多様な考えに触れる」ことが「考え、議論する道徳」だと、私は捉えている。その過程で、人間としてよりよい判断をしていこうとする態度を養ったり価値観や実践意欲を育んだりできると考える。

では、児童が「考え」をもつには、どうすればよいのか。「議論する」には、どうすればよいのか。「考え、議論する道徳」を実現するための具体的な手立てを探究したいと思い、課題を設定した。

2　研究実践

⑴　道徳的価値の深みに迫る課題設定

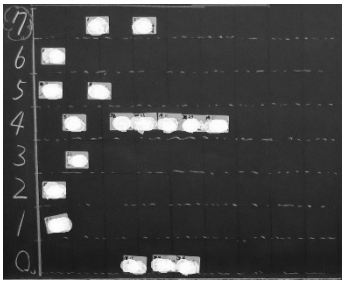
道徳的価値の上澄みだけでなく、なぜそれに価値があるのか、なぜその価値が大切なのか等の道徳的価値について深く掘り下げたいと考えた。『心と心の握手（親切、思いやり）』では、「本当の親切とは何だろうか」と問うことにより、これまで自分が行ってきた親切と照らし合わせて考えられるようにした。教材文に登場する男の子がリハビリをする老人を見守る姿から、直接的な行動を起こすことだけでなく、相手の気持ちを考えた上での行動が本当の親切なのではないかと考えることができた。

⑵　児童の気持ちを揺さぶる発問や問い返し

『一まいの写真から（親切、思いやり）』では、電車とホームの間に挟まった女性を乗客が力を合わせて電車を動かし、助け出した場面から、「なぜ知らない人まで助ける必要があるの?知らない人だから、放っておいてもいいのではないか」というような、児童の心を揺さぶる問い返しをした。児童は、このような発問や問い返しを受け「女の人の家族が悲しむ」「他人でもかけがえのない命だ」といった、相手の立場に立ち進んで親切にしようとする思いを語ることができた。

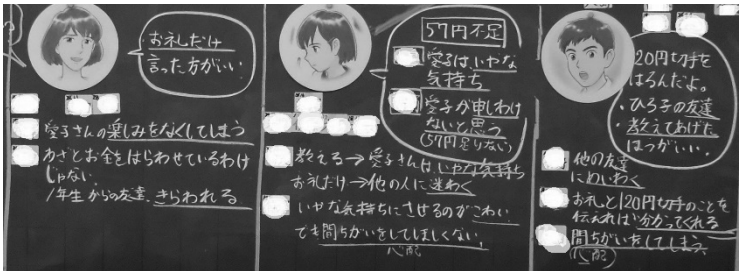
⑶　思いの数値化

自分の思いを数値化して可視化することにより、他者の思いとの差を一目で分かるようにしたいと考えた。『わり切れない気持ち（勤労、公共の精神）』では、自分のしたことが先生に分かってもらえず、また、自分からも言い出しにくいことによって生じた主人公のもやもやした気持ちを数値化した。数値による表現なので他者との比較をしながら、「なぜ友達は、こんなに高いのか（低いのか）」と疑問をもったり、根拠をもって自分の思いを語ったりすることができた。



⑷　対立構造をつくる

議論させるには、意図的に対立構造をつくることも有効であると考えた。『絵葉書と切手（友情、信頼）』では、友達から料金不足の絵葉書を受け取った主人公が、母親と兄の意見の間で思い悩む場面から対立構造をつくった。自分だったらどの人物の意見に共感できるかを問い、一人一人が自分の立場を明確にすることにより、互いに相手を説得しようとしたり、対立側の意見に耳を傾けようとしたりする姿がみられた。



3　研究の成果

- 道徳的価値の深みに迫る課題設定により、児童が抱いていた価値観の見直しをすることができた。
- 児童の気持ちを揺さぶる発問や問い返しにより、自分事として引き寄せて考えることができ、道徳的な心情の高まりがみられた。
- 思いの数値化により、支援が必要な児童が自分の思いを表すことができ、他者の思いとの差を一目で理解することができた。
- 対立構造をつくることにより、他者との思いの違いが明白になり、違う立場の意見を求めたり、互いに納得させようとしたりする議論の姿がみられた。

4　今後の課題

単に「登場人物が自分だったら、どうする?」のような自己投影をさせるような発問では、ねらいとする道徳的価値に迫ることが難しかった。教材文や学習課題を自分に引き寄せて考えるには、どうすればよいのかが次の課題だと感じた。児童が道徳科で学習したことを自分の生活に生かしよりよく生きていこうとする意欲を高めるための手立てを考えていきたい。

協働的に学ぶ楽しさや達成感が味わえる授業づくり

高岡市立南条小学校　教諭　福　尾　尚　久
（R2 高岡市立定塚小学校での実践）

1　課題設定の理由

本学級の児童は、体育科「鉄棒運動」の学習で様々な技に積極的に挑戦し、成功を目指すなど意欲的に学習に取り組んだ。一方、本単元の「マット運動」に対しては、「技ができない」、「けがをしそう」などの理由から苦手意識をもつ児童が多く、練習に消極的な児童が少なくない。また、自分のできていないポイントを客観的にイメージできず、漠然と練習し、技能が向上しない児童も多く見られる。そこで本単元では、児童の苦手意識を少しでも減らし、楽しさや喜びを感じながらマット運動に取り組む姿を目指したいと考え、本課題を設定した。

2　研究実践

(1)　協働的な学び合い「学級目標の意識」

単元の導入時、マット運動の学習で、学級目標の「スマイル」を広げるために、自分たちに何ができるか話合いを行った。個人の目標だけでなく、他者や学級全体を意識することで、温かい人間関係の形成や共に学ぶ喜びを感じられるようにした。

(2)　協働的な学び合い「タブレットの活用」・「場の工夫」

児童が自分の試技の様子を客観的に見つめ直し、課題を見付けて練習に取り組めるようにするため、タブレットの動画アプリ「追っかけ再生」を活用した。タブレットを通した関わりに加え、同じ課題や目的意識をもつ児童をペアやグループにしたり、マットの配置をポイントごとに分けたりすることで、児童が協力しながら活動に取り組めるようにした。また、活動の間に「アドバイスタイム」を設けて、困り感をもつ児童の悩みを学級全体で解決することで、児童の帰属意識や学級の団結感を高められるようにした。

(3)　個々の成長の実感「スモールステップ」

技のポイントごとに練習場所を設置し、段階を細かく分けることで、自分の力に合った目当てをもって活動に取り組める環境を意識した。それに対応するようにワークシートのチェック欄を設けて、スモールステップで「できた」喜びを多く味わえるようにした。また、自分の試技の様子をタブレットに撮りため、前時と比較することで自分の成長を客観的に見つめることができるようにした。

＜子供のワークシート＞

3　研究の成果

(1)　学級目標を意識させたことで、温かい言葉がけやアドバイスが自然と生まれ、苦手意識をもった児童も抵抗感なくチャレンジする姿がみられた。また振り返りカードには、いつでも助けてもらえる安心感やできたことを一緒に喜んでもらえる嬉しさが楽しさにつながっているという感想が多かった。さらに、児童の困り感を全体で共有する「アドバイスタイム」では、運動を苦手に感じていた児童が積極的にみんなに困り感を伝え、全体で解決に取り組んだことで、温かい人間関係が築かれ、学級経営にもつなげることができた。

(2)　タブレットの活用や場の工夫をしたことで、次時の自分の課題を明確にし、一人一人が目当てをもって運動に取り組む姿がみられた。また、あらかじめ技のポイントを三つ提示したことで、タブレットで自分の試技を振り返る際に、視点をもって動きを確認することができた。さらに、前時の試技と、課題を意識して練習した後の試技を見比べることで、視覚的に自分の成長を感じ取り、満足感や達成感を味わう児童の姿がみられた。

(3)　スモールステップを意識して、「できた」経験を多く積むことで、自分の成長を実感できるなど、マット運動が好きな児童を増やすことができた。

事前アンケート	好き	どちらかと言えば好き	どちらかと言えば嫌い	嫌い
マット運動は好きですか。	9人	4人	7人	5人

事後アンケート	好き	どちらかと言えば好き	どちらかと言えば嫌い	嫌い
マット運動は好きですか。	15人	9人	1人	0人

4　今後の課題

日々の授業において、児童の実態を把握し、実態に合った支援を工夫していくことの重要性を感じた。今回の実践では、児童への支援の方法は適切なのか、何を目的にタブレットを活用するのかなど、もう少し教師自身が選択した支援の意義を明確にしておく必要があった。そのため今後も、児童の実態や単元のねらいを踏まえた支援方法を吟味していく必要がある。

友達との関わりを通して、自分の読みを深める子供の育成

－ 第3学年国語科「登場人物について話し合おう　『モチモチの木』」の実践を通して －

砺波市立出町小学校　教諭　清　水　雄　斗

1　課題設定の理由

本学級には、国語科の物語文の学習において、文章の内容を理解し、楽しみながら読む子供が多い。一方、叙述から登場人物の気持ちや性格を想像したり、読み取ったことを話し合ったりする学習に対し、苦手意識のある子供がいる。教師自身も、国語科の読むことに関する力を身に付けることや話合いから読みを深めることに難しさを感じていた。そこで、子供が物語を楽しむだけでなく、文書を適切に読み取り、考えたことを友達と話し合うことで、自分の読みを深めることができるようにしたいと思い、本課題を設定した。

2　研究実践

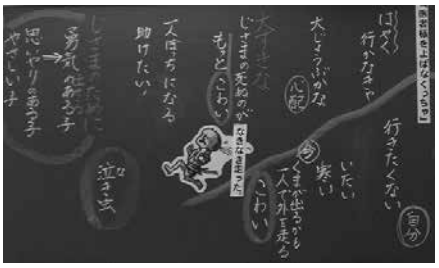
(1)　読み方を身に付けるための単元の目当ての意識化

＜単元デザイン図の掲示＞

物語文の学習では、一人一人が教材文を読み取る力を身に付けることが大切である。そこで、国語科の教科書に明記されている単元の目当て（＝単元で身に付ける力）を教師も子供も意識しながら学習を進めるようにした。

「モチモチの木」では、登場人物の性格を捉える読み方を身に付けることをねらいとしている。そこで、第一次の初めに感想を交流し、「豆太はどんな子か」という単元の課題を設定した。そして、その課題を解決するために教材文を読んで話し合うことや、性格を捉えるために着目する叙述等を全体で共通理解したことで、子供は学習の見通しをもつことができた。また、共通理解したことを読みのデザイン図として掲示し、常に意識できるようにしたり、毎時間の学習の終末にどの言葉から性格を読み取ったか振り返ったりしたことによって、登場人物の性格を捉えるための読み方を身に付けていくことができた。子供は読み方が分かったことで、話合いで自信をもって発言したり友達の考えに耳を傾けたりすることができるようになってきた。

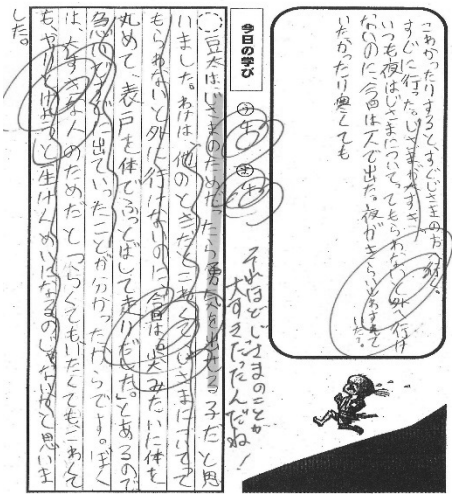
(2)　読みを深めるための授業の山場と教師の役割



＜「豆太は見た」の場面の板書＞

第二次では、単元の課題「豆太はどんな子か」について、場面ごとに読み、話し合った。しかし、単に課題について読み取ったことや考えたことを話し合うだけでは読みは深まりにくい。そこで、教師が45分間の授業の中で深めたい箇所を「授業の山場」として位置付け、読みが深められるように、取り上げる叙述を精選したり発問を工夫したりした。

「豆太は見た」の場面では、「いたくて、寒くて、こわかった」と「じさまの死ぬほうがもっとこわかった」の2つの叙述を取り上げ、「この2つの『こわかった』はどのように違うのでしょうか」と発問した。この発問によって、豆太の怖い気持ちの違いについて考えることができ、話合いを焦点化することができた。また、子供が豆太の気持ちを視覚的に捉え、性格とつなげて考えられるように、子供の発言を整理して板書した。じさまへの思いに関する気持ちは上、豆太の夜に対する恐怖心に関する気持ちは下に位置付けることで、子供は「こわかった」の違いに気付くことができた。終末で「豆太はどんな子か」という課題に立ち返った際には、子供は豆太の気持ちを踏まえた上で性格について考え直し、豆太のもつ勇気やじさまへの思いの強さについて考えを深めることができた。



＜M 児のワークシート＞

3　研究の成果

- 教師も子供も単元の目当てを意識して学習を進めたことで、子供は必要な読み方を身に付けることができた。また、性格を捉える読み方を生かして読み取ったことを話し合ったことで、人物に対する考えを深めることができた。
- 教師が45分間の授業の中で山場を想定し、子供の思考を深めるための発問をしたり、発言を視覚的に板書に位置付けたりしたことで、子供一人一人が読みを深めることができた。

4　今後の課題

子供が一つの単元で身に付けた力を活用し、他の教材文でも友達と関わりながら読み深めることができるように、十分に教材研究を重ね、系統性を意識して指導を続けていく必要がある。

子供の思考のスイッチを働かせるための教師の手立て

－ 道徳科の実践から－

砺波市立庄川小学校　教諭　原　野　友香梨

1　課題設定の理由

道徳科の学習では、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に自己を見つめたり、友達の発言から多様な考え方に気付いて自己の生き方についての考えを深めたりすることが大切である。子供が、友達の発言から「こんな考えもあるな」「自分はどうだろう」と思考を働かせながら考えるための効果的な手立てについて知りたいと思い、上記の課題を設定した。

2　研究実践

⑴　【教材について】『小学道徳　ゆたかな心　4年』　公文書院より

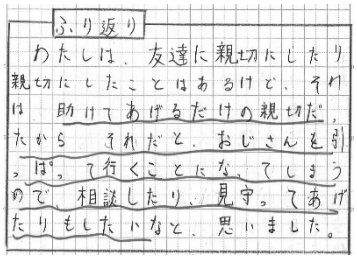
「A正直、誠実　　ぼくはMVP」　　「B親切、思いやり　せきが空いているのに」

「C規則の尊重　　雨のバスていりゅう所で」

⑵　【思考を働かせる発問の工夫】

・話合い後に導入と同じ発問をする

授業の終末に導入と同じ発問をすることで、内容項目に対する考えの深まりが終末に表れやすくなるのではないかと考えた。そこで「B親切、思いやり」について考える学習では、導入と終末で「親切とはどういうことだろう」と発問した。導入では「親切とは、困っているときに助けてあげる（手を貸す）こと」と考えている子供が多かった。しかし、教材を読んで話し合うと、終末では「見守ることも親切」「親切にはいろいろな種類があると知った」という子供の発言が聞かれた。また「A正直、誠実」について考える学習では、導入と終末で「正直な人とはどのような人だろう」と発問した。導入では、「正直とは嘘をつかない人」と考えていた子供が、終末には「嘘をついたとしても、最後にその嘘を謝れる人も正直な人だ」という考えに変わり、「正直」に対する考えの深まりがみられた。


ふり返り

わたしは、友達に親切にしたり親切にしたことはあるけど、それは　助けてあげるだけの親切だ。だから　それだと、おじさんを引っぱって行くことになってしまうので、相談したり、見守ってあげたりもしたいなと、思いました。

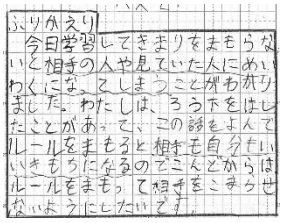
【「親切」の学習における振り返り】

⑶　【思考を働かせるための板書の工夫】

・表情マークで気持ちを見える化する

「B主として人との関わりに関すること」と「C主として集団や社会との関わりに関すること」の視点は、相手（集団）との関わりから自己について考える必要がある。そのため、他者の気持ちを考えるときに、表情マークで気持ちを見える化することで、見えづらい相手の心が捉えやすくなるのではないかと考えた。「C規則の尊重」について考える学習では、「主人公が（自分の気持ちを優先して）一番目にバスに乗ろうとしたとき、周りの人はどんな顔だったかな」と発問し、「イライラ」「嫌な気持ち」「赤い顔」というキーワードから、周りの人の気持ちを表情マークで見える化した。ある子供のノートには「きまりを守らないと周りの人に迷惑がかかるからきまりを守っていきたい」という振り返りがあり、周りの人の気持ちを考えて生活しようとする心情を高めることができた。

【表情マーク】


ふりかえり

今日学習してきまりをまもらないと相手の人や見ていた人にめいわくになってしまうことがわかりました。わたしは、ろう下をはしったことがあって、この話をよんでルールをまもると相手も自分もいいきもちになるのでこんどからはルールをまもって相手をこまらせないようにしたいです。

3　研究の成果

・終末に導入と同じ発問をすることで、内容項目に対する自己の考えを振り返るきっかけができ、導入ではみられなかった考えの深まりがみられた。

・周りの人の気持ちを表情マークで表すことで、見えづらい心の中の思いが捉えやすくなり、周りの人の気持ちを考えて生活しようとする自己の生き方についての考えを深めることができた。

4　今後の課題

・子供が気持ちを想像しにくい場面における教師の発問や問い返し

「C規則の尊重」について考える学習では、「きまりを守ればよかった」と主人公が反省する気持ちを母親の挿絵を通して気付かせるために、ムッとした母親の挿絵を提示しながら「お母さんの顔を見た主人公はどのようなことを考えたのだろう」と発問したが、子供から「反省」や「後悔」といった思いを引き出すことができなかった。子供たちは、挿絵から、母親がよい顔をしていないことに気付いていたが、どうしてこのような顔になっているのかを想像したり、気持ちを考えたりするのが難しく、思考が止まったように感じた。発問を考えるときは、言葉を吟味したり「母親はどんな顔をしているかな」「どうしてこんな顔になってしまったのだろう」と問い返しを準備したりしておき、子供の思考が深まるようにしていきたい。

新しい生活様式における動画教材を用いた理科の授業の進め方

富山市立山室中学校　教諭　吉　田　秀　徳

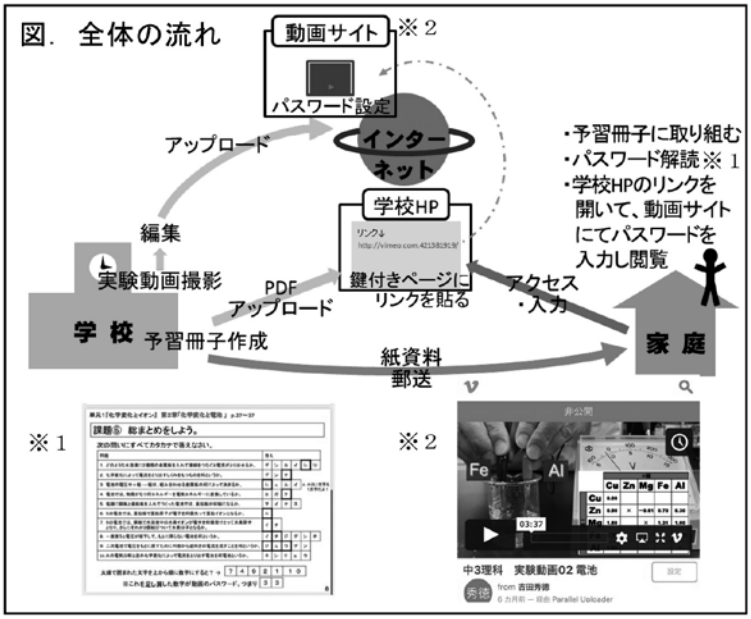
1　課題設定の理由

新型コロナウイルス感染拡大防止のための臨時休業によって、生徒は1か月半もの間、一人で家庭学習を行うこととなった。そこで、文部科学省の出したガイドラインに沿って、家庭学習の意欲向上を図るとともに、また学校再開後の授業が円滑に進むように、理科教員同士で協力して「予習冊子の作成・配布」と「実験動画の撮影・配信」を行った。

2　研究実践

⑴　予習冊子の作成・配布

授業の代替ではなく、予習を助ける教材として位置付けた。そのため、教師から教わらなくても教科書を見ながら学習が進められるようにした。冊子はプレゼンテーションソフトで作成し、PDF化した。また印刷したものは生徒宅へ郵送し、データは学校HPに掲載した。配慮したこととして、学習意欲を高めるために、クイズ形式でキーワードを解読することができる形式にした。（**図**の※1参照）



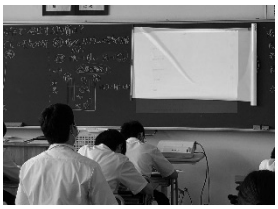
⑵　動画の撮影・配信

手順や結果が分かりやすいように角度を決めて撮影を行った。動画はAdobe社の「premiere pro」を用いて編集した。動画でも理解しやすくなるように、シーンごとの再生時間を10秒以上に設定した。また、テロップで手順や考察のポイントを提示した。完成した動画を、Vimeo社のサイトに動画そのものにパスワードを設定してアップロードした。（**図**の※2参照）。

⑶　学校HPの準備

学校HPの記事に、生徒・保護者閲覧用（パスワード設定あり）ページのリンクを貼った。リンク先には、更に二つのリンク（予習冊子のPDFデータと動画サイト）を貼り、冊子の問題を解くことでキーワードが分かり、動画が閲覧できるようにした。

3　研究の成果



学校再開後、同じ動画を見せながら授業を行うと、生徒から「これ家で見たから分かる。」とか「3年の理科意外と楽しい。」といった前向きな言葉が聞かれた。中には、動画に付けたBGMが印象に残ったらしく、口ずさむ生徒もいた。動画を楽しみにして意欲的に家庭学習に取り組んだものと考えられる。このように家庭学習課題を工夫することで、家庭学習から授業へのつながりを円滑にすることができ、分かる喜びや解く自信を導くことができた点が、本実践の最大の成果だと考える。

4　今後の課題

家庭での学習と学校との双方向同時のやり取りが確立すれば、学習効果はより高まると考えられる。

一枚の資料の読み取りを通して、生徒の多面的・多角的なものの見方を育てる工夫

富山市立楡原中学校　教諭　清　崎　凌　太

1　課題設定の理由

学習指導要領では、中学校社会科の目標として『「社会的な見方・考え方」を用いて課題を解決する活動を通して、公民的資質・能力の基礎を高める』が示されている。具体的な「社会的な見方・考え方」の例としては、歴史分野であれば、時期・時間の経過、できごとと当時の人物や社会との関係等が挙げられる。この「社会的な見方・考え方」を育成するための有効な方法が「資料の読み取り」である。「資料の読み取り」の方法を工夫し、生徒が多面的に資料を読み取り、多角的なものの見方を身に付けることができれば、「社会的な見方・考え方」の育成につながると考え、本課題を設定した。

2　研究実践

歴史的分野　『資料を見て、鎌倉時代における武士や民衆の生活の特徴をつかもう』における実践

(1)　教科書の資料を読み取りに活用する。

読み取りに活用する資料は、教科書の資料が一番よいと考えた。教科書の資料は、教材の狙いを達成させるために、精選されたものだからである。教科書のほぼ全ページに資料があり、どの資料も読み取りを行うことで「社会的な見方・考え方」を育成することにつながる。例えば、教科書の資料『タイムトラベル　鎌倉時代をながめてみよう』からは、塀や堀に囲まれた武士の屋敷、訓練をする武士、人やものを運ぶために牛や馬を利用する様子等を読み取ることができ、平安時代の貴族中心の時代から武士や一般の人々が活躍する時代に変化したことを理解することができる。

(2)　一枚の資料から、生徒の多面的な意見を引き出す。

資料の読み取りにおいて、多面的に考える活動のために、まず、「資料から分かったことや気付いたことを箇条書きでできるだけたくさん書きましょう。」と指示し、資料からたくさんの意見を出させている。その上で意識していることは二つ。一つは、どのような意見も認めること。もう一つは、短く箇条書きで書かせることである。

(3)　生徒が多角的に考えられるよう発問をする。

資料の読み取りにおいて、多角的に考える活動とは、社会的な課題や視点について、様々な情報の中から適切なものを選択したり、自分や他者の意見を参考に、様々な角度から考察したりすることである。それができるように、(2)の活動の後、2つの補助発問をし、それぞれ生徒に考えさせた。1つ目は、「なぜ、館の周りには堀や柵があるのか」、2つ目は、「なぜ、館で猿が飼育されているのか」である。最初の補助発問は、「武士の特徴をつかむ」という本授業の狙いにつながるものであり、2つ目の補助発問は、資料の読み取りをする中で、学習課題に迫るために生徒に問いかけたものである。

3　研究の成果

・(2)の活動を通して、生徒たちはたくさんの意見を出すことができた。中には、1人で10個以上の意見を書いている生徒もいた。どの意見も認めるため、生徒は資料の読み取りに対し、苦手意識をもつことなく取り組めているように感じた。たくさんの意見が出ると、中には、「社会的な見方・考え方」の視点から情報を読み取れている意見や面白い着眼点からの意見、人によって意見が分かれる意見等、多種多様な意見があった。

・(3)の活動を通して、生徒たちは当時の人々の立場や社会から考えたり、現代の生活と比べて考えたり、友達の意見を参考にしたりしながら発問について理由を考えていた。特に、「なぜ、館で猿が飼育されているのか」の発問については、生徒によって意見が分かれたため、生徒たちは異なる立場に立ち、様々な角度から意見を述べ合っていた。生徒が様々な立場に立ち、様々な角度から意見を述べることは多角的に考える活動であり、意見交換の中で、「社会的な見方・考え方」も養われていくと感じた。

4　今後の課題

・限られた授業時間、授業時数の中で、これらの活動をいかに盛り込んでいくかということ。

・今後は、読み取り作業を行う前に、読み取りのポイントを示すことで、意見の質をさらに伸ばしたい。

・出し合った意見を教員が評価し、「社会的な見方・考え方」ができているものを紹介することで、その後の読み取り作業において、生徒は積極的に「社会的な見方・考え方」をするようになると思うので実践したい。

◇　課題研究奨励助成報告「優良賞」

学校名	職名	氏名	研究課題
入善町立ひばり野小学校	養護教諭	村中美智	子供が心身の健康に興味をもち、意欲的に取り組むための指導の工夫
滑川市立南部小学校	教諭	酒井佑介	主体的・対話的に学び合い、考えを深めていく子供の育成
富山市立豊田小学校	教諭	島　菊乃	自分の考えをもとに、仲間と共に学ぶ楽しさを感じる子供の育成
富山市立新庄小学校	教諭	大川祐佳	自分の思いや考えをもち関わり合いながら学ぶ授業づくり
富山市立広田小学校	教諭	岩本加奈	関心をもって友達の考えを聞き、学び合う子供の育成
富山市立堀川小学校	教諭	長谷川仁義	図画工作科の鑑賞における、子供の造形的な見方・考え方をはたらかせる授業の在り方
富山市立月岡小学校	教諭	大西遥海	伝え方・聞き方を意識して、主体的に学習に取り組む子供の育成
富山市立大庄小学校	教諭	西田莉彩	自分の考えをしっかりもち、考えを共有し、深めていく力の育成
富山市立寒江小学校	教諭	前馬裕樹	自己の生き方について考えを深めることができる構造的な板書
富山市立芝園小学校	教諭	中島雅国	自ら学びに向かい、問題解決を通して社会的現象を多角的に考える授業を目指して
高岡市立中田小学校	教諭	岩﨑貴士	主体的に学習に取り組む児童を育成するための授業の在り方
高岡市立福岡小学校	教諭	有島千紘	自分の思いや考えをもち、主体的に学習に取り組む児童の育成
高岡市立横田小学校	教諭	濵元大輝	一人一人がよさを伸ばし、共に高め合う児童の育成
高岡市立木津小学校	教諭	亀ヶ谷和可	自分の考えを深め、統合的・発展的に考えられる指導の在り方
高岡市立木津小学校	教諭	松井健悟	自分の考えをもち、進んで友達と関わり考えを深める子供の育成
高岡市立太田小学校	教諭	濵元維子	未来の被災者を救うため、気付き、考え、実行する子供を育てる防災教育の在り方
高岡市立戸出西部小学校	教諭	新保拓実	一人一人の特性に応じた指導や支援の在り方
氷見市立窪小学校	教諭	井上真孝	児童一人一人の自己有用感を高めるキャリア・パスポートの活用
南砺市立城端小学校	教諭	上野琢磨	豊かに運動に取り組み、動きを高める子供の育成
南砺市立福野小学校	教諭	三部晴夏	主体的に学ぶ子供の育成
南砺市立南砺つばき学舎	教諭	五十嵐彩夏	子供の思考を深めたり広めたりできる板書の工夫
南砺市立南砺つばき学舎	教諭	沼田涼平	プログラミング的思考を育成するための授業の工夫
入善町立入善西中学校	教諭	舛田　翔	自然現象への関心・意欲を高める理科教材の工夫
魚津市立西部中学校	教諭	植木　惇	思考ツールを用いた科学的な思考力、表現力の育成
滑川市立滑川中学校	教諭	濵多　薫	反転授業を取り入れた、理科の授業実践
富山市立南部中学校	教諭	河原隆史	ＩＣＴを活用した対話的特別活動の実践
富山市立楡原中学校	教諭	鈴木友之	保健体育の授業から楽しく学ぶＳＤＧｓ「17のゴール」
富山県立中央農業高等学校	教諭	橋本　樹	環境教育における効果的な理科授業の在り方について
富山県立砺波工業高等学校	教諭	島　勇佑	生徒の主体性を伸ばすICTを用いた授業法についての研究
富山県立高志支援学校	教諭	棚田純平	卒業後の生活を起点とした「学び」の実現

＊令和3年度課題研究助成報告一覧

	学　校　名	職　名	氏　名	研　究　課　題
1	朝日町立さみさと小学校	教　諭	島　　あやめ	目的や相手意識をもつ調査活動や書く活動に取り組むことができる教師の働きかけ
2	朝日町立あさひ野小学校	教　諭	鹿　熊　康　平	自分の考えをもち、共に学び合うことができる授業づくり
3		教　諭	清　水　颯　太	児童一人一人の考えを引き出すための教師の手立て
4	入善町立黒東小学校	養護教諭	浜　田　沙　樹	主体的に健康な生活を実践していく児童の育成
5		教　諭	能　登　成　美	思いや願いの実現に向けて探究する子供の育成
6		教　諭	山ノ下　千　佳	思いや願いの実現に向けて探究する子供の育成
7	入善町立飯野小学校	教　諭	勝　田　　舞	ペアやグループ学習を通して、一人一人が分かる指導の工夫
8		教　諭	上　島　康　平	児童の学び合いを促す話合い活動の工夫
9		教　諭	大　嶋　杏　奈	「できる」「分かる」授業の工夫
10		教　諭	西　郷　龍　真	児童一人一人の考えを深め、みんなで共有する授業の工夫
11	入善町立上青小学校	養護教諭	桑　畠　麻　美	心身ともに健康な生活を自ら実践する児童の育成
12	入善町立入善小学校	教　諭	笠　原　望　生	多様な考え方を引き出し、主体的な学び合いを促す指導の工夫
13		教　諭	寺　﨑　和　也	学習活動等におけるタブレット端末の活用
14		教　諭	森　田　美　穂	主体的な学び合いを促す指導の工夫
15		教　諭	村　井　美　里	自分の思いや考えをもち関わり合いながら学ぶ児童の育成
16	入善町立ひばり野小学校	養護教諭	村　中　美　智	心身ともに健康な児童の育成を目指して
17		教　諭	上　田　芳　史	GIGAスクール構想における一人一台端末を有効に活用する児童の育成
18	入善町立桃李小学校	教　諭	本　村　淳　子	学習意欲を促す指導過程の工夫
19		教　諭	横　田　智　哉	学習意欲を促す指導過程の工夫
20		教　諭	能　村　美　悠	学習意欲を引き出す指導過程の工夫
21	黒部市立中央小学校	教　諭	佐　藤　亜　耶	社会科における、体験的な活動を活かした指導の工夫
22		教　諭	吉　江　純　菜	肯定的な気持ちの交流が生まれる授業
23		教　諭	能　登　花　織	国語科における話す力・聞く力の育成を目指す指導の工夫
24		教　諭	小　川　陽　平	タブレット端末を活用した社会科授業の工夫
25		教　諭	鍛　治　太　成	「認める」「励ます」I messageを生かした学級経営
26		教　諭	魚　津　知　里	一人一人のよさを伸ばす授業の工夫
27		教　諭	大　島　　円	「かたつむり」の曲に豊かに関わるための工夫
28		教　諭	髙　見　実　希	算数科におけるユニバーサルデザインを活用した指導の工夫
29		教　諭	荒　川　佳　帆	国語科における「ペア学習」を生かした授業実践
30	黒部市立宇奈月小学校	養護教諭	津　幡　洋　子	ゲームやインターネットが心身に与える影響を知り、主体的にメディアコントロールに取り組む子供の育成
31		教　諭	笹　原　葉　月	子供が見方・考え方を働かせるための学習過程や場の工夫
32		教　諭	野　村　侑　希	関わり合いを通して考えを深める学習過程や場の工夫
33	魚津市立星の杜小学校	教　諭	宮　﨑　勇　斗	確かな学力を身に付け、主体的に学び合う児童の育成
34		教　諭	西　村　幸　柚	発表意欲を高めるための工夫
35		教　諭	扇　谷　元　基	モラルジレンマを通した、考え議論する道徳教育について
36		教　諭	宮　部　亜　弓	どの子も「できた」「分かった」を実感できる授業を目指して
37		教　諭	沼　田　美　咲	特別支援学級における「分かる」「できる」喜びを実感し、学びを深めるための支援の工夫
38	魚津市立よつば小学校	教　諭	十　松　奈　未	「分かる」「できる」を実感できる授業づくり
39		教　諭	松　下　真　歩	一人一人が自分の思いや考えを表現し、認め合う学級づくり
40		教　諭	真　野　義　晴	誰とでも仲良く関わり合い、学び合える学級づくり

	学　校　名	職　名	氏　名	研　究　課　題
41	魚津市立清流小学校	教　諭	大　森　玲　央	分かる喜び、学ぶ楽しさを味わいながら確かな学力を身に付ける子供の育成
42		教　諭	難　波　　情	分かる喜び、学ぶ楽しさを味わいながら主体的に学ぶ子供の育成
43		教　諭	松　田　恵里佳	分かる喜び、学ぶ楽しさを味わいながら確かな学力を身に付ける子供の育成
44		教　諭	河　内　美　里	わかる喜び、学ぶ楽しさを味わいながら主体的に学ぶ子供の育成
45		教　諭	高　村　達　也	分かる喜び、学ぶ楽しさを味わいながら主体的に学ぶ子供の育成
46	魚津市立道下小学校	教　諭	川　原　美　冬	児童が「やりたい」「考えたい」と思える授業の工夫
47		教　諭	猿　倉　　薫	自分の思いや考えを表現する力、互いに伝え合う力を高める授業の実践
48		教　諭	丹　保　慧　紀	主体的に学び合い、考えを深めていく授業づくり
49		教　諭	高　橋　梨　奈	一人一人が自分の思いや考えを表現できるようにするための支援について
50	滑川市立寺家小学校	教　諭	小　泉　　遥	ICTを活用して、仲間と学び合い、学習を進める子供の育成
51		教　諭	寺　崎　綾　乃	共に学び合い、自分の考えに自信をもつ子供の育成
52	滑川市立田中小学校	教　諭	武　田　佳　樹	理科における深い学びを生み出す教材開発
53		教　諭	魚　住　志　貴	子供たちの読みの力を育てるための学習指導の向上を目指して
54		教　諭	狐　塚　三紀子	既習事項を活用し、文章問題を解くための基礎学力の定着
55	滑川市立東部小学校	教　諭	牧　本　恭　代	友達の考えと関わりながら、自分の考えを広げたり深めたりする指導の工夫
56		教　諭	青　木　茉　奈	子供たちの興味・関心を高めるような単元構想や課題提示の工夫
57		教　諭	小　里　卓　己	国語科「やまなし」における話合い活動の収束の仕方について
58	滑川市立北加積小学校	教　諭	丸　本　　瞳	小学校理科、科学の時間における資質・能力を育む「深い学び」を目指して
59		教　諭	森　田　裕　介	小学校理科、科学の時間における資質・能力を育む「深い学び」を目指して
60	滑川市立東加積小学校	教　諭	中　澤　祥　恵	課題に対して多角的に考え、選択・判断するための授業の工夫
61		教　諭	寺　井　　涼	課題に対して多角的に考え、意欲的に自分の考えを追究できるための授業づくり
62	滑川市立南部小学校	教　諭	福　島　菜乃子	子供たちの実生活や既習を生かした学習展開の工夫
63		教　諭	酒　井　佑　介	多様な思考の関わらせ方の工夫
64		教　諭	笠　原　早　紀	主体的・対話的に学び合い、考えを深めていく子供の育成
65		教　諭	島　谷　怜　佑	主体的・対話的に学び合い、考えを深めていく子供の育成
66		教　諭	飯　野　真　由	主体的・対話的に学び合い、考えを深めていく子供の育成
67	滑川市立西部小学校	教　諭	芦　田　幸　華	子供たちが主体的に関わり合い、学びを深めていくための支援の在り方
68		教　諭	藤　澤　舞　奈	子供たちが関わり合い、主体的に学びを深めていくための支援の在り方
69		教　諭	中　田　和　帆	豊かに運動に取り組み、動きを高める子供の育成
70		教　諭	谷　口　結　香	グループ学習を通して、子供の自己調整力を高めるための支援の在り方
71	立山町立立山北部小学校	教　諭	布　一　優美子	自分の思いを表現しながら、音楽と豊かに関わろうとする子供の育成
72		教　諭	寺　林　誠　大	自分の考えをもち、主体的・協働的な学びを促すための単元構想の工夫
73	立山町立立山中央小学校	教　諭	加　茂　峻　輔	自分の学びや自分の成長について実感することができる振り返りの工夫
74		教　諭	大　浦　　匠	子供の思考を広げ、深めるための板書と板書計画
75		教　諭	西　尾　愛　花	一人一人の子供が「分かった!」を実感するための、ICT機器を活用した視覚的な支援の工夫
76		教　諭	森　　友　紀	子供一人一人が願いをもって学習に取り組むための工夫
77	舟橋村立舟橋小学校	教　諭	中　田　早　紀	思考と表現を楽しみながら、学習意欲を持ち続けられる授業展開の工夫
78		教　諭	正　水　　栞	児童が主体的に考えるための場の工夫
79		養護教諭	千　代　ももこ	校内事故の防止における組織的な取組と養護教諭の役割
80	富山市立針原小学校	教　諭	加　藤　綾　乃	低学年における1人1台端末の活用実践
81		教　諭	井　村　友里乃	仲間と共に、意欲的に学習に取り組む子供の育成を目指して
82	富山市立浜黒崎小学校	教　諭	内　山　寛　弥	学びを深める環境づくりと単元構成の工夫

	学　校　名	職　名	氏　名	研　究　課　題
83	富山市立浜黒崎小学校	教　諭	一　守　　愛	子供たちが多角的･多面的に考えられるための指導の在り方
84		教　諭	藤　根　絵　美	子供たちが友達と関わりながら学びあうための学習指導の工夫
85	富山市立浜黒崎小学校松風分校	教　諭	湯　口　佳　穂	友達のよさを認め合い、共に学び合う子供の育成
86	富山市立大広田小学校	教　諭	柳　瀬　　亮	友達の意見を聞き、考えを深め合う子供の育成
87		教　諭	藤　元　茉　南	言葉の力を高め、考えを深めていく子供の育成
88		教　諭	村　西　　司	主体的に言語活動に取り組む子供の育成を目指して
89		教　諭	金　野　美　咲	友達との関わりを通して、自分の考えを深めていく子供の育成
90		教　諭	太　田　凪　紗	豊かな経験を通して自分の考えや思いをもち、表現していく子供たちの育成をめざして
91	富山市立豊田小学校	教　諭	中　松　静　花	主体的に学び、友達との対話を通して学びを深めるための授業づくり
92		教　諭	馬　渕　愛　弥	思いや願いをもって表現する子供の育成を目指して
93		教　諭	大久保　翔　太	互いを認め合い、関わり合いながら共に学びを深めるために
94		教　諭	平　山　結　貴	考える楽しみ、伝え合う楽しみを実感できる授業づくり
95		教　諭	田　中　みのり	子供の自尊感情を高める学級活動の授業実践
96		教　諭	田　中　仁　郭	子供の願いや考えを想定し、習得･活用･探究場面を想定した単元構想
97		教　諭	奥　沢　綾　香	歴史的事象に興味をもち、話し合い、多角的に考える社会科の指導
98		教　諭	嶋　　拓　哉	互いの思いを聞き合いながら学習する子供の育成を目指して
99		教　諭	荒　城　菊　乃	自分の考えをもち、関わり合いながら表現できる子供の育成を目指して
100		教　諭	宮　部　成　矢	一人一人が考えをもち、伝え合うことができる子供の育成
101		教　諭	水　口　沙也加	思いや考えを伝え合うことができる子供の育成を目指して
102		教　諭	清　水　遼　大	自分の考えを進んで発言できる子供の育成
103		教　諭	山　﨑　公　稀	関わり合いながら高め合う子供の育成
104	富山市立四方小学校	教　諭	藤　田　智　子	子供たちが主体的に学習に取り組む授業づくり
105	富山市立八幡小学校	教　諭	草　島　あさひ	学級全体で達成感を得るための活動の工夫
106		教　諭	福　田　ゆ　り	生活をよりよくする家庭科指導のあり方
107	富山市立草島小学校	教　諭	西　村　京　香	一人一人が自分の考えをもち、主体的に関わり合いながら考えを深められる子供の育成
108		教　諭	網　谷　夏　実	自分の考えを大切にし、主体的に学ぼうとする子供の育成
109		教　諭	村　井　　展	主体的に取り組み、学びをくらしに生かすことができる子供の育成
110		教　諭	中　島　彩　香	一人一人が自分の考えをもち、伝え合うことを通して、考えを深め合うことができる授業を目指して
111	富山市立倉垣小学校	教　諭	倉　橋　萌　子	ICT機器を活用して、仲間と関わり合いながら主体的に課題解決に取り組む子供の育成
112		教　諭	堺　　明　希	自分の考えをもち、友達と関わり合いながら学ぶ子供の育成
113		教　諭	大　塚　　哲	子供たちが関わり合い、思考の深まりや広がりを実感できる授業の工夫
114	富山市立新庄小学校	教　諭	細　川　清　華	課題や問いに対して自分の考えをもったり深めたりすることができる授業づくり
115		教　諭	水　野　晴　香	友達の話を聞き、つなげて話そうとする子供の育成
116		教　諭	齊　藤　康　平	友達の考えと比べながらよく聴き、自分の考えを進んで話す子供の育成
117		教　諭	上　野　友里愛	児童が外国語を用いて生き生きとコミュニケーションを図ろうとする授業づくり
118		教　諭	田　畠　康　史	対話を通して子供の思いを引き出し、「分かった」、「できた」が実感できる授業づくりの工夫
119		教　諭	舘　森　沙　和	筋道立ててわかりやすく説明するための、学び合いの場の工夫
120		教　諭	大　川　祐　佳	自分の思いや考えをもち、関わり合いながら学びを深める授業づくり
121		教　諭	竹　腰　彩　美	自分の思いや考えを豊かに表現し、友達と学び合える授業づくり
122	富山市立藤ノ木小学校	教　諭	渡　邉　奈緒子	子供たちが意欲的に取り組み、自分の思いを表現するための授業の工夫
123		教　諭	寺　坪　美　穂	一人一人が主体的に学習し、基礎的･基本的な力の習得を図る授業の工夫
124		教　諭	金　山　恭　平	子供一人一人が学習に意欲的に取り組み、身に付けた力を活用しながら考えを深める授業の工夫

	学　校　名	職　名	氏　名	研　究　課　題
125	富山市立藤ノ木小学校	教　諭	中　山　朋　音	仲間の考えを聞き、自身の考えを深める子供の育成を目指した一人一台端末を取り入れた学習
126		教　諭	水　口　凌　哉	自己の生活を振り返り、互いに認め合い、よりよい生活や人間関係を築くことのできる学級経営の工夫
127		教　諭	横　山　友　香	互いの思いや考えを尊重し、主体的･協働的に考え取り組む子供を育成するための学級経営の工夫
128	富山市立広田小学校	教　諭	岩　本　加　奈	関心をもって聞き、多様な考えを認め合う子供の育成
129		教　諭	中　里　英　恵	達成感や充実感が実感でき、意欲的に学習に取り組むことができる授業
130		教　諭	牧　野　圭　佑	友達の意見を聞き自分の考えを深められる授業づくり
131	富山市立水橋西部小学校	教　諭	定　岡　彩　香	子供たちが自ら作りあげる学級経営について
132		教　諭	風呂谷　淳　史	関わりを大切にして、主体的に学ぶ子供の育成
133	富山市立水橋東部小学校	教　諭	中　川　瑞　菜	異学年の仲間と関わり合い、学びを深める子供の育成
134		教　諭	水　上　瑞　紀	一人一人が課題意識をもち、分かる喜びを実感できる指導の在り方
135	富山市立三郷小学校	教　諭	赤　塚　雅　斗	一人一人が居心地がよいと感じられる学級経営
136		教　諭	岩　野　絢　斗	一人一人が自分の考えをもち、表現できる授業の構想
137		教　諭	木　村　祐　希	子供が意欲的に考えられる学習過程の工夫
138		教　諭	遠　藤　理　沙	子供が問題意識をもち、意欲的に追究していく支援の在り方
139	富山市立新庄北小学校	教　諭	廣　野　かおり	居心地のよい学級づくりを目指して
140		教　諭	浜　浦　春　花	ユニバーサルデザインを目指した授業づくり
141		教　諭	荒　井　優弥花	必要感を高め、習得すべき内容を明らかにする教材の活用
142		教　諭	滝　本　浩　希	子供同士の関わりを大切にし、一人一人が活躍できる授業づくり
143		教　諭	新　田　一　咲	文章全体を捉えながら説明文を読むための指導の工夫
144		教　諭	老　田　春　佳	子供たちの発言やつぶやきを生かした問いづくりの工夫
145	富山市立堀川小学校	教　諭	長谷川　仁　義	身体全体を使って造形活動に取り組むことで、主体的に学習する子供の育成
146		教　諭	伊　藤　千　尋	よりよく生きるための基盤となる道徳性を育む子供の育成を目指して
147		教　諭	杉　本　茉　由	必要感の高まりから、学習の本質に迫る子供の育成を目指して
148		教　諭	森　田　みはる	生き生きと運動に取り組む子供たちの姿を求めて
149		教　諭	太　田　聖　久	子供が主体的に学習するための授業づくり
150	富山市立堀川南小学校	教　諭	河　原　幸　佑	一人一人が伸びる指導･支援の在り方
151		教　諭	田　尻　南　歩	主体的に活動に取り組み、一人一人が輝ける学級づくり
152		教　諭	堀　　芳　聡	技能の高まりを実感し合える手立て
153		教　諭	中　田　有　花	笑顔と思いやりあふれる温かい学級づくり
154		教　諭	谷　口　　悠	自分の考えを大切にしながら他者を認め合う学級づくり
155		教　諭	川　瀬　具　視	一人一台端末を活用した話合いを目指して
156		教　諭	中　野　明　美	一人一人が生き生きと活動し、互いのよさを認め合える学級を目指して
157		教　諭	鶴　岡　綜　一	学級会における論点整理のための板書の工夫について
158		養護教諭	松　井　恵理香	メディアコントロールへの支援の在り方
159	富山市立山室小学校	教　諭	松　森　璃　乃	主体的に問題解決に取り組み、互いに学びあう子供の育成
160		教　諭	立　野　健　翔	意欲をもって学習に取り組める単元構想を目指して
161		教　諭	松　岡　尚　哉	子供が主体的･協働的に学習するための工夫
162		教　諭	佐　山　　結	子供が主体的に学びに向かうための実物提示の工夫
163		教　諭	弓　部　真惟子	互いの考えを聴き合い、学び合うための手立ての工夫
164		教　諭	古　市　　健	1人1台端末を活用した、個別最適化の授業づくり
165		教　諭	定　塚　和　也	主体的･協働的な学びの実践
166	富山市立山室中部小学校	教　諭	白　崎　弘　宜	友達と協力する楽しさを味わわせる学級経営の工夫

	学　校　名	職　名	氏　名	研　究　課　題
167	富山市立山室中部小学校	教　諭	東　昂　平	主体的･対話的に考えを深めていくための学習活動の工夫
168		教　諭	石　原　賢　祐	子供同士が考えを聞き合う中で多様な考え方に気付き、考えや視野を広げる授業づくり
169		教　諭	吉　田　文　香	分かる、できる、楽しい学習指導の工夫
170		教　諭	木　村　祐　希	自信をもって自分の考えを表現しながら学ぶ子供の育成
171		教　諭	長谷田　詩　織	自分の考えや思いをもつためのワークシートの工夫
172		教　諭	大　野　真　依	課題解決に向けて、意欲的に取り組む子供
173	富山市立蜷川小学校	教　諭	青　島　龍　平	一人一人が主体的に問題解決に向かうための場の設定と教師の手立て
174		教　諭	角　谷　早　紀	主体的･対話的に学ぶ中で、自分の考えを広げ深めるための手立ての工夫
175		教　諭	鈴　木　龍　平	対話的に学ぶ中で、子供たちが自分の考えを広げたり深めたりするための手立て
176		教　諭	金　代　悠　輔	話合いを通して考えを深める授業を目指して
177		教　諭	岩　間　麻　里	自分の思いを豊かに表現できる子供の育成を目指して
178	富山市立太田小学校	教　諭	村　井　伸　次	どの子も分かる･できる授業づくり
179		教　諭	若　田　翔　暉	一人一人のよさを認め、高め合う子供の育成
180		教　諭	松　　祥　子	主体的･対話的に取り組み、学びを自らのくらしに生かす子供の育成
181		教　諭	山　崎　ちはる	主体的･対話的に取り組み、学びを自らのくらしに生かす子供の育成
182		教　諭	飛　田　順　平	教室へ入ることを拒む児童への対応について
183	富山市立熊野小学校	教　諭	雨　宮　直　弘	一人一人が主体的に取り組む学習活動の工夫
184		教　諭	本　江　佑　衣	学ぶ楽しさを味わうことができる授業を目指して
185		教　諭	中　井　　幸	互いのよさを認め合い、のびのびと考えや思いを表現できる学級経営
186		教　諭	長　島　智　大	一人一人が互いのよさを認め合い、進んで学び合おうとする子供の育成を目指して
187		教　諭	野　崎　友　晴	関わりを大切にし、子供が学級への所属感や充実感を実感できる学級を目指して
188		養護教諭	篠　田　侑香里	自分の健康に関心をもち、主体的に健康な生活を送る子供の育成
189		臨任講師	山　本　雄　介	一人一人が互いの個性を認め、のびのび過ごせる学級経営
190	富山市立月岡小学校	教　諭	大　西　遥　海	自分の考えをもち、意欲をもって取り組むための工夫
191		教　諭	古　野　滉　大	自分の考えをもち、進んで伝え合い、聴き合いながら学び合う子供の育成
192		教　諭	阿　閉　令　奈	主体的に課題を解決するために必要な情報を活用し、他者との関わりから自分の考えを明確にする学び合い
193		教　諭	岡　崎　奏　斗	課題解決に向けて具体的に学び合うための支援の在り方
194		教　諭	石　橋　理　子	一人一人が自分の成長を実感し、楽しく学ぶことができる授業を目指して
195	富山市立新保小学校	教　諭	上　田　ありさ	意欲的に授業に取り組む学習活動の工夫
196		教　諭	小　杉　有　希	互いのよさを認め、のびのびと自分の考えを表現しながら学び合う子供の育成
197		教　諭	小　澤　昭　吾	聴き合いを通して、学びを深める子供の育成
198		教　諭	森　　智　遥	仲間や自分のよさを認め合い、仲間と生き生きと活動する子供の育成
199	富山市立大沢野小学校	教　諭	渡　利　哲　朗	よりよい学級を目指して、主体的に取り組む子供の育成
200		教　諭	西　森　美　桜	主体的に音楽づくりに取り組む子供を目指して
201		教　諭	福　沢　志　歩	多面的な思考を支える二段階発問
202		教　諭	山　崎　加　奈	仲間と関わり合いながら主体的に活動する「おえかきプロジェクト」の実践
203		教　諭	横　窪　愛　弓	主体的に学ぶ子どもの育成を目指して
204		教　諭	藤　井　李　保	主体的な活動を促す相互評価の在り方
205		教　諭	坂　木　裕　一	主体的に学習に取り組む子供の育成
206		教　諭	小　林　ゆ　り	子供が分かる喜びを感じられる授業づくり
207		教　諭	山　村　ももな	一人一人が思いをもち、意欲的に学習に取り組む子供の育成
208		教　諭	市　川　真亜久	自らよりよい学級をつくっていこうとする子供の育成

	学　校　名	職　名	氏　名	研　究　課　題
209	富山市立大沢野小学校	臨任講師	北　山　　諒	子供が楽しく取り組む授業づくり
210		臨任講師	清　水　沙　紀	読書に親しむ子供の育成
211	富山市立大久保小学校	教　諭	綱　島　斗　真	主体的に学習に取り組む子どもの育成
212		教　諭	中　川　功太郎	主体的に考え、仲間と共に学び合う授業づくり
213		教　諭	柳　田　朱　音	自分の思いや考えを表現し、主体的に学び合う子供の育成
214		教　諭	横　井　里　南	児童の自己肯定感を高める、学級経営の工夫
215		教　諭	辻　本　理　紗	子供たちが自分の考えをもち、伝え合うことができる指導の工夫
216	富山市立船峅小学校	教　諭	山　本　将　之	ICTを活用した主体的に学び合うことのできる授業の工夫
217	富山市立上滝小学校	教　諭	中　野　裕美子	子供たちが思いやりをもち、互いに認め合おうとする学級づくり
218	富山市立大庄小学校	教　諭	木　下　貴　文	アナログとデジタルが両立した授業の在り方
219		教　諭	小　川　圭　介	全ての子供が意欲的に取り組める図画工作科の授業を目指して
220		教　諭	西　田　莉　彩	相手の気持ちを考え、自分にできることを考えられる子供の育成
221		教　諭	野　島　朱　音	自分の考えをもって話合い活動に取り組むことのできる子供の育成
222		教　諭	茂　住　絵莉菜	児童が意欲的に学習に取り組む教師の支援の在り方
223		養護助教諭	植　野　未　久	主体的に健康な生活を送る子供の育成を目指して
224		教　諭	按　田　栞　奈	仲間のよさを見付け、自分に生かそうとする子供の育成
225		教　諭	原　田　歩　早	健康な生活に関心をもち、主体的に実践しようとする子供の育成
226	富山市立神通碧小学校	教　諭	武　部　光　志	子供が互いの考えを分かり合い、認め合うための教師の手立て
227		養護教諭	小　澤　　彩	自分の生活を振り返り、健康的な生活を送ろうとする子供の育成
228		教　諭	佐　伯　千　歌	子供が互いの考えを分かり合うための教師の手立て
229		教　諭	安　田　汐　里	自他の考えのよさに気付き、自分の考えを深めるための教師の手立て
230	富山市立速星小学校	教　諭	前　田　菜　摘	一人一人が互いの考えを聴き合い高め合える学級経営
231		教　諭	蒲　田　智　一	一人一人が主体的に学び、互いに認め合う学級づくりのための教師の支援
232		教　諭	嶋　津　弘　文	子供たちが主体的･対話的に話し合うための教師の手立て
233		教　諭	高　木　優　希	互いの考えを理解し合い、学び合いを大切にする子供の育成
234		教　諭	鏡　　理彩子	一人一人が相手の気持ちを考え、分かり合う学級づくりのための教師の支援
235		教　諭	岡　田　真　希	一人一人のよさを大切にし、互いに認め合いながら、主体的に問題を解決するための手立て
236		教　諭	寺　崎　雄一郎	一人一人が考えをもち主体的に取り組む工夫
237		教　諭	井　上　茅　優	主体的に伝え合う活動を通して、問題解決に取り組むための教師の支援
238		教　諭	相　川　　慧	主体的･対話的に学習し、互いのよさを理解し合える学級経営
239	富山市立鵜坂小学校	教　諭	小　林　詠　美	児童の考えが深まる授業の工夫
240		教　諭	吉　井　　翔	理科の学習を通し、考えを深めるためのペア･グループ活動の在り方
241		教　諭	桑　野　穂　子	語彙を増やす国語科の学習
242		教　諭	赤　尾　純　平	Chromebookを活用した学習の在り方
243		教　諭	松　村　秀　哉	子供が他と関わり合いながら、共に学び合う授業を目指して
244		教　諭	森　　隼　人	子供同士の関わりを増やす授業づくり
245		教　諭	竹　村　勇　希	タブレットパソコンを使用し、子供の考えを深める指導法の工夫
246		教　諭	早　﨑　菜　美	学ぶ楽しさを感じながら学習に取り組む子供を育むための支援の在り方
247		教　諭	小　林　由　莉	伝え合い、学び合い、主体的に考える子供の育成
248		養護教諭	髙　木　実　空	生活に運動を取り入れようとする子供の育成
249		教　諭	岩　黒　美　菜	子供たちの学習意欲を高める学習活動の工夫
250		教　諭	廣　瀬　謙太郎	子供たちが主体的に学習に取り組むための手立てについて

	学　校　名	職　名	氏　名	研　究　課　題
251	富山市立朝日小学校	教　諭	井　川　真　穂	自他の考え方の違いやよさに気付き、自らの考えを深める話合いの在り方
252		養護教諭	梶　尾　琴　子	自らの健康課題を見付け、よりよい生活をしようとする子供の育成
253	富山市立宮野小学校	教　諭	水　上　颯　斗	仲間の考えを聴き合い、自己の考えを深められる授業を目指して
254		教　諭	中　島　愛里沙	関わり合って学ぶ自立活動科を目指して
255		教　諭	梅　本　　綾	主体的･対話的に学習に取り組み、自らの変容を実感できるような授業づくり
256		教　諭	島　倉　拓　朗	仲間の考えを聴き合い、自己の考えを深め、変容に気付くことができる子供の育成を目指して
257		教　諭	宮　田　有　香	仲間の考えを聴き合い、自分の考えに自信をもったり、考えを深めたりする子供の育成
258		養護教諭	瀬　野　ひかり	感染症に関する正しい知識を身に付け、自ら予防行動をとるための手立ての工夫
259	富山市立古里小学校	教　諭	濱　　健	子供が互いに学び合う授業づくり
260		教　諭	西　澤　拓　哉	主体的に学習に取り組む子供の育成
261		教　諭	竹　内　拓　哉	一人一人が自分の考えをもち、表現できる子供の育成
262	富山市立音川小学校	教　諭	山　崎　卓　也	児童がICTを効果的に用いた授業づくりの在り方
263		教　諭	吉　田　　光	子供たちが意欲をもち、思いや考えを伝え合う授業づくり
264		教　諭	清　水　美　帆	自分の経験を基にして課題に取り組む授業
265		教　諭	大　浜　　惇	自分の考えを表現できる授業
266	富山市立山田小学校	教　諭	藤　井　千　紘	道徳的価値の理解を自分との関わりの中で深め、主体的に学び合う子供の育成
267	富山市立八尾小学校	教　諭	永　原　枝里子	大切な仲間と一緒に伸びる学級づくり
268		教　諭	堀　部　政　弘	自分の考えに自信をもち、生き生きと学ぶ子供を目指して
269		教　諭	野　村　茉　由	想像したことを伸び伸びと表現できる子供の育成
270		教　諭	早　崎　和　基	互いに認め合い、励まし合いながら学びを深める子供の育成
271	富山市立保内小学校	教　諭	柳　樂　真　吾	子供たちの追究意欲をかき立てる指導の工夫
272		教　諭	清　水　優　作	自分の考えに自信をもち、進んで話し合う子供の育成
273		教　諭	畑　佐　知　弘	仲間と共に、意欲的に学習に取り組む子供の育成を目指して
274		教　諭	宮　川　　彩	一人一人が自分の考えをもち、表現できる子供の育成
275	富山市立五福小学校	教　諭	土　田　早　紀	互いの意見を尊重し合い、共に学ぶ楽しさを実感できる授業を目指して
276		教　諭	茂　住　真　由	よさを認め合うことができる学級づくり
277		教　諭	牧　野　健　吾	互いに学び合い、高め合う学級集団づくり
278	富山市立神明小学校	教　諭	太　田　千　瑛	主体的･協働的に学ぶ子供の育成
279		教　諭	若　林　良　輔	主体的･協働的に学ぶ子供の育成
280		教　諭	小　島　春　奈	主体的･協働的に学ぶ子供の育成
281		教　諭	池　田　脩　人	主体的･協働的に学ぶ子供の育成
282	富山市立呉羽小学校	教　諭	城　石　雄　飛	子供たちから生まれる問いを生かし、主体的に関わり合える授業を目指して
283		教　諭	茂　木　伸太郎	教材･教具を工夫し、子供たちが主体的に考える授業作りを目指して
284		教　諭	島　崎　彩　音	自他の考えのよさを認め合い、自信をもって考えを伝えられる子供の育成を目指して
285		教　諭	筏　井　啓　介	一人一人が自ら課題をもち、子ども同士が願いや思いを共感できる授業を目指して
286		教　諭	旅　家　美　晴	互いの考えのよさを感じながら、主体的に学ぶための支援
287		教　諭	天　野　夏　瑞	一人一人が考えを自分なりに表現し、伝え合うことのできる子供の育成を目指して
288		教　諭	菊　地　博　之	自分の考えをもち、友達と関わり合いながら、児童の思考を深めるための具体的な手立て
289		教　諭	石　田　真奈美	一人一人が自分の考えをもち、主体的に相手に分かりやすく伝え合うことができる支援のあり方
290	富山市立長岡小学校	教　諭	五十嵐　彩　希	子供たちが主体的に学習に取り組みたくなる授業を目指して
291		教　諭	篠　川　賢　介	子供たちが主体的に学習に取り組む授業づくり
292		教　諭	森　野　朱　莉	主体的･対話的に学ぶ子供の育成を目指して

	学　校　名	職　名	氏　名	研　　究　　課　　題
293	富山市立寒江小学校	教　諭	石　垣　風　海	子供たちが考えを広げ、深めていく話合い活動を目指して
294		教　諭	前　馬　裕　樹	主体的･対話的に学習に取り組む子供の育成
295	富山市立老田小学校	教　諭	北　島　聖　也	国語科における自分の考えを広げたり、深めたりするための話合いの在り方
296		教　諭	藤　田　有　実	学ぶことの楽しさを感じて、意欲的に学ぶ子供の育成を目指して
297		教　諭	波　間　拓　己	知的障害学級における学習の定着を図る指導の工夫
298	富山市立古沢小学校	教　諭	江　守　拓　志	子供たちが興味をもって主体的に学習したり、周囲の人と関わったりするための効果的なICT機器の活用について
299	富山市立池多小学校	教　諭	佐　伯　真　栄	子供たちが、互いの考えや取組のよさを理解しながら、関わり合って高め合う授業の在り方について
300	富山市立芝園小学校	教　諭	臼　澤　真　優	聴き合うことや表現することを楽しみながら、自分の思いや願いを確かにしていくことができる単元構想の工夫
301		教　諭	中　島　雅　国	主体的に問題解決し、社会的事象を多角的に考えるための関わり合いの工夫
302		教　諭	黒　川　麻衣子	一人一人が思いや願いを膨らませながら、主体的に対象や仲間と繰り返し関わり合うための支援の工夫
303		教　諭	田　辺　　萌	自分の思いや考えを表現したり、友達の話を聞いたりすることができる学習形態や支援方法の工夫
304		教　諭	古　谷　友　宏	問題解決に主体的に取り組み、考えを深めるための場の設定の工夫
305		教　諭	後　谷　良　大	一人一人が学習の喜びを感じることができるよう個に応じた継続した支援の充実
306	富山市立西田地方小学校	教　諭	二　木　貴久子	自分の思いや考えをもち、互いに関わり合うことで、自分の考えを伝えたり友達の考えのよさを認めたりしながら学びを深める子どもの育成
307		教　諭	早　苗　桃　子	自他の思いを大切にし、学びを深める子どもの育成
308		教　諭	柳　川　佳　子	人との関わり合いの中で進んで学習に取り組む子どもの育成
309		教　諭	大　澤　京　子	自分らしさを発揮して、生き生きと活動する子どもの育成を目指して
310	富山市立中央小学校	教　諭	小　幡　拓　馬	子供が1人1台端末を活用して追究したり関わり合ったりするための学習過程の工夫
311		教　諭	岩　﨑　卓　巳	子供たちが主体的に学び合うための学習の在り方の工夫
312		教　諭	上　嶋　壮　太	友達と学び合うことのよさを実感する体育科の授業を目指して
313		教　諭	一　間　理　沙	一人一人が自分の考えや思いをもち、互いに学び合う授業の工夫
314		教　諭	新　國　　茜	主体的、対話的に学びながら「生きる力」を身に付ける子供の育成
315		教　諭	徳　永　裕　樹	主体的、対話的に学びながら「生きる力」を身に付ける子供の育成
316	富山市立柳町小学校	教　諭	岩　黒　拓　人	作業的･体験的な活動を通して、割合や比に対しての関心を高め、豊かな感覚をもつことができる教材や学習展開の工夫
317		養護教諭	長　越　由　莉	子供のウェルビーイングの実現を目指す五感への働きかけ
318		教　諭	番　匠　拓　也	低学年での一人一台端末活用スキルの向上を目指して
319		教　諭	真　島　大　輔	一人一人が主体的に問題解決に取り組むための指導の工夫
320		教　諭	中　田　悠　揮	体つくり運動におけるスポーツリズムトレーニングの効果的な実践
321		教　諭	大久保　里　奈	気持ちをコントロールしながら、友達と活動する楽しさが実感できる授業の在り方
322	富山市立奥田小学校	教　諭	梅　本　和　樹	教材や仲間と主体的に関わり、学びを楽しむ子供の育成を目指して
323		教　諭	中　村　麻　裕	伝えること、聞くことを通して、コミュニケーションを楽しむ子供の育成を目指して
324		教　諭	池　上　舞　子	聴き合うことを楽しみ、全ての子供が学びに向かう授業を目指して
325		教　諭	大　西　　凜	子供同士が達成感を共有できる授業を目指して
326	富山市立東部小学校	教　諭	綿　野　真　子	共同･協働のよさを感じる授業の実践
327		教　諭	石　川　遥　裕	子供たちが自分の考えを伝え合うための支援
328		教　諭	小　幡　真　衣	主体的に学習に取り組む子供を目指して
329		教　諭	安　部　浩　庸	一人一人の疑問と考えを引き出す授業の工夫
330		教　諭	伊　藤　百　花	子供たちが楽しく学び合える音楽の授業の工夫
331		教　諭	永　瀬　由　華	主体的に学び合う授業の工夫
332		教　諭	田　村　優　奈	聴き合い、伝え合って自ら学ぶ子供の育成を目指して
333	富山市立光陽小学校	教　諭	木　村　真　樹	いろいろな感覚を活用し、遊びを生み出す子供の育成
334		教　諭	伊　藤　沙　織	生き生きと　音楽を楽しむ子供の育成

	学　校　名	職　名	氏　名	研　究　課　題
335	富山市立光陽小学校	教　諭	藤　林　健　悟	主体的に学習に取り組む子供の育成
336		教　諭	荒　井　莉　奈	友達の多様な考えに触れ、協働的に学ぶ子供の育成
337		教　諭	吉　田　広　輝	ICTを活用し、主体的に学ぶ子供の育成
338		教　諭	中　村　優　良	友達と関わり合いながら、主体的に問題解決しようとする子供の育成
339	射水市立放生津小学校	教　諭	内　藤　智　美	共に高め合い、学び合う子供の育成
340		教　諭	渡　辺　梨　聖	主体的に学び合う子供の育成
341	射水市立堀岡小学校	教　諭	三　辺　将　大	主体的・対話的に学びを楽しむ子供の育成
342		教　諭	津　田　泰　希	主体的・対話的に学びを楽しむ子供の育成
343		教　諭	加　治　千　恵	主体的・対話的に学びを楽しむ子供の育成
344		教　諭	浜　谷　ひかり	主体的・対話的に学びを楽しむ子供の育成
345	射水市立東明小学校	教　諭	三　谷　和可奈	一人一人が分かる喜びを感じることができる指導の在り方
346		教　諭	磯　部　光　志	仲間と共に学び合う子供の育成
347		教　諭	荒　木　　弥	心も体も健康で元気な子供の育成を目指して
348		教　諭	山　崎　彩　佳	目当てをもって健康な体づくりに取り組む子供の育成
349	射水市立塚原小学校	教　諭	堺　井　真　由	「できた」「楽しい」を味わい、共に学び合う子供の育成
350	射水市立小杉小学校	教　諭	上　田　純　平	ICT機器を活用し主体的・対話的に学んでいく子供の育成をめざして
351		教　諭	輪　達　光　司	言葉の意味を確かに捉え、言葉のもつよさを実感する児童の育成
352		教　諭	針　山　美　稀	ICT機器を活用し、主体的に学んでいく子供の育成をめざすには
353		教　諭	道　谷　俊　輝	説明文から大事な情報を読み取れるようにする手立ての工夫
354		教　諭	日　高　　茜	子供の主体的な学習活動を引き出すためにどのような支援が必要か
355		教　諭	八　島　志　歩	知識・理解を高める教師の支援はどうあればよいか
356		教　諭	竹　島　貴　子	自己肯定感を高め、意欲的に学習に取り組むための支援の在り方
357		臨任講師	安　養　　隼	見通しをもち、児童一人一人が主体的に活動できる授業づくり
358		教　諭	髙　井　尚　子	問題を自分事としてとらえ主体的に学んでいく子供の育成
359	射水市立金山小学校	教　諭	島　　英　浩	よりよい生活や人間関係を築こうとする子供の育成
360	射水市立歌の森小学校	教　諭	大　西　　薫	タブレット端末を活用した授業の工夫
361		教　諭	木　村　友　也	児童のやる気を引き出す理科の授業の工夫
362		教　諭	佐々木　友　那	児童主体の授業づくりの工夫
363		教　諭	一　守　詠太郎	学級目標「BEST」を目指した学級づくり
364		教　諭	渡　辺　雄　貴	一人一人にあった支援の在り方
365		教　諭	村　中　ひかり	クラスへの所属感を高める学級活動の工夫
366		教　諭	中　山　麻　優	自信をもって自分の思いや考えを伝えられる児童の育成
367		教　諭	林　　大　登	児童一人一人の考えを生かす授業の工夫
368	射水市立中太閤山小学校	教　諭	北　　拓　也	子供たちが関わり合い、表現する力を高める授業の工夫
369		教　諭	竹　腰　友　紀	教材や人と豊かに関わり合いながら自分の思いをもち、表現する子供の育成
370		教　諭	依　田　智　美	望ましい食生活を身に付け、よりよい自分を育む活動の工夫
371		教　諭	橋　本　　誠	学級目標に向かって、子供同士が高め合う学級づくりを目指して
372	射水市立大門小学校	教　諭	青　井　真　生	伝え合いを通して、思いや考えを深める授業の工夫
373		教　諭	神　名　寛　朗	心と体の健康づくりを主体的・対話的に実践していく子供の育成
374		教　諭	佐村木　　威	「伝え合い」を通して、思いや考え深める子供の育成
375		教　諭	渋　谷　絢　子	小学校6年理科で扱う「月の満ち欠け」の理解を促す効果的な教材
376	射水市立大島小学校	教　諭	本　林　風　香	教材の読みを深めるための音読指導について

	学　校　名	職　名	氏　名	研　究　課　題
377	射水市立大島小学校	教　諭	釣　谷　祐　貴	理科における一人一人の主体的な探究を促すための指導の在り方
378	高岡市立福岡小学校	教　諭	橋　本　笑　佳	児童が楽しく主体的に学習に取り組む授業の在り方
379		教　諭	有　島　千　紘	主体的な学びにつながるユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくり
380		教　諭	向　井　幹　城	児童の学習意欲を高めることができる授業の在り方
381		教　諭	西　村　実　夏	ユニバーサルデザインの視点を取り入れた算数科の学習指導の工夫
382		教　諭	中　田　博　之	特別なニーズをもつ児童への「ポジティブ行動支援」を意識した学級経営
383		教　諭	野　見　友　希	一人一人が分かる喜びを実感できる指導の在り方
384		教　諭	東　井　一　真	児童の学習意欲を高める教師の支援の工夫
385	高岡市立横田小学校	教　諭	濵　元　大　輝	進んで挑戦し、共に高め合う児童の育成
386		教　諭	武　内　俊　輝	低学年での一人一台端末を活用した授業の工夫
387		教　諭	山　本　詩　歩	互いを認め合い、自分の考えを広げ、深めることができる児童の育成
388	高岡市立木津小学校	教　諭	亀ヶ谷　和　可	子供の自己肯定感を高め、学校生活を楽しいと感じる工夫
389		教　諭	齊　藤　綾　乃	知的障害特別支援学級における「関わり」を大切にした授業づくり
390		教　諭	茶　木　紀依子	学習意欲を高め、友達と関わり合いながら表現する子供の育成
391	高岡市立成美小学校	教　諭	屋　敷　涼　香	一人一人の所属意識を高め、協力し合う学級をつくるための工夫
392	高岡市立川原小学校	教　諭	茶　橋　涼　夏	友達と関わり合いながら、考えを深め合う子供の育成
393		教　諭	柳　澤　紗也佳	主体的に社会的事象に問い続けていく学習過程の工夫
394	高岡市立能町小学校	教　諭	林　　涼　太	友達の話をよく聴き、自分の考えを深められる児童の育成
395		教　諭	大久保　　晶	友達と関わり合いながら、進んで表現しようとする児童の育成
396		教　諭	高　野　昌　幸	「考え、議論する道徳」の実現に向けた具体的手立てについて
397		教　諭	延　澤　冴　香	友達のよさを認め合い、共に学び合う児童の育成
398		教　諭	北　川　彩　香	一人一人の違いやよさを認め合いながら、児童が主体的に活動する授業づくりの工夫
399		教　諭	尾　田　勇　哉	根拠とともに考えを表現する力を身に付けるための授業の工夫
400	高岡市立定塚小学校	教　諭	塚　田　真　由	SDGsを意識しながら生活できる児童の育成
401		教　諭	大　村　麗　奈	主体的・対話的に学び、家族の一員として生活をよりよくしようとする子供の育成
402		教　諭	杉　高　正　紀	算数科における児童用デジタル教科書の有効性について
403		教　諭	岸　野　　一	児童一人一人が考えを深め、主体的に学習する児童の育成
404	高岡市立下関小学校	教　諭	林　　優　太	主体的にコミュニケーションを図ろうとする児童の育成
405		教　諭	久　湊　愛　佳	主体的に話し合い、互いに高め合うことができる学習の工夫
406		教　諭	石　尾　誠　一	学習の見通しをもち、主体的に学ぶ児童の育成
407		教　諭	山　口　三耶子	一人一人の実態に応じた支援の在り方
408		教　諭	上　　愛　実	互いのよさや違いを認め合い、楽しく学ぶことができる児童の育成
409		教　諭	笠　原　有　真	児童の学びを助ける学習専用端末の活用の在り方
410		教　諭	石　田　佳　子	言葉の知識の定着を図るための指導法の工夫
411		教　諭	藤　田　千　里	友達と関わりながら、主体的に学ぶ児童の育成
412		教　諭	亀　井　璃　子	確かな読解力を付けるための授業の在り方
413	高岡市立野村小学校	教　諭	木　山　典　子	一人一人が安心して活動に取り組むことのできる支援の工夫
414		教　諭	橋　本　美　咲	友達と関わり合いながら、楽しんで活動する児童の育成
415		教　諭	熊　木　侑　蘭	主体的に友達と学び合う児童の育成
416		教　諭	野　原　由　衣	実感を伴った理解を深めるための指導の工夫
417		教　諭	宮　崎　完　司	互いのよさを認め、自分の考えを表現できる児童の育成
418		教　諭	松　尾　瑛　莉	互いのよさを認め合い、安心して過ごせる学級集団の育成

	学　校　名	職　名	氏　名	研　究　課　題
419	高岡市立野村小学校	教　諭	笹　林　紗　耶	友達の考えを聞いて、考えを深める児童の育成
420		教　諭	近　藤　雄　喜	他者と関わり合って活動する学級集団の育成
421		教　諭	市　村　夏菜江	自分の考えに自信をもって表現できる児童の育成
422	高岡市立古府小学校	教　諭	高　橋　明　澄	一人一台学習専用端末の効果的な活用を目指して
423		教　諭	田　所　佳　純	主体的に取り組み、共に学び合う指導の工夫
424		教　諭	北　村　麻　衣	自信をもって、自分の考えを表現するための工夫
425	高岡市立牧野小学校	教　諭	酒　元　　茜	居心地のよい学級づくり
426		教　諭	境　　優　衣	みんなで話し合い、学ぶ楽しさが実感できる授業づくり
427		教　諭	河　野　佑　介	子供が自ら進んで課題を設定し、解決へ向かうための指導と支援
428		教　諭	向　山　明　子	できる喜びを実感し、互いを認め合うための教師の働きかけ
429		教　諭	千　重　智　生	理科「自由に事象に関わることで科学的な見方・考え方を育てる授業」
430		教　諭	齋　藤　圭　吾	主体的に学ぶ児童の育成
431	高岡市立太田小学校	教　諭	養　藤　了　佑	一人一人が意欲的に学習に取り組むための学習過程の工夫
432	高岡市立南条小学校	教　諭	大　谷　絵　吏	主体的に学ぶ子供の育成
433		教　諭	福　尾　尚　久	対話的に学び、考えを深めるための指導の工夫
434	高岡市立戸出東部小学校	教　諭	渡　邉　惣一朗	学級の「ハーモニー」を目指して
435		教　諭	中　谷　実　郁	学習意欲を高める「話す、聞く」活動の工夫
436		教　諭	桶　　隆太朗	One Noteを活用した理科授業の在り方
437	高岡市立中田小学校	教　諭	村　藤　早　紀	「わかる」「できる」を積み重ね、主体的に学ぶ児童の育成
438		教　諭	小　島　杏　菜	児童一人一人の考えを尊重し、主体的に学び合う学習過程の工夫
439		教　諭	岩　﨑　貴　士	学習専用端末を効果的に活用した学習過程の工夫
440		教　諭	水　牧　里　香	情報学習端末を活用し、主体的に学ぼうとする学習過程の工夫
441	氷見市立宮田小学校	教　諭	林　　一　学	子供が「できる」「できた」を実感できる1人1台端末の活用
442	小矢部市立石動小学校	教　諭	関　口　拓　真	「分かる」「できる」楽しさを実感できる授業づくり
443		教　諭	三　輪　憲　正	「分かった」「できた」楽しいを実感できる授業づくり
444		教　諭	蒲　　愛　子	「分かる」「できる」楽しさを実感できる授業づくり
445		教　諭	野　村　拓　未	「分かる」「できる」楽しさを実感できる授業づくり
446		教　諭	澤　　由佳子	「分かる」「できる」楽しさを実感する授業づくり
447		教　諭	岩　村　瑞　希	仲間と関わり合い、運動を楽しむ子供の育成
448		教　諭	沖　田　　蓮	「分かる」「できる」楽しさを実感する授業づくり
449		教　諭	吉　田　つかさ	「分かる」「できる」楽しさを実感する授業づくり
450	小矢部市立大谷小学校	教　諭	前　馬　悠　聖	主体的に学び、考えを形成する子供の育成
451		教　諭	川　村　美　波	協働的な学びを促進させる工夫
452		教　諭	松　永　深　月	主体的に学び、考えを形成する子供の育成
453		教　諭	山　崎　泰　輝	自分の考えをより分かりやすく伝える文章力を身に付けようとする子供の育成
454	小矢部市立蟹谷小学校	教　諭	今　枝　　愛	子供が「考えたい」「伝えたい」「聞きたい」と思う授業づくり
455	小矢部市立津沢小学校	教　諭	沼　田　　健	子供が主体的に運動に取り組み、動きの高まりを実感できるマット運動の授業づくりについて
456		教　諭	丹　羽　昭　平	主体的・対話的に働きかける実践の工夫
457		教　諭	石　黒　綾　子	子供が主体的に学ぶための学習支援
458		教　諭	篠　嶋　純　花	思いや願いの実現に向けて探究する子供の育成を目指して
459		教　諭	高　川　妙　惠	共に学び、考える楽しさを味わう子供の育成
460		教　諭	嶋　田　陽　菜	共に学び、考える楽しさを味わう子供の育成

	学　校　名	職　名	氏　名	研　究　課　題
461	小矢部市立津沢小学校	養護助教諭	畑　実香子	児童が心身共に健康に育つための関わり方
462	砺波市立出町小学校	教　諭	尾　﨑　天　音	自分の考えをわかりやすく伝え、友達と考えを深めていく子供の育成
463		教　諭	西　村　芹　菜	主体的･対話的に学び、家族の一員として生活をよりよくしようと工夫する子供の育成
464		教　諭	清　水　雄　斗	主体的に社会的事象に関わり、学んだことを社会生活に生かしていく子供の育成
465		教　諭	前　野　里　依	主体的･対話的に言語活動に取り組む子供の育成
466		教　諭	中　山　唯　子	主体的･対話的に取り組み、相手と関わる力を身に付ける子供の育成
467		教　諭	荒　井　光　貴	思いや願いの実現に向けて、多様な視点から自分の課題を解決する子供の育成
468	砺波市立砺波東部小学校	教　諭	澤　田　彩　可	主体的に考え、関わり合って学びを深める授業を目指して
469		教　諭	槻　尾　瑞　希	自分の考えをもち、友達の考えと比較できるようになるための手立て
470		教　諭	前　田　　稜	子供の思いや願いを大切にし、みんなで関わり合いながら課題を解決しようとする子供の姿を目指して
471		教　諭	荒　見　真　唯	自分の考えをもち、主体的に参加できる授業づくり
472		教　諭	滋　野　　岬	子供たちが関わり合いながら学ぶ楽しさを味わうことができる授業づくり
473		教　諭	大　橋　光　貴	子供たちが「楽しい」「もっとやりたい」と感じられるICTを活用した体育科の授業づくり
474		教　諭	金　子　真　弓	音楽づくりに思いや願いをもって取り組み、豊かに表現する子供の育成
475		教　諭	牧　山　香菜子	主体的･対話的に言語活動に取り組み、読みを深める授業の工夫
476		教　諭	棚　田　千　夏	友達の考えに興味をもち、自分の思いや行動を見つめ直す子供の育成
477	砺波市立砺波北部小学校	教　諭	竹　　智　大	自ら考える力や表現する力を育成するICT機器等を使った指導
478		教　諭	畠　中　綾　奈	豊かに表現し、友達と関わりながら学ぶ子供の育成
479		教　諭	河　西　　徹	進んで活動し、友達と関わりながら学ぶ子供の育成
480		教　諭	窪　田　稔　彦	豊かに表現し、友達と関わりながら思考を深めるための教師の仕掛け
481		教　諭	西　岡　優　夏	豊かに表現し、友達と関わりながら学ぶ子供の育成
482		教　諭	竹　倉　彩　希	豊かに表現し、友達と関わりながら学ぶ子供の育成
483		教　諭	石　黒　　光	「進んで表現し、友達と関わりながら学ぶ子供」の育成を目指して
484		教　諭	宮　田　知菜実	豊かに表現し、友達と関わりながら学ぶ子供の育成
485		教　諭	坂　井　　佑	総合的な学習の時間（福祉領域）における実践の工夫
486	砺波市立庄東小学校	教　諭	中　田　果菜子	子供が学ぶ楽しさを実感する授業の工夫
487		教　諭	影　近　謙　人	自分から関わり合う子供の育成
488		教　諭	杉　山　春　佳	「自分から」問題解決に取り組もうとする子供の育成を目指して
489	砺波市立鷹栖小学校	教　諭	和多利　真　一	ICT環境の活用による授業改善の取組
490		教　諭	山　秋　千　遥	主体的･対話的で深い学びの実現のための授業改善
491		養護教諭	渡　邉　　南	コロナ禍における感染症予防について
492	砺波市立庄川小学校	教　諭	練　合　拓　人	子供が見通しをもって自力解決ができるようにするための教師の手立て
493		教　諭	原　野　友香梨	「友達と関わり合いながら自分の考えを深める子供」の育成を目指して
494		教　諭	篠　原　天　馬	事象に主体的･対話的に働きかけ、考えを深めていく子供の育成
495	南砺市立上平小学校	教　諭	朝　日　志　穂	数理的な事象に主体的･対話的に働きかけ、考えを深めていく子供の育成
496	南砺市立利賀小学校	教　諭	中　田　直　毅	子供が自己決定をしながら取り組む授業づくり
497	南砺市立井波小学校	教　諭	前　本　優　馬	対話を通して主体的に学ぶ子供の育成
498		教　諭	酒　谷　眞　美	対話を通して主体的に学ぶ子供の育成
499		教　諭	尾　﨑　亮　介	対話を通して主体的に学ぶ子供の育成
500		教　諭	赤　坂　彩　佳	対話を通して主体的に学ぶ子供の育成
501		栄養教諭	杉　本　朔　実	安全で安心な学校給食を提供するための取組
502	南砺市立福野小学校	教　諭	野　澤　寛　人	理科におけるタブレット端末の効果的な活用方法

	学　校　名	職　名	氏　名	研　究　課　題
503	南砺市立福野小学校	教　諭	倉　田　路　紗	子供同士が関わり合い学び合う授業の工夫
504		教　諭	三　部　晴　夏	脳がアクティブに働く関わり合いを目指して
505		臨任講師	小　嵐　湧　仁	児童一人一人を大切にした指導の工夫
506		教　諭	齊　藤　　遥	子供たちが問いをもち、楽しく学び合える授業
507	南砺市立福光中部小学校	教　諭	本　多　　翔	障害のある児童が自信をもって活動するための支援の在り方
508		教　諭	畑　腰　征　志	自分の考えをもち、友達と関わりながら考えを明確にしていく児童の育成
509		教　諭	河　合　郁　音	粘り強く学習に取り組む児童の育成
510		教　諭	中　島　昇　平	主体的に問題解決に取り組む児童の育成を目指して
511		教　諭	真　栗　一　嘉	主体的に器械運動に取り組む児童の育成
512		教　諭	杉　本　愛　華	主体的･対話的に活動する子供の育成
513	南砺市立福光東部小学校	教　諭	岸　澤　靖　子	自ら疑問をもち、対話を通して高め合い、表現する子供の育成
514		教　諭	田　中　　慶	資料を読み取り、自分の考えを表現し、問題を解決しようとする子供
515		教　諭	太　田　千　秋	音楽的な見方･考え方を働かせ、音楽と豊かに関わろうとする子供の育成
516		教　諭	田　中　朋　代	進んで自分の思いを伝え合う子供の育成
517		教　諭	中　村　優　太	自ら疑問をもち、対話を通して高め合い、根拠･理由を明示して表現する子供を目指して
518		教　諭	山　崎　春　花	友達の考えを聞いて自分の考えを見直したり、自分の思いを再確認したりできる子供の育成
519		教　諭	愛　宕　竜　生	自ら疑問をもち、対話を通して高め合い、表現する子供の育成
520		教　諭	水　口　恵美子	言語活動において楽しみながら自分の思いを表現する子供の育成
521	朝日町立朝日中学校	臨任講師	大　島　光　葵	タブレットを使い、主体的に取り組む授業の工夫
522		教　諭	舟　本　　祐	生徒のよさを引き出すグループ活動の工夫
523		教　諭	岩　田　寿　浩	ICTを利用し、主体的に学ぶ生徒の育成
524		教　諭	小　坂　健　太	デジタル教科書を活用しつつ、生徒が学習の軌跡を残すことのできる指導の工夫
525	入善町立入善中学校	教　諭	西　川　ゆりの	運動への参加意欲を高める工夫
526		教　諭	藤　木　将　人	多様な意見や感じ方をもとに考える特別の教科道徳の授業
527		教　諭	池　原　沙　織	英語科における互いから「学び合う」授業の実践
528		教　諭	佐　藤　直　也	主体的な理科授業を進める工夫について
529	入善町立入善西中学校	教　諭	田　村　論　士	ICTの活用やグループ学習等を生かした授業の工夫
530		教　諭	開　沢　佳　弘	体験的な活動を取り入れた思考力育成の学習に関する考察
531		教　諭	大　和　跳治郎	生徒同士の学び合いがある授業の工夫
532		教　諭	舛　田　　翔	生徒が自ら学びを深められるような教材の工夫
533		臨任講師	濱　田　将　平	健康の保持増進のための課題を発見し、よりよい生活に改善しようとする生徒の育成
534	魚津市立西部中学校	教　諭	植　木　　惇	よりよい学級に向けて主体的に取り組む生徒の育成
535	滑川市立滑川中学校	教　諭	中　田　　薫	タブレットを活用した効果的な授業実践の探索
536		教　諭	堀　　瑶	情報整理の手法を活かした授業の工夫と実践
537	滑川市立早月中学校	教　諭	渡　邊　慎　也	ICT機器を活用した社会科授業の工夫
538		教　諭	高　野　佳　之	コミュニケーションの基礎を養うにはどのように指導したらよいか
539	富山市立芝園中学校	教　諭	寺　崎　宏　昭	生徒が主体的･対話的に取り組むことを目指した授業
540		教　諭	岡　本　奎　一	一人一台端末を活用した主体的･対話的で深い学びを実現する授業の在り方
541		教　諭	上　子　千　尋	生徒が主体的に学ぶ数学科の授業のあり方について
542		教　諭	村　﨑　凌　也	国語教育の実践報告
543		教　諭	五十嵐　大　輔	主体的･対話的に取り組む授業づくりとICT機器の活用
544		教　諭	荒　谷　明日香	確かな学力の向上と豊かな心の育成

	学　校　名	職　名	氏　名	研　究　課　題
545	富山市立芝園中学校	教　諭	上　田　七　海	Chromebookを活用した英語科の授業実践
546	富山市立堀川中学校	教　諭	川　上　　馨	生徒が主体的に英語を活用できる授業の工夫
547		教　諭	寺　元　一　馬	探究する意欲を引き出す授業の工夫
548		教　諭	竹　橋　彩　乃	「学び合い」を通した生徒のよさを引き出す授業の工夫
549		教　諭	関　岡　真　衣	国語科の授業におけるタブレットの活用の有用性について
550		教　諭	舟　崎　哲　夫	「教えて考えさせる授業」を取り入れた国語科指導法の工夫
551		教　諭	森　　紗矢香	タブレットを活用した公民科の指導について
552		教　諭	島　上　　翼	ICT機器を用いた生徒のよさを引き出す指導の工夫
553		教　諭	福　島　侑　太	ICTを活用し、協働的に課題解決を図る指導の工夫
554		教　諭	澤　村　祐　矢	生徒の深い学びの実現に向けた社会科授業の工夫
555	富山市立東部中学校	教　諭	三　上　卓　宏	数学の授業における理解を深める視覚的な教材の工夫
556	富山市立南部中学校	教　諭	北　澤　春　香	生徒が互いに認め合い、高め合う授業の工夫
557		教　諭	高　尾　尚　多	生徒全員が積極的に参加できる言語活動を取り入れた英語の授業の工夫
558		教　諭	朽　木　百　花	音楽的思考を育成する授業の工夫
559		教　諭	小　鳥　慎　也	生徒の興味・関心を高める授業の工夫
560		教　諭	川　内　さゆり	英語の5領域を意識した、「表現力」を伸ばす授業の工夫
561	富山市立北部中学校松風分校	教　諭	加　治　幸　代	関わり合いの中で学び合う授業を目指して
562	富山市立新庄中学校	教　諭	片　岡　　南	ICTを活用した理科の授業における実践
563		教　諭	竹　田　周　生	数学科における思考力・判断力・表現力を育む活動の工夫
564		教　諭	金　川　未　蘭	ICT機器を活用した授業の工夫
565		教　諭	松　井　　暉	生徒が自ら考え、行動する学級にするためにはどうしたらよいか
566		教　諭	西　本　晴　哉	学級活動におけるクロームブックの効果的な活用方法について
567		教　諭	浅　野　友　紀	学級活動におけるクロームブックの効果的な活用について
568		教　諭	丸　山　　遥	生徒が自分の学びと変容について客観的に振り返るための工夫
569		教　諭	北　村　晴　奈	生徒に興味をもたせる数学の授業の在り方
570		教　諭	上　村　　遼	ICTを活用した力学の授業実践
571	富山市立山室中学校	教　諭	杉　本　裕　美	クロームブックを使った社会科の授業実践
572		教　諭	中　井　　蛍	自分の考えを表現することへの苦手意識を減らすために
573		教　諭	山　﨑　模　菜	生活との結び付きを意識した理科学習の工夫
574	富山市立呉羽中学校	教　諭	高　橋　泰　臣	クロムブックを活用した主体的な学びを追究する授業の研究
575		教　諭	大　島　未乃里	生徒が必要感をもって学習に取り組める授業の工夫
576		教　諭	江　尻　小　春	生徒が主体的に学級づくりに参加する授業実践の工夫
577		教　諭	奥　澤　敦　子	学級における双方向の関わり合いを目指して
578	富山市立興南中学校	教　諭	山　崎　朝　香	生徒が主体的に課題に取り組む教材研究のあり方
579		教　諭	宮　森　一　真	授業におけるICTの活用について
580	富山市立大沢野中学校	教　諭	服　部　雄　大	クラス対抗戦で主体的に学習に取り組む態度を養う
581		教　諭	中　田　雄　也	リズムを重視した運動と対話的な学びの実践
582		教　諭	室　　早　織	ユニバーサルデザイン教育に視点を置いた、学習環境づくりについて
583		教　諭	酒　井　ももこ	生徒の学習の基盤となる言語能力を身につけるための授業の工夫
584		教　諭	岡　田　春　子	「基礎的・基本的な技能」の習得を目指した保健体育科の授業の工夫
585		教　諭	石　川　　卓	Chromebookを活用した学級経営
586		教　諭	鬼　頭　克　典	「分かる・できる・楽しい」授業づくりを目指して

	学　校　名	職　名	氏　名	研　究　課　題
587	富山市立速星中学校	教　諭	太　田　星　羅	計算に対する苦手意識を減らす授業の工夫
588		教　諭	池　原　久瑠美	ICTを用いた授業の工夫
589		教　諭	星　野　来　季	「読むこと」と「書くこと」をつなげる授業の工夫
590		教　諭	柿　畑　直　哉	主体的に学ぶ授業の在り方
591		教　諭	桶　谷　悠　祐	問題解決学習法による主体的･対話的深い学びの実現
592		教　諭	五　本　大　将	社会科における思考力を高める発問と資料提示の工夫
593		教　諭	高　木　佐和子	中学国語3年「握手」：指文字を基に考えを深める授業
594		教　諭	臼　澤　菜々子	生徒が「音楽の楽しさ」を感じられる授業を目指して
595		教　諭	中　村　美　穂	実生活との関わりが感じられる地理･歴史の授業
596		教　諭	清　水　友　輝	生徒の英語に対する関心を引き付けるためのICTの活用について
597		教　諭	堀　田　真　志	実験器具の基本操作を習得する授業の工夫
598	富山市立山田中学校	教　諭	石　黒　雄　大	ICT機器を取り入れた理科授業の実践
599		教　諭	松　尾　湧　斗	小中学校間の円滑な連携･接続を目指す外国語科の指導の在り方
600	富山市立楡原中学校	教　諭	鈴　木　友　之	1人1台PCを使った「多面的･多角的」に考えを深める「特別な教科 道徳」の授業の実践
601		教　諭	清　崎　凌　太	社会科における、「多面的･多角的」な考え方を深める1人1台PCを活用した授業の実践
602		教　諭	宮　井　杏　理	外国語科における音読･スピーキング指導の工夫
603	射水市立射北中学校	教　諭	橋　本　晃　洋	SDGsの達成に向けた、日常の授業展開を考える
604	射水市立小杉南中学校	教　諭	阿　部　哲　也	「主体的に学習に取り組む態度」をどう育み、測り、生かすか
605		教　諭	谷　口　純　平	主体的･対話的な学びができる生徒の育成を目指して
606	高岡市立南星中学校	教　諭	加　藤　泰　紀	マット運動において音楽を使用することで得られる効果とその優位性
607		教　諭	金　田　侑　子	ICTを活用し、主体的に取り組むことができる授業展開の工夫
608		教　諭	老　田　皆　実	先行学習を取り入れた学びの実感がもてる授業展開の工夫
609		教　諭	井　田　幸　佑	国語科の授業におけるICT機器の活用について
610		教　諭	苅　部　優　希	前回り受け身の習熟に向けたスモールステップと学習展開の工夫
611		教　諭	出　村　知　子	意欲をもって授業に取り組む生徒を育成するにはどうしたらよいか?
612		教　諭	平　瀬　正　樹	英語の基本的な文法知識を身につけるための方策
613		教　諭	和　田　祐　希	生徒の学ぶ意欲を高める授業展開の工夫
614		教　諭	猪　又　悠　平	生徒が主体的･対話的に問題解決に取り組むことができる授業展開の工夫
615		教　諭	林　　孝　之	生徒が主体的に取り組むことができる授業展開の工夫
616	高岡市立伏木中学校	教　諭	大　窪　翔　子	自己表現を促すICT機器の活用方法と実生活に即した場面設定での表現活動の工夫
617		教　諭	渡　邉　鈴　香	ICT機器を活用し、思いや意図をもって音楽表現する力を育む授業の工夫
618	高岡市立福岡中学校	教　諭	田　賀　也功志	生徒の学習意欲を高め、家庭学習につなげる授業展開の工夫
619		教　諭	城　石　正　樹	生徒の主体的な学習活動につなげるICT機器活用の工夫
620		教　諭	松　田　　陸	生徒の学びに向かう意識を引き出すためのICT機器の活用
621		教　諭	米　島　　栞	ICT機器を活用した音楽科と特別支援学級の授業の工夫
622		教　諭	竹　内　優　香	柔道の授業における安全で効果的な投げ技の指導の工夫
623	小矢部市立蟹谷中学校	養護教諭	西　島　由　莉	自分の健康に関心をもち、よりよい生活を実践しようとする生徒の育成
624		教　諭	杉　森　太　一	道徳的価値について思考を深めるための発問の工夫
625		教　諭	金　　智　子	英語授業におけるICTの有効活用
626	砺波市立庄川中学校	教　諭	荒　俣　雄　輝	1人1台端末を活用した問題解決型学習について
627	南砺市立井波中学校	教　諭	永　田　倫　之	一人一台端末を活用した社会科の実践
628		教　諭	北　澤　秀　昌	観察、実験等を行い、科学的に探究する力を養うための指導の工夫

	学　校　名	職　名	氏　名	研　　究　　課　　題
629	南砺市立福野中学校	教　諭	長谷川　輝　和	形や色が与えるデザインの効果について考えを深める学習の工夫
630		教　諭	中　山　麻　美	随筆文学から自己のものの見方や考え方を深めるための実践の工夫
631	高岡市立国吉義務教育学校	教　諭	島　林　未　夢	主体的な学びを支える授業づくり
632		教　諭	近　藤　雄　哉	対話を通して、自分の考えを深めようとする児童の育成
633		教　諭	竹　村　　計	ICTを積極的に活用した数学科学習指導の在り方
634	富山県立中央農業高等学校	教　諭	橋　本　　樹	主体的な態度を育てるための効果的なICTの活用
635		教　諭	大　井　裕　介	GISを用いた地理Aの授業展開
636	富山県立福岡高等学校	教　諭	荒　井　琢　巳	ウェブを用いた補助資料の提示による「知識を定着させ、関心を高める」指導
637	富山県立富山視覚総合支援学校	教　諭	吉　村　真由子	ICT機器を用いた、自己理解を深める活動について
638	富山県立富山聴覚総合支援学校	教　諭	南　部　峻　弥	生徒が主体的に取り組む製図の授業
639	富山県立しらとり支援学校	教　諭	斉　田　大　輝	主体性を引き出す生活単元学習の授業デザイン
640	富山県立高志支援学校	教　諭	木　曽　絢　香	ICT機器を活用した授業の工夫
641	高朋高等学校	教　諭	星　野　英　伸	生徒指導の機能を生かした授業作り
642		教　諭	滝　上　圭　子	目的や場面、状況に応じたコミュニケーション能力を育成するための授業づくり
643		教　諭	小　池　拓　斗	部活動における上下関係が及ぼす影響について
644		教　諭	渡　邉　　慎	生徒の基本的生活習慣を改善するための指導の在り方

令和3年度
実　践　報　告　集

編集・発行　令和4年2月1日発行

公益財団法人　日本教育公務員弘済会富山支部
URL：http://www.nikkyoko.or.jp/company/toyama
〒930－0018　富 山 市 千 歳 町 1 丁 目 5 番 1 号
富山県教育記念館内
TEL　076－432－6562　　FAX　076－432－1766

印　　刷　中村印刷工業株式会社